都城市文化財調査報告書第25集

久玉遺跡第5次発掘調査

油田遺跡

正坂原遺跡

1993. 3

都城市教育委員会

油田遺跡全景（真上より）

正坂原遺跡遺構検出状況

正坂原遺跡完掘状況

序

本報告書は平成４年度都城市教育委員会が発掘調査を実施した遺跡の概要報告書です。掲載した遺跡は、祝吉・郡元地区区画整理事業に係る久玉遺跡の第５次発掘調査、小松原地区市民広場造成に係る正坂原遺跡発掘調査、民間開発に係る油田遺跡発掘調査です。久玉遺跡は中世から近世の集落跡が部分的にではあるが解明されつつあります。正坂原遺跡は中世の一時期の集落の変遷が辿れる貴重な遺跡です。また、油田遺跡は縄文晩期の貴重な資料を提供しています。

本書が市民をはじめ多くの方々の文化財に対する理解を深め、さらに学術研究に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、関係した各機関や地元の皆様をはじめ発掘調査に従事した作業員の方々の御理解と御協力に対し、心から感謝を申し上げます。

平成５年３月

都城市教育長　隈　元　幸　美

例　言

1．本書は都城市教育委員会が平成４年度郡元・祝吉地区区画整理事業に係る久玉遺跡第５次発掘調査、小松原地区運動公園造成に係る正坂原遺跡、民間開発に係る油田遺跡の各発掘調査の概要報告書です。

2．本書の作成編集は久玉遺跡第５次調査及び正坂原遺跡については矢部喜多夫、油田遺跡については、横山哲英が行い、全体の構成編集は矢部が行った。また、遺構実測図及び遺物実測図の作成については、各現場の作業補助員並びに都城市埋蔵文化財整理補助員の協力を得た。

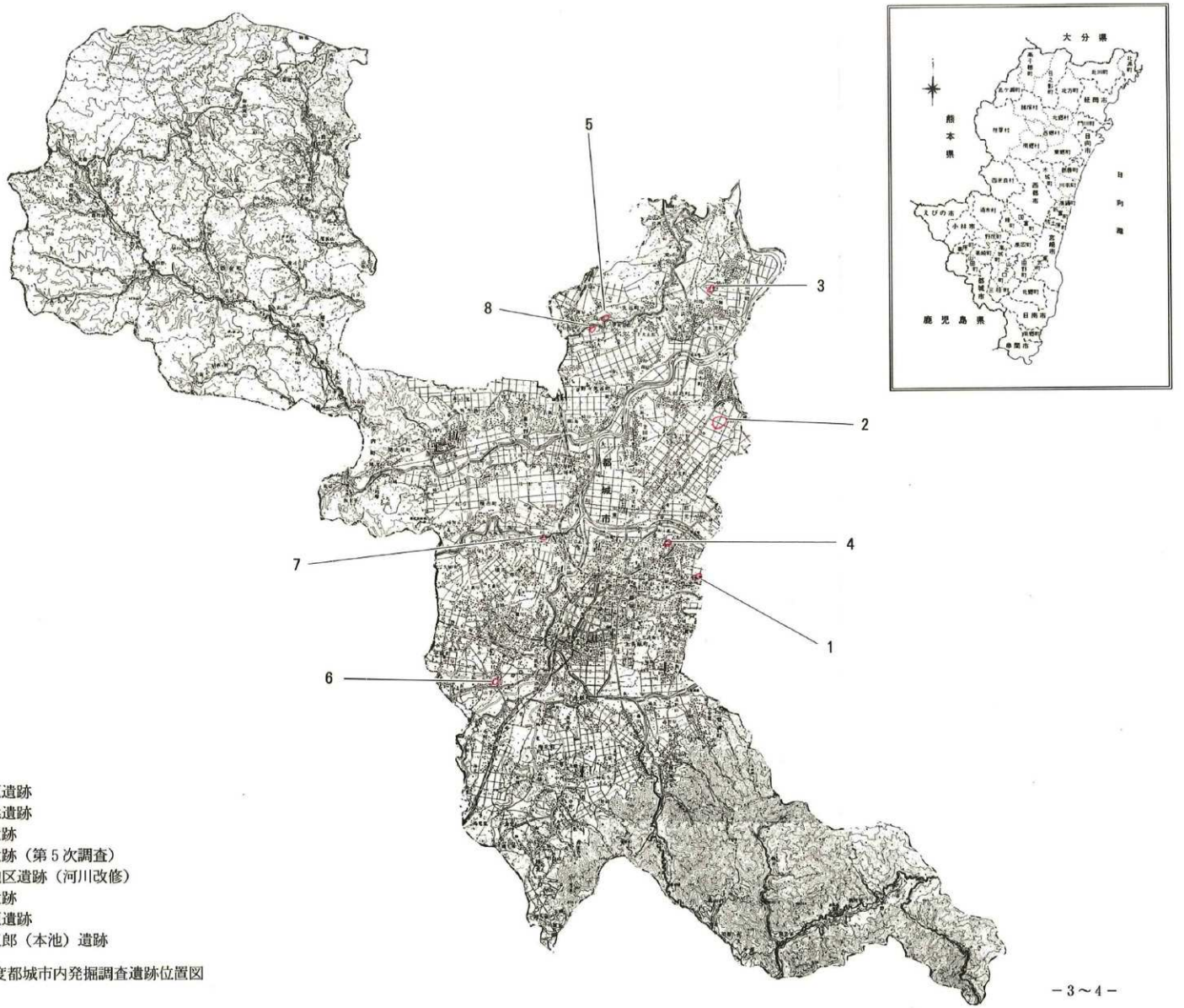
3．本書で用いた方位はすべて磁北である。

4．久玉遺跡第５次調査、正坂原遺跡及び油田遺跡から出土した陶磁器類に関しては、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）からご指導を賜った。

5．出土した各遺跡の遺物は都城市文化財整理収蔵室に保管している。

目　次

1．口絵カラー
2．序
3．例言・目次 …… 1
4．平成４年度都城市内発掘調査遺跡位置図 …… 3～4
5．久玉遺跡第５次調査 …… 5
6．油田遺跡 …… 31
7．正坂原遺跡 …… 69
8．平成４年度都城市内発掘調査一覧表 …… 101



1　天神原遺跡
2　並木添遺跡
3　築池遺跡
4　久玉遺跡（第５次調査）
5　丸谷地区遺跡（河川改修）
6　油田遺跡
7　正坂原遺跡
8　上大五郎（本池）遺跡

平成４年度都城市内発掘調査遺跡位置図

久玉遺跡第5次調査

Ⅰ　調査に至る経緯

祝吉・郡元地区区画整理事業は昭和50年から実施され、すでに77.5haの土地が区画整理されている。それに伴う発掘調査は昭和55年を最初に平成４年度までに都合８回の調査を終了している。本年度、 都城市都市整備課の実施する同地区の区画整理事業面積は約3.6haである。同年４月、同課と遺跡の取扱いについて協議を行った結果、現況が畑地もしくは荒地の発掘可能な場所五地区面積約1,500㎡について、同年６月４日から７月31日までの予定で調査を行うこととした。

第１図　遺跡位置図

Ⅱ　調査の概要

久玉遺跡は都城市郡元町字久玉に所在する。

遺跡は、大淀川の支流沖水川に浸蝕された都城市街地を形成する台地の北側縁部標高150ｍほどに立地し、北側低地水田との比高差は10ｍ程である。

祝吉・郡元町内には西から祝吉遺跡、松原遺跡そして久玉遺跡と中・近世を中心とした時期の遺跡が連続している。これら遺跡群のごく一部の発掘調査ではあるが、序々に遺跡の姿が浮かび上がりつつある。

第２図　郡元町内字図

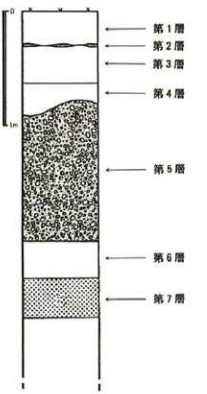
当遺跡の基本的な土層層序は、第１層が耕作土（灰黒褐色土）、第２層が文明期に桜島より噴出した軽石（通称：白ボラ）、第３層が黒褐色砂質土、第４層暗茶褐色砂質土、第５層御池ボラ、第６層漆黒粘質シルト、第７層アカホヤ……である。遺物包含層は、第３層の黒褐色砂質土層と第４層暗茶褐色砂質土層、遺構検出面は第４層下部である。

Ⅲ　調査の内容

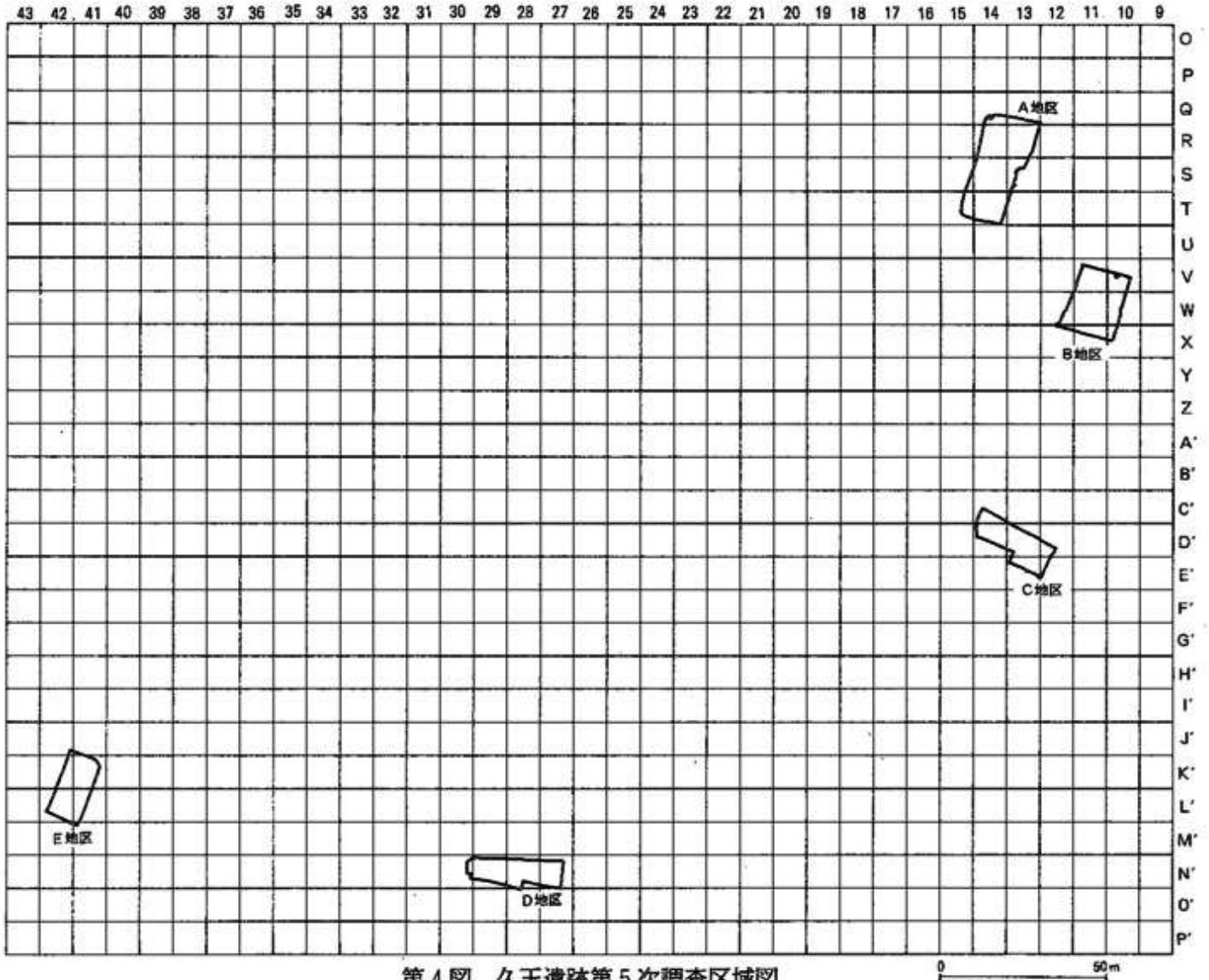
調査方法は久玉第１次調査で用いた公共座標のＮ・Ｓ線に一致したグリッドと同じ座標線を使用し、グリッドの呼称も久玉第１次調査で用いた南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字で表記する。また、今回五ケ所に分かれている調査区域を久玉Ｖ-Ａ地区（略記号KUV-Ａ）、久玉Ｖ-Ｂ地区（KUV-Ｂ）、久玉Ｖ-Ｃ地区（KUV-Ｃ）、久玉Ｖ-Ｄ地区（KUV-Ｄ）、久玉Ｖ-Ｅ地区（KUV-Ｅ）に分けて表記する。

①　久玉Ｖ-Ａ地区

調査面積約457㎡である。久玉Ⅲ-Ａ地区の南側、久玉Ⅳ-Ａ地区の東側隣接地に位置する。遺構は溝状遺構11条（うち硬化面を伴うもの３条）、井戸跡１基、掘立柱建物跡１基、土坑５基等である。ほかにピットが出土している。こ

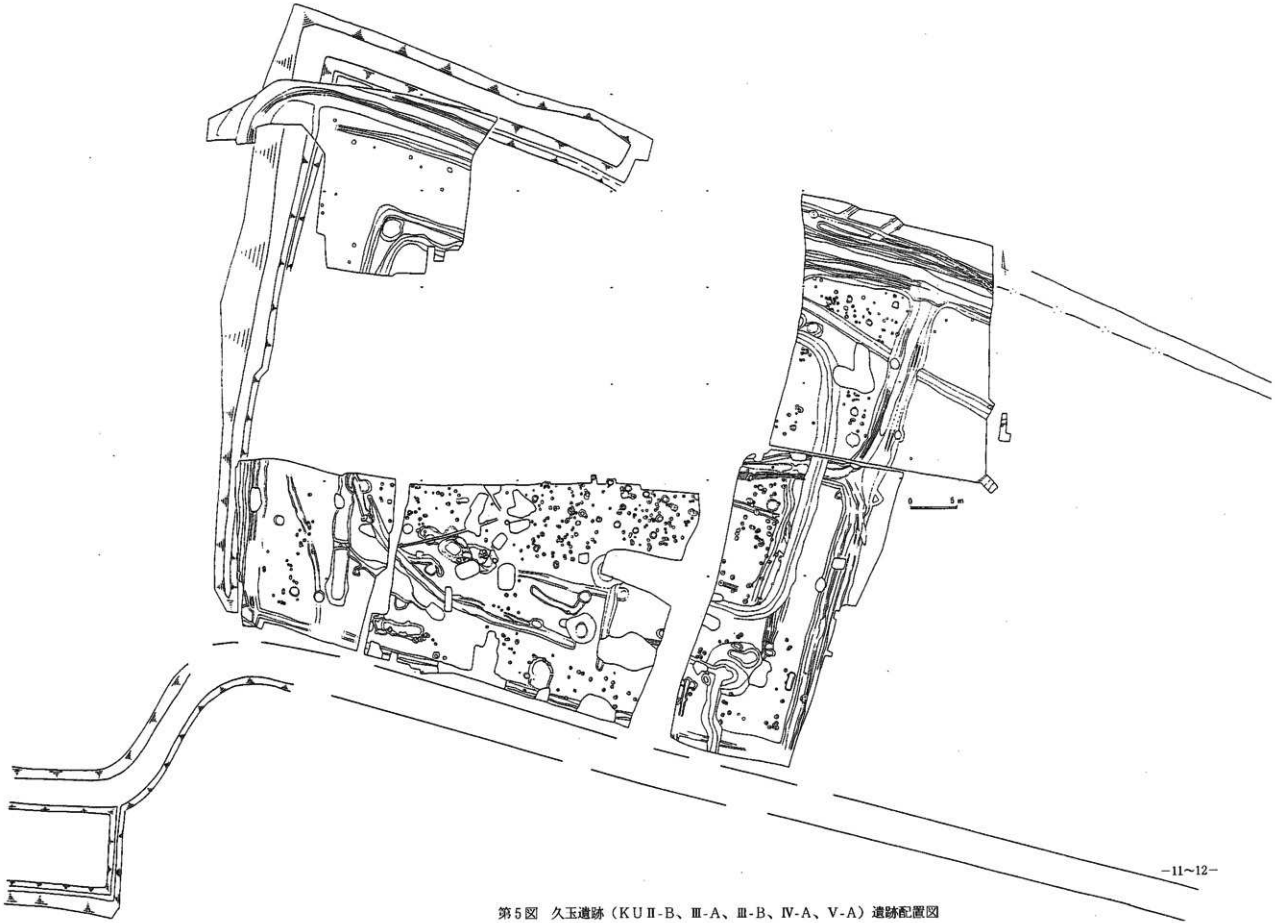


第３図　基本土層柱状図

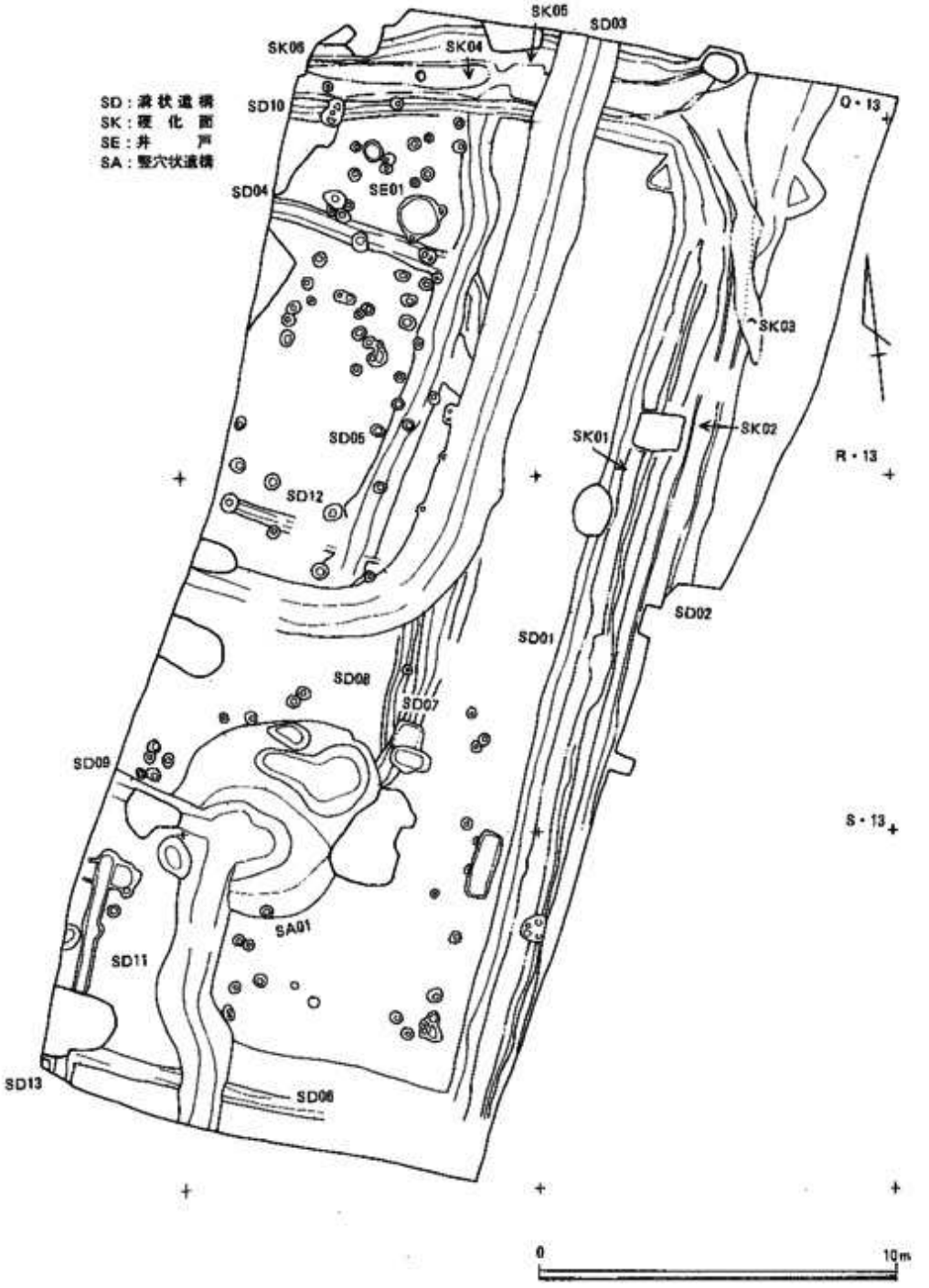


第4図　久玉遺跡第5次調査区域図

(X= 70-Y=-100)



第5図　久玉遺跡（KUⅡ-B、Ⅲ-A、Ⅲ-B、Ⅳ-A、Ⅴ-A）遺跡配置図



第６図　久玉遺跡第５次調査Ａ地区全体図

れらの遺構は文明期以前のものと近世以降のものに分けられる。

第1表　KUⅣ-A遺状遺構一覧

遺構名	規模（m）		断面形態	形態	特徴	埋土
	幅	深さ				
SD01	1～1.2	0.3～0.5	U字型	ほぼ直線的に南北方向に走行しQ－13区とR－13区の境界で西に直角に折れそのまま延びる SD02と接するように並行走行	溝底直上に硬化面（SK01）を有する	第3層
SD02	1.5	0.5～0.6	U字型	ほぼ直線的に南北方向に走行し、R-13区で部分的に2層の硬化面（SK02・SK03）を有する SD01と接するように並行走行		第3層+白ボラ
SD03	1.5～2.0	0.6～0.8	V字型	略北北東から直線的に南に走行し、緩やかにカーブして西に延びる （KUⅣ－AのSD10に接続）	検出面付近に頭大ほどの自然礫や近世陶器が廃棄的に出土	第1層
SD04	0.5	0.2～0.3	U字型	R－14区から直線的に東に走行し南に曲折し延びる （SD05との前後関係不明・SD03に切られている）	SD07に連続する	第3層
SD05	0.7～1.0	0.15～0.26	U字型	R－14区北側境界からやや蛇行気味に南に走行		第3層
SD06	0.5	0.2	U字型	調査区南端を略東西方向に直線的に走行	SD01ないしSD02に接続すると思われる	第3層
SD07	0.6～0.9	0.2～0.3	U字型	S－14区中央SD03から直線的に走行	部分的にテラスを有する	第3層
SD08	0.5	0.1	U字型	S－14区中央SD03からSD07と並行的に走行		第3層
SD09	1.1	0.2	U字型	東西方向に直線的に走行		第1層
SD10	0.5	0.5	U字型	東西方向に走行		第3層
SD11	1.3～1.6	0.7～0.8	U字型	T－14区とT－15区SA01からやや蛇行しながら直線的に南に走行	廃水的機能を有していたと思われる	第1層
SD12	0.4～0.5	0.1	U字型	S－14区を直線的に東西方向に走行	SD08に接続すると思われる	第1層
SD13	0.5		U字型	T－15区を直線的に東西方向に走行		第1層

第2表　KUV-A硬化面一覧

遺構名	規模（m）		断面形態	形態
	幅	深さ		
SK01	0.4	0.05	偏平状	SD01内を走行しR－13区北側で消失
SK02	0.5	0.1	偏平状	SD02内を走行
SK03	0.5～0.7	0.1	偏平状	R－13区の北側境界からSD02内のSK02上を走行し、SD02を斜めに上がり消失
SK04	0.5	0.04	偏平状	Q－14区を東西方向に走行　白ボラを含む硬化面（SK05の直上）
SK05	0.5～1.0	0.1	偏平状	Q－14区を東西方向に走行し、Q－13区で緩やかに略北方向へ曲折する
SK06	0.5	0.1	帯状硬化面	Q－14区を東西方向に走行し、Q－13区で緩やかに略北方向に折れる

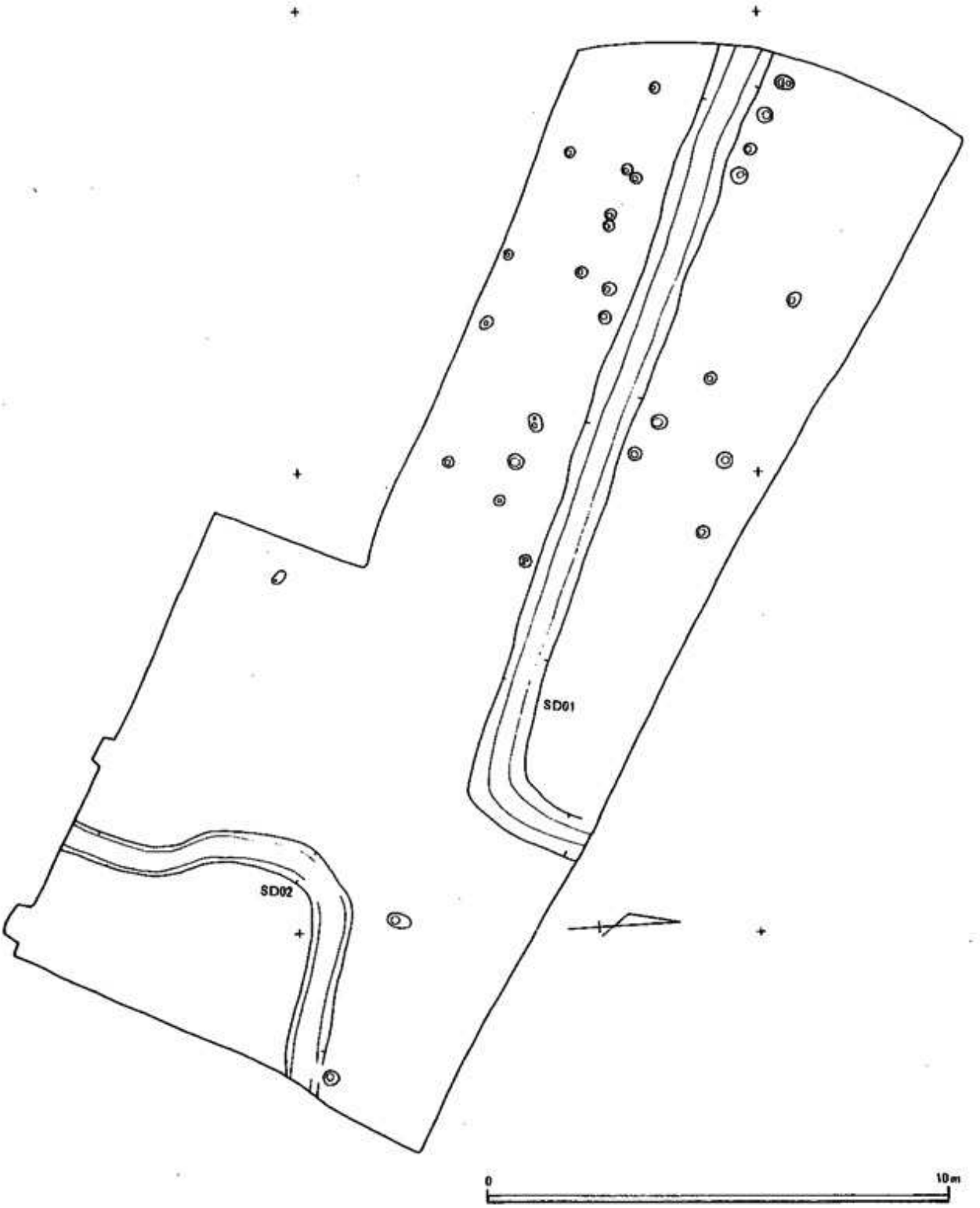
② 久玉V-B地区

調査面積約378㎡である。久玉V-A地区の南東側に位置する。遺構は溝状遺構6条、井戸跡1基、多数のピットが出土している。ピットは埋土によって2時期に大別される。

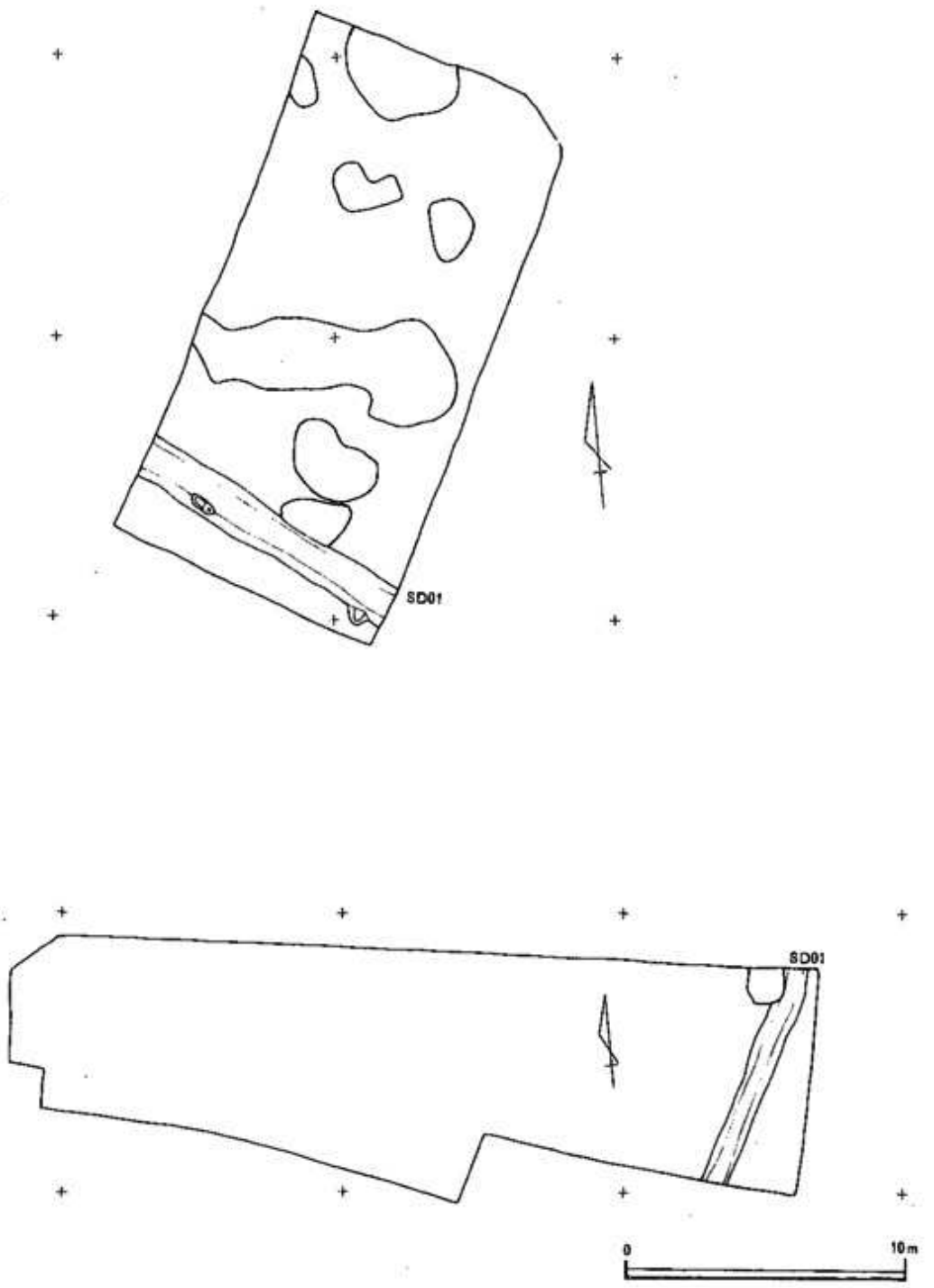
第3表　KUV-B溝状遺構一覧

遺構名	規模（m）		断面形態	形態	特徴	埋土
	幅	深さ				
SD01	−		V字型	南北方向に直線的に走行		第1層
SD02	0.7	0.1〜0.3	U字型	SD01に接続		第1層
SD03	0.5	0.1	U字型	調査区中央を東西方向に走行		第3層
SD04	0.6	0.1	U字型	南側調査区から北方向へ走行		第1層
SD05	0.6		U字型	南側調査区から北方向へ走行		第1層
SD06	0.7〜0.9	0.3	U字型	SD02の東西方向延長線上を直線的に走行		第1層

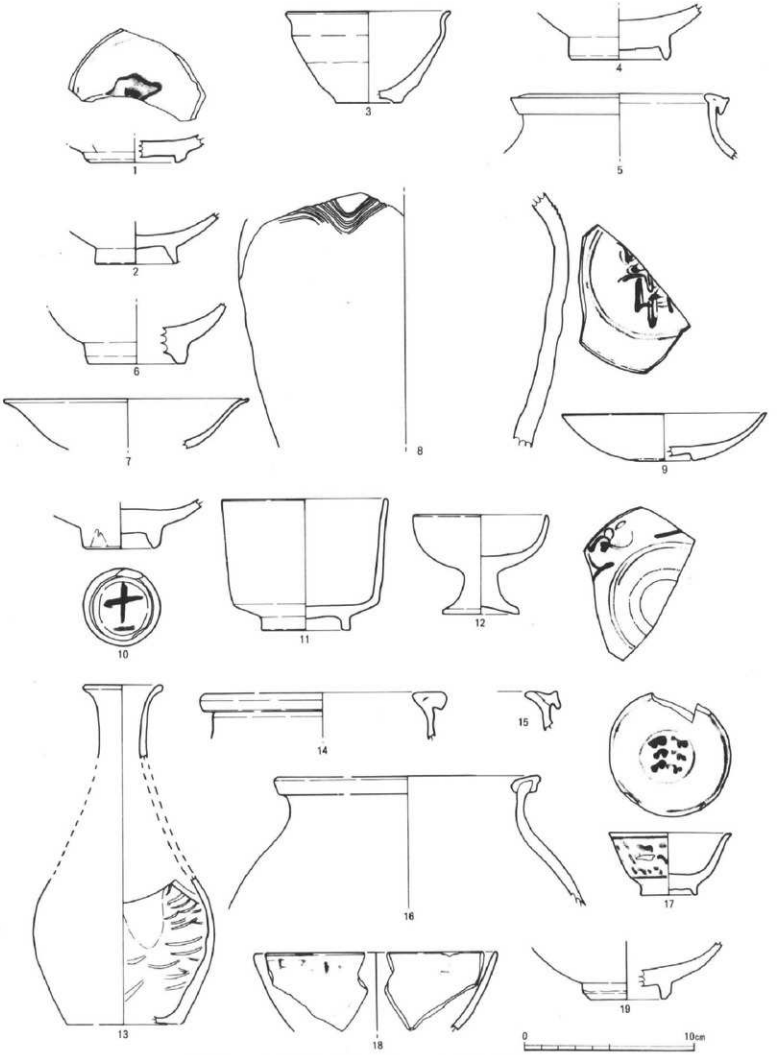
第7図　久玉遺跡第5次調査B地区全体図



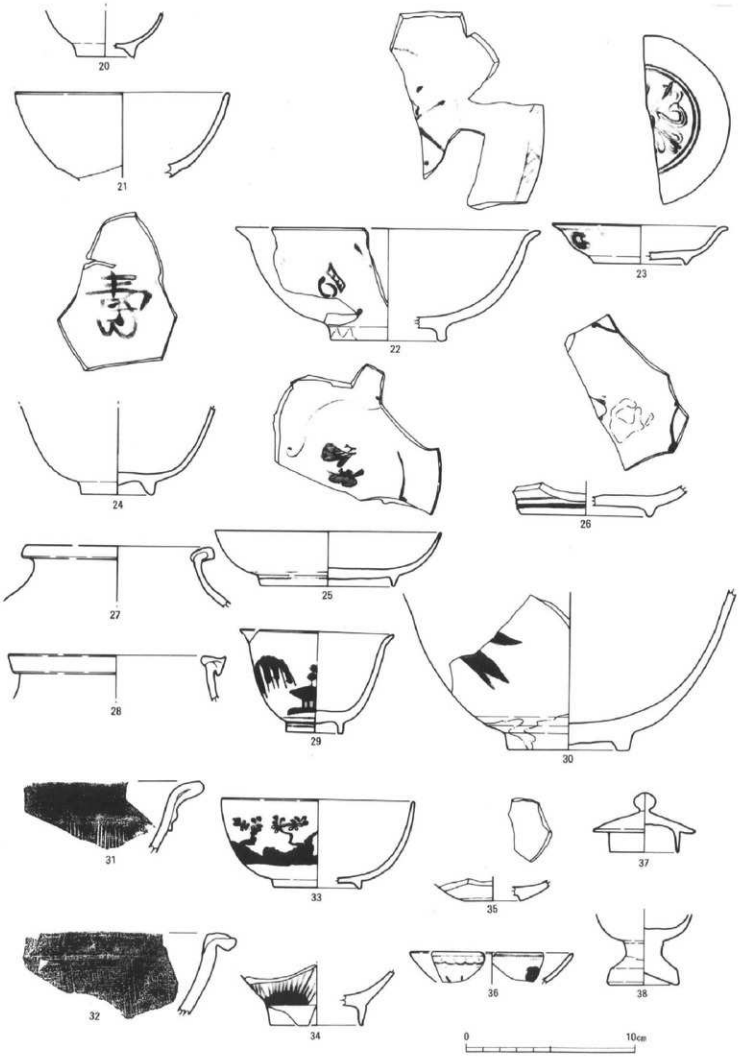
第８図　久玉遺跡第５次調査Ｃ地区全体図



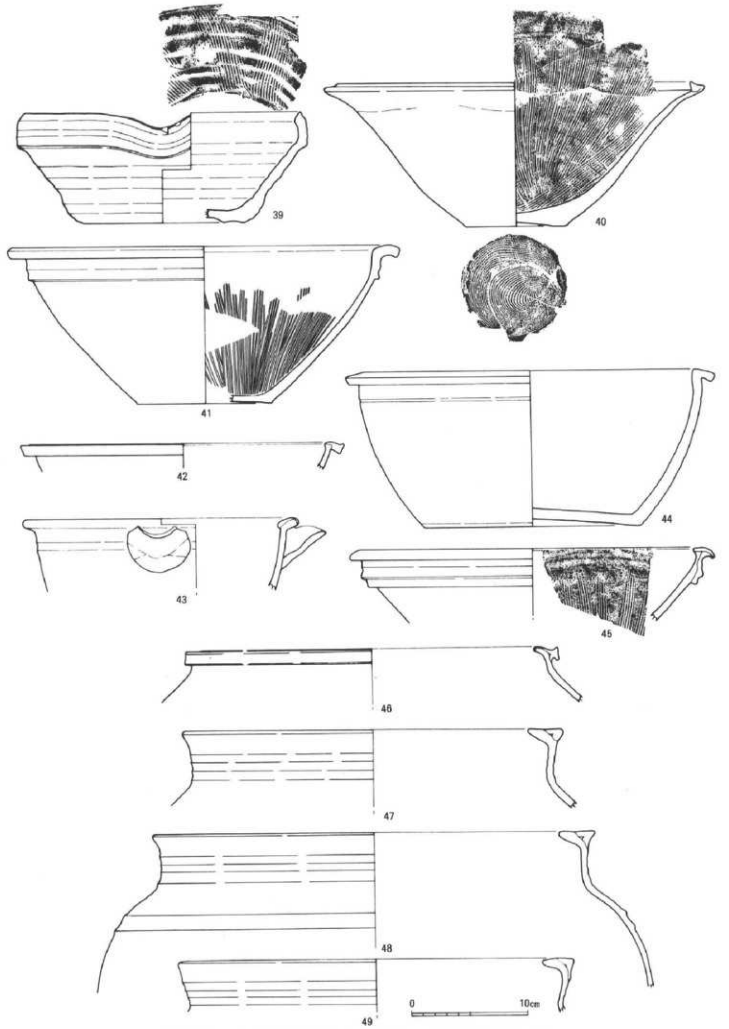
第９図　久玉遺跡第５次調査Ｄ地区（下）・Ｅ地区（上）全体図



第10図　久玉遺跡第５次調査出土遺物実測図　(1)



第11図　久玉遺跡第５次調査出土遺物実測図　(2)



第12図　久玉遺跡第５次調査出土遺物実測図　(3)

③ 久玉V-C地区

調査面積約214㎡である。溝状遺構が2条出土した。溝の全体的な形態は不明であるが、両者ともコーナーを一つずつ所有している。埋土から近世であるが、両者の相対的な時期差は不明である。ほか、調査区西側でピットを疎らに検出した。

第4表KUV-C　溝状遺構一覧

遺構名	規模(m)		断面形態	形態	特徴	埋土
	幅	深さ				
SD01	1.0～1.2	0.2	U字型	直線的に走行し、ほぼ直角に屈曲し延びる	溝の全容は方形を呈すると思われる	第1層
SD02	0.8	0.2	U字型	張出し気味の屈曲部を有する		第1層

④ 久玉V-D地区

調査面積約206㎡である。溝状遺構が1条出土した。溝の走行方向は略南北方向である。

第5表　KUV-D溝状遺構一覧

遺構名	規模(m)		断面形態	形態	特徴	埋土
	幅	深さ				
SD01	1.0	0.2	U字型	南北方向に直線的に走行		第1層

⑤ 久玉V-E地区

調査面積約201㎡である。調査区内は調査前に家屋の取壊しのためかなり攪乱を受けていた。遺構は溝状遺構を東西方向に1条検出した。遺物の出土はなかった。

第6表　KUV-E溝状遺構一覧

遺構名	規模(m)		断面形態	形態	特徴	埋土
	幅	深さ				
SD01	1.3	0.1～0.2	U字型	東西方向に直線的に走行		第1層

⑥ 遺物

遺物については、A・B地区以外、つまり、C・D・E地区では遺物の出土がほとんどなかった。A地区では中世（白ボラ以前）の遺構が検出していることと符号するように13世紀後半までさかのぼる青磁から16世紀代の青磁・青花等まで出土している。また、A・B地区で薩摩系の陶器が最も多く出土した。C・D・E地区で遺物の出土が少ないのは現代の攪乱以外に台地の南にいくほど主な遺構の密度が減少していることに起因すると思われる。

なお、主な遺物については第7表の観察表に示した。

第7表　久玉遺跡第5次調査掲載遺物一覧

（　）は反転復元

掲載番号	種別	器種	地区名 グリッド（遺構）	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	備考
1	青磁	碗	A地区 R－13 (SD1)	－	(6.2)	－	高台内無釉 見込み双魚文	13C後～14C中
2	薩摩	碗	A地区 (SD3)	－	5.0	－	高台内施釉（高台を台形状に削り出す）全体的に卵色	高麗茶碗の流れ 呉器手碗(雑器)
3	唐津	碗	A地区 Q－13・S－13 (SD2)	(10.0)	(5.5)	4.0	鉄釉（体部下部無釉）	1590～1630
4	青磁	碗	A地区 R－13 (SD2)	－	(5.8)	－	高台内施釉（円状に鉄サビ？付着）	
5	薩摩	甕	A地区 R－13 (SD2)	(13.2)	－	－	貝目痕	
6	青磁	碗	A地区 (SD3)	－	(6.0)	－	貫入有	14～15C中葉
7	唐津	皿	A地区 S－14 (SD3)	(14.6)	－	－	透明釉、口縁部重ね焼痕（砂目痕）清縁皿・貫入有	
8	備前	壺	A地区 (SD3)	－	－	－	肩部に自然釉	
9	青花	皿	A地区 (SD3)	(12.2)	(3.4)	2.8	高台内施釉（縁のみ無釉）碁笥底、見込み人形文字	景徳鎮
10	青磁	碗	A地区 T－14 (SD7)	－	4.7	－	高台内無釉 高台内に朱文字	粗製 15代
11	肥前	鉢	A地区 R－14 (SD3)	(10.0)	(5.2)	7.9	口縁無釉、高台に砂目付着 蓋付鉢、あや釉、鉄釉	17C前～中
12	薩摩	仏飯器	A地区 (SD3)	(8.2)	(4.6)	(5.98)	見込み蛇目釉剥ぎ	18～19C
13	薩摩	瓶	A地区 (SD3)	(4.8)	(6.8)	(20.35)	㊥タタキ	17C代
14	薩摩	甕	A地区 R－14 (SD3)	(14.8)	－	－	口唇部貝目痕	
15	薩摩	甕	A地区 R－14 (SD4)	－	－	－	貝目痕	
16	薩摩	壺	A地区 R－14 (SD3)	(16.0)	－	－	口縁肥厚部貼り付け？	
17	青花	小坏	A地区 S－14 (SD5)	7.0～7.6	3.6～3.8	3.4	端反り口縁　貫入有	福建 広東 16C中～末
18	青磁	碗	A地区 S－14 (SD7)	(14.6)	－	－	釉の著さ約0.7mm ㊥㊦留文帯	
19	青磁	碗	A地区 S－14 (SD7)	－	(4.6)	－	高台内無釉	粗製 14C末～15C中
20	白磁	小碗	B地区 (SD1)	－	(3.4)	－	清朝　合わせ焼　口縁無釉	19C代
21	青磁	碗	A地区 S－14、T－14 (SA01)	(12.8)	－	－	㊦櫛描文	15C後～16C中
22	青花	碗	A地区 (SD3・SD7)	(18.4)	(6.8)	6.7	端反り口縁　高台内無釉	福建・広東粗製 16C代
23	青花	皿	A地区 SD14 (SD7)	(10.6)	(5.6)	2.35	見込みに十字花文、端反り口縁	
24	青花	碗	A地区 S－13	－	(4.2)	－	貫入有 見込みに「寿」字文	
25	肥前 染付	皿	A地区 R－14、R－13	(13.6)	(8.2)	3.3	高台内・直径6.8cm幅1mm強の円形文様有ハリ支え、高台内施釉	高級品 1670～90年代

番号	種別	器種	地区名 グリッド (遺構)	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考
26	肥前 染付	皿	A地区 R－14	－	7.8	－	貫入有、見込みに五弁花（コンニャク印判）	
27	薩摩	甕	A地区 R－13	(11.0)	－	－	口縁肥厚部貼り付け？	
28	薩摩	甕	A地区 R－14	(13.0)	－	－	口唇部貝目痕 口縁肥厚部貼り付け？	
29	肥前 染付	碗	B地区 (SD1)	(9.2)	(3.5)	－	端反り口縁	17C末～18C初
30	唐津	鉢	A地区 R－13	－	(7.2)	－	鉄絵　胎土目積　片口鉢？	1580～1610
31	薩摩	擂鉢	B地区 (SD1)	－	－	－		
32	薩摩	擂鉢	B地区 (SD1)	－	－	－		
33	肥前 染付	碗	B地区 X－11 (SD5)	11.6	5.2	5.3		18C前～中
34	肥前 染付	碗	B地区 (SF01)	－	(5.6)	－	広東型	19C初
35	青花	皿	C地区 (SD1)	－	(3.4)	－	碁笥底　貫入有	福建・広東 16C代
36	染付	皿	C地区 (SD1)	(9.8)	－	－	碁笥底	
37	薩摩	蓋	B地区 (SD1)	(4.2)		－		
38	肥前	仏飯器	B地区 V－11 (SA1)	－	(4.2)	－		19C初～幕末
39	備前	擂鉢	A地区 R－13 (SD2)	(24)	(14)	9.6		16C代
40	唐津	擂鉢	A地区 R－14 (SD3)	(33)	(9)	12.5	口縁部付近のみ施釉 糸切り底部	17C前半
41	薩摩	擂鉢	A地区 R－14 (SD3)	34	11.8	13.6	貝目痕	櫛目一組(5本)
42	薩摩	鉢	A地区 (SD3)	28	－	－	貝目痕	
43	薩摩	鉢	A地区 S－14・T－14 (SA1)	32	18.8	13.5		18C
44	薩摩	片口鉢	B地区 (SD1)	(23.5)	－	－	口唇部無釉	
45	薩摩	擂鉢	A地区 Q－13・R－13	(30.8)	－	－	貝目痕	
46	薩摩	甕	A地区	(32.4)	－	－	口唇部貝目痕	
47	薩摩	甕	A地区 R－13	(33)	－	－	貝目痕	
48	薩摩	甕	A地区 R－13・R－14 (SD3)	(38.4)	－	－	貝目痕	
49	薩摩	甕	B地区 (SD1)	(34.2)	－	－	貝目痕	

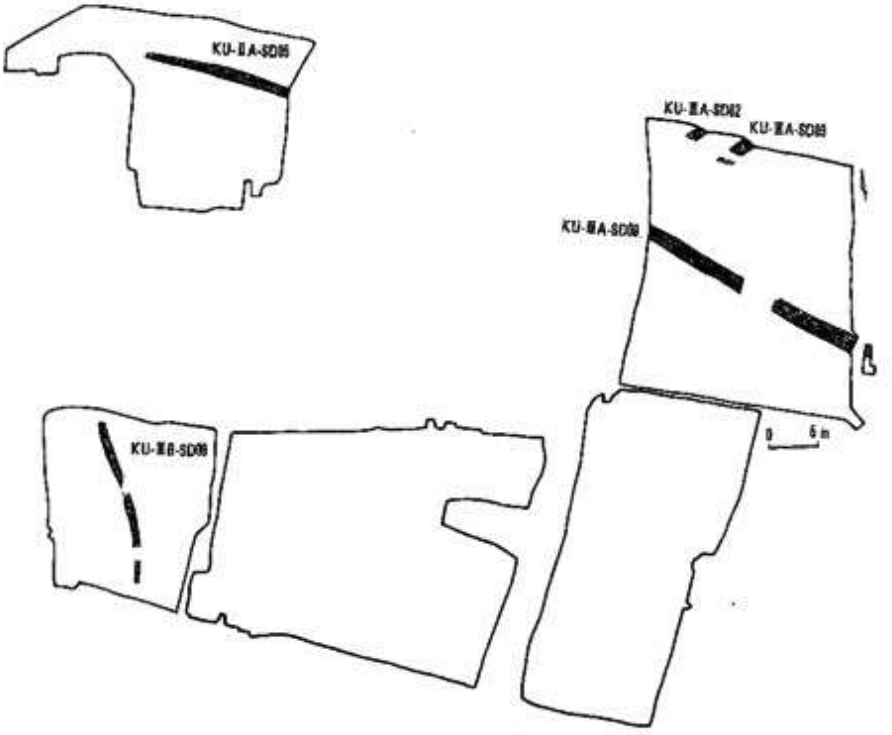
Ⅳ 小 結

久玉遺跡第５次調査は都合５ヶ所で発掘調査を実施したわけであるが、まず、大まかな傾向として遺跡の密度が北側台地縁辺部に比べ南に進む程低くなるようである。これは、Ｃ・Ｄ・Ｅ地区では、溝状遺構が１ないし２条程度の出土と極端に減少することから伺える。

Ａ地区に関して述べると、Ａ地区は久玉遺跡第２次、第３次及び第４次の発掘調査の成果と関連づけて検討を加えなければならない。以下、大まかではあるがＡ地区周辺の遺構の時期をかなりの推定を含みつつ述べていきたいと思う。Ａ地区の周辺は、KUⅡ-Ａ地区、KUⅢ-Ａ地区、KUⅢ-Ｂ地区、KUⅣ-Ａ地区、KUⅤ-Ａ地区と４回５地区の発掘調査を行っている。

第１期：13世紀後半から14世紀前半（第13図）

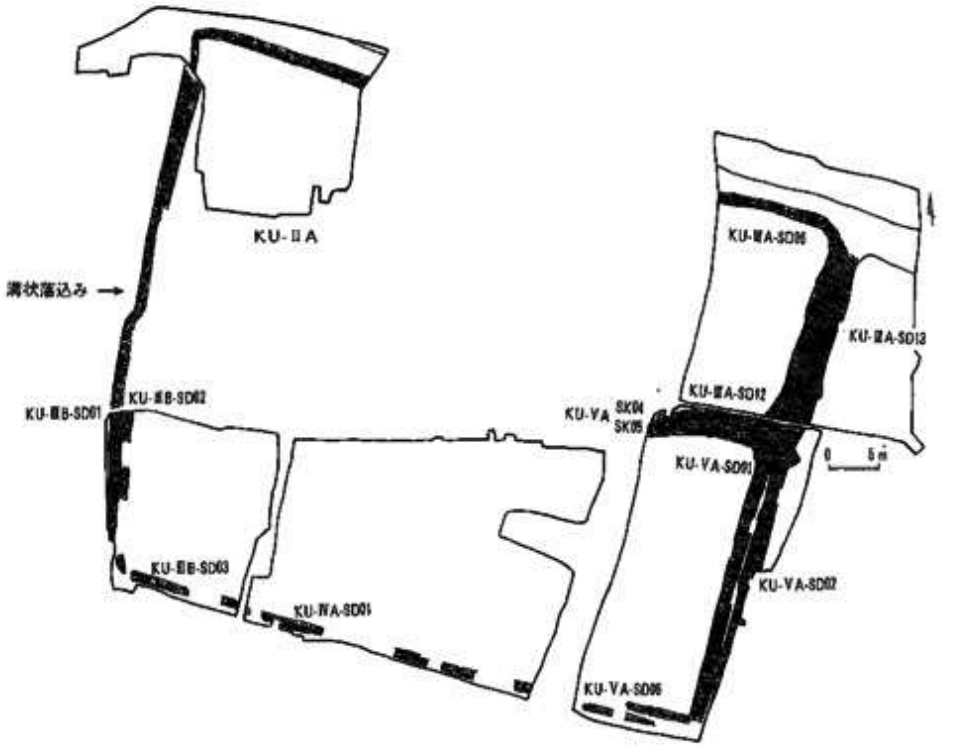
KUⅢ-Ａ-SD02・SD03・SD09、KUⅢ-Ｂ-SD08等の溝状遺構である。遺跡の密度はかなり疎で、遺構の全容は掴めない。KUⅢ-Ａ-SD09からは常滑（大甕）や土師器杯（ヘラ切り）が出土している。大甕の口縁形態より実年代は13世紀後半から14世紀前半に比定でき、土師器杯も古手の様相を示している。遺構の埋土も第３層で白ボラを全く含んでいない。



第13図　第１期：遺構配置図

第２期：白ボラ以前（14世紀後半から15世紀前半）の溝状遺構（道路）により方形に区画された屋敷跡（第14図）

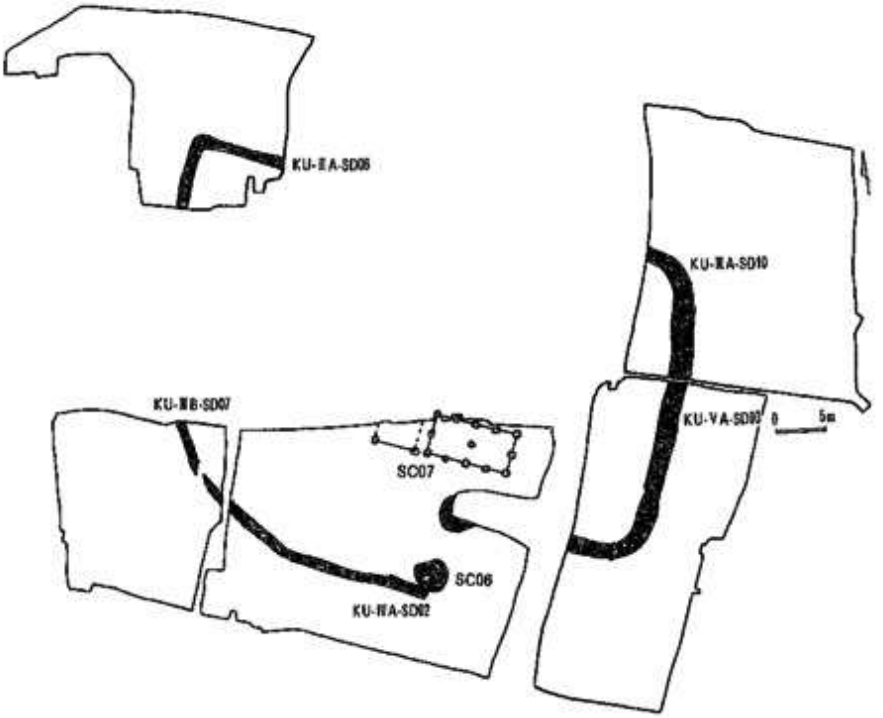
KUⅡ-A（浅い南北溝）、KUⅢ-A-SD12・SD13・SD06、KUⅢ-B-SD01・SD02・SD03、KUⅣ-A-SD01、KUⅤ-A-SD01・SD02・SD06とKUⅡ-AとKUⅢ-Bに挟まれた未調査地で現況が溝状落込みにより略方形に区画された区域。詳細については不明なところが多いが、一条ないし二条の溝状遺構を周囲に巡らす。東側で硬化面（道路：KUⅤ-A-SK04・SK05）が西へはいり込んだ形で、出入口的な機能を果たしていたと思われる。溝の埋土は基本的には第３層であるが、KUⅤ-A-SD01とSD02だけみても第３層だけのもの（SD01）と上位に白ボラがレンズ状に堆積しているもの（SD02）があり、長期的に使用していたことが伺えるが、15世紀の後半には完全に遺棄されているようだ。区画の規模は南北方向（推定）約51ｍ、東西方向（推定）約56ｍで面積約2,856㎡（865坪）の屋敷地である。内部施設に関しては不明である。

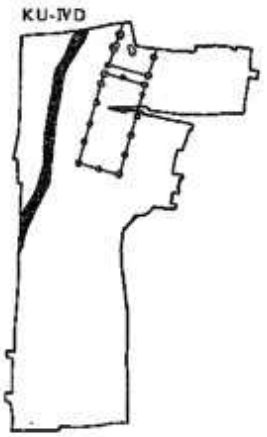


第14図　第２期：遺構配置図

第３期：近世の溝状遺構により方形状に区画された屋敷跡（第15図）

KUⅡ-A-SD06、KUⅢ-A-SD10、KUⅢ-B-SD07、KUⅣ-A-SD02・SC06・SC07、KUⅤ-A-SD03によって、略方形状に区画され、敷地内に大型の掘立柱建物跡が存在する。同地は南北方向(推定)約26m、東西方向(推定)約46mで面積約1,196㎡(362坪)の屋敷地と推定される。また、KUⅣ-D地区においても前記の掘立柱建物跡と棟方向が90°ずれた同規模の柱穴跡が検出されている。このことから、周辺部分にも何らかの関連をもった建物群の存在が思料される。遺物に関しては、KUⅢ-A-SD10やKUⅤ-A-SD03検出面やや下部から17世紀から18世紀代の陶器(薩摩焼)が廃棄的状態で堆積している。

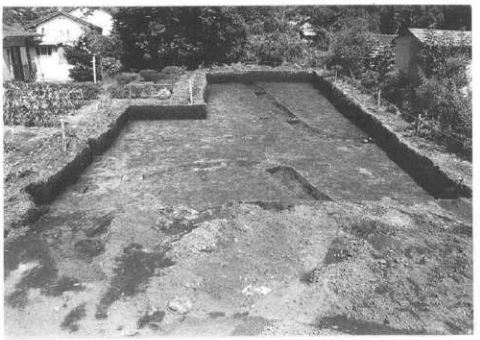




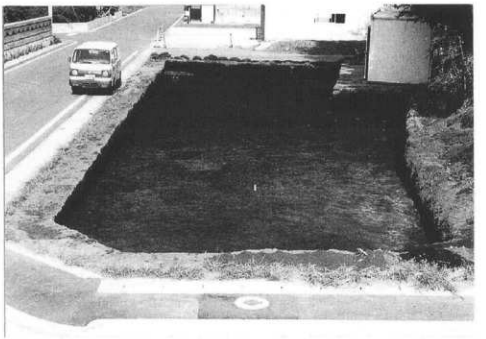
第15図　第３期：遺構配置図

久玉遺跡第５次調査Ａ地区全景

久玉遺跡第５次調査Ｂ地区全景



久玉遺跡第５次調査Ｃ地区全景



久玉遺跡第５次調査Ｄ地区全景

久玉遺跡第５次調査Ｅ地区全景

久玉遺跡第５次調査Ｅ地区　SD01（東より）

油田遺跡

例　　言

1．報告する遺跡は、都城市五十町1509番地１外所在の「油田（あぶらでん）遺跡」である。
2．発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事補横山哲英が担当した。なお、調査経費は原因者であるタカラ建材株式会社が負担した。
3．調査は平成４年９月10日から同年10月10日にかけて実施した。
4．調査の組織は次の通りである。

調査委託	タカラ建材株式会社	
調査主体	都城市教育委員会	
	隈元幸美	教育長
	成竹清光	文化課長
	遠矢昭夫	文化課長補佐
	海田　茂	文化課文化財係長
庶務担当	田部井寿代	文化課主事補
調査担当	横山哲英	文化課主事補

5．掲載した遺構実測図の作成は、横山、下田代清海、吉村則子、阿久根昌子、細山田登、松永浩一が行った。なお、遺構分布図の作成および遺物の取上げにはコンピューター・システムを用いた。
6．遺物の実測・製図は、横山、猪股幸千代、池谷香代子、雁野あつ子、水上和子が行った。
7．遺構・遺物の写真撮影は主に横山が行い、遺構の空撮については㈱スカイ・サーベイに委託した。
8．使用した基準方位は磁北であり、レベルは海抜絶対高である。
9．本書の執筆と編集は、横山があたった。
10．出土陶磁器に関しては、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏の鑑定・ご教示を受けた。また、出土銭貨については、慶應義塾大学鈴木公雄教授、九州帝京短期大学桜木晋一助教授のご教示を受け、文献史料については都城市文化財専門委員重永卓爾氏、出土土器については都城市教育委員会文化課桒畑光博主事のご指導をえた。
11．本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は、都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・管理している。

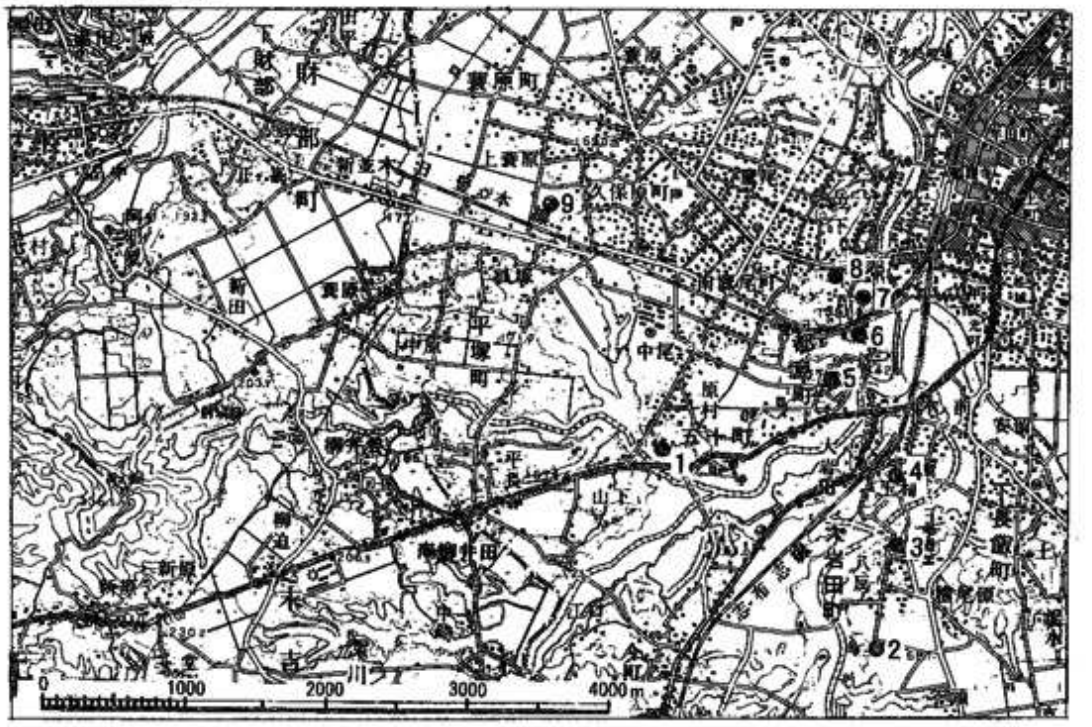
Ⅰ　発掘調査に至る経緯

本調査は、タカラ建材株式会社による自動車練習コース造成工事に伴う緊急発掘調査である。油田遺跡は、平成３年３月に行った試掘確認調査によって、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物包含層が残存していることが確認されており、今回は造成の際に土砂採取工事を行う台地の先端部、約450㎡についてのみ調査を行った。調査は、タカラ建材株式会社の委託をうけて都城市教育委員会が主体となって行い、平成４年９月10日から同年10月10日にかけて実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

油田遺跡は、宮崎県都城市五十町字油田に所在する。地形的には都城盆地の中央部にある蓑原台地の南端部に位置し、東流する大淀川に面した南向きの舌状台地上に立地している。遺跡の標高は約160ｍで、周囲の低地（旧水田）とは比高差約10ｍをはかる。周囲には浸食谷が入り組んでおり、随所に湧水点がみとめられる。

当遺跡の周辺には、縄文時代晩期の黒土遺跡などをはじめとする古代以前の遺跡や、都城島津氏の居城・都之城跡などが点在しており、また当遺跡の隣接地に肥後一族の居館跡（中世）があったという伝承もあることから、今回の調査で確認した各時期の遺構・遺物との有機的な関連性が想定できる。



1．油田遺跡　2．横尾原遺跡　3．黒土遺跡　4．大岩田村ノ前遺跡　5．瀬戸ノ上遺跡
6．都之城跡（中之城）　7．都之城（主郭部）　8．都之城取添遺跡　9．西原第２遺跡

第１図　油田遺跡位置図

Ⅲ　調査の概要

1．調査の内容

調査地点の旧地形は低地（旧水田面）にせり出した幅100ｍほどの台地であったが、現在は遺跡の西側の部分（旧面積の２／３以上）が削平によって消失している。また、調査部分は中央部付近を横断する素堀（根切りの溝）によって平坦部と緩傾斜部に二分されている。調査地の現状は、緩傾斜部がネダケを主とする雑木林、平坦部が茶畑や果樹畑である。

調査は、まず緩傾斜部分の竹林および調査区全体の表土を重機によって除去した後、第Ⅱ層以下を手掘りによって掘り下げていった。ただし、傾斜部では竹根による攪乱が著しく、また、平坦部もサツマ芋を一時的に保存する芋穴が随所にみられたため、予想以上に遺構の保存状態は悪く、平坦部から傾斜部にかけて点在する中世末頃の土壙墓47基を確認するにとどまった。

なお、今回の調査では、中・近世の遺物以外に縄文時代晩期と古墳時代中期頃の土器がかなり多量に出土していることから、周辺に当該期の集落（住居址）が展開していたことが想像されるが、遺構の確認はできなかった。

2．遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は５層に分層できる。このうち、遺物包含層は第Ⅲ層、遺構検出面は第Ⅳ－ｂ層上面であるが、遺構の本来の掘り込み面は第Ⅲ層である。調査の都合上、やむなく第Ⅳ－ｂ層上面での確認を行った。

第　Ⅰ　層：乳白色の軽石粒を含む黒色砂質シルト層で、現在の表土および耕作土である。層厚　20～40㎝。

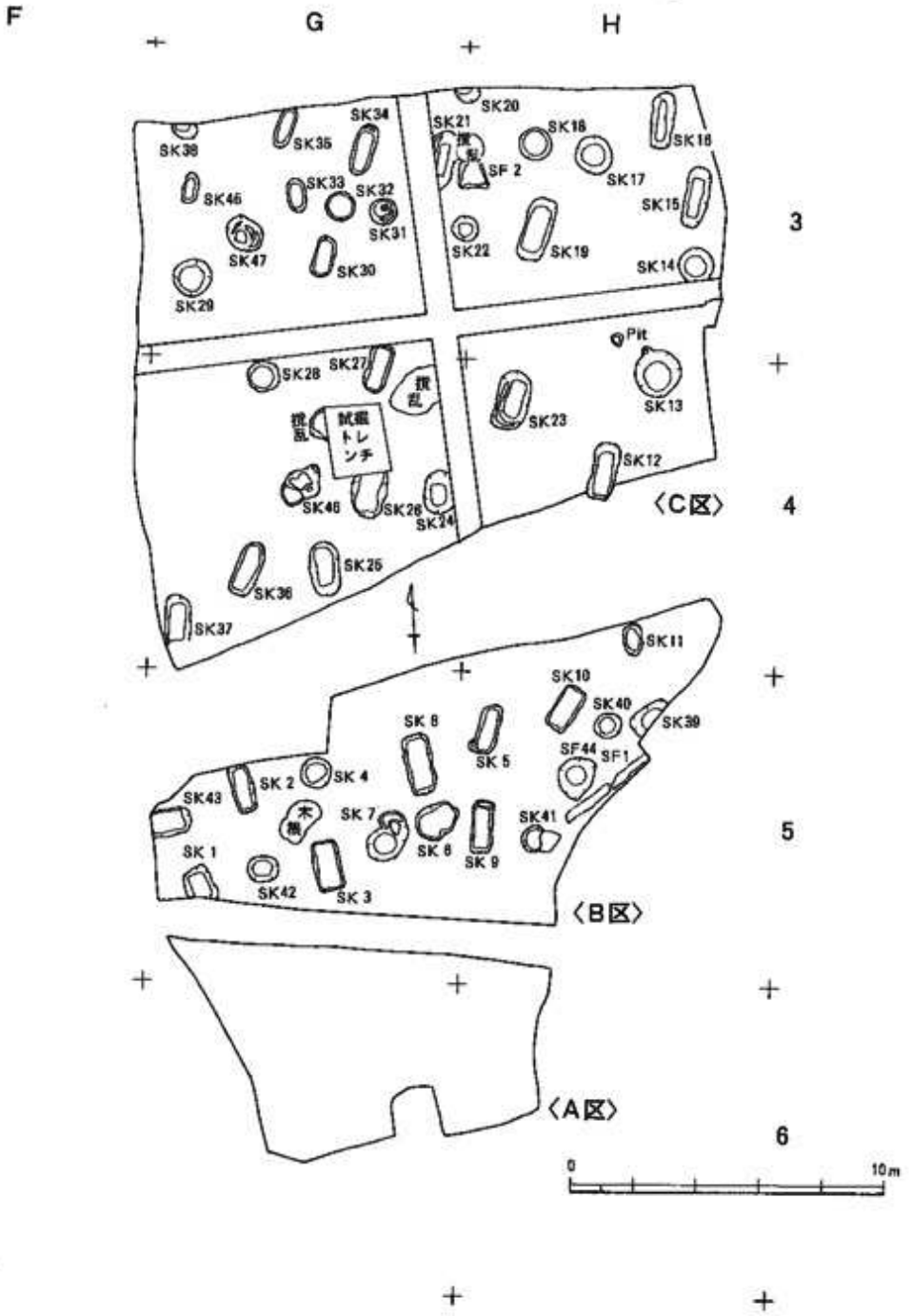
第　Ⅱ　層：乳白色の軽石層で、文明年間（15Ｃ後半）に桜島から噴出した文明降下軽石層にあたる。本遺跡では、ブロック状にみとめられた。
層厚　0～10㎝。

第　Ⅲ　層：黄白色の軽石粒を含む黒色粘質シルト層で、軽石粒の含有度・大きさは層の下部にいくにつれて、多く、大きくなる。層厚　10～30㎝。

第Ⅳ－ａ層：黄白色の軽石粒を基調とする層で、黒色粘質シルトを多量に含む。第Ⅳ－ｂ層の漸移層にあたる。層厚　20㎝。

第Ⅳ－ｂ層：黄白色の軽石層である。霧島火山御池火口から噴出した御池降下軽石層にあたる。年代は、縄文時代中期頃と推定されている。層厚　40㎝。

第2図　油田遺跡グリッド配置図



第3図　油田遺跡遺構分布図

3．遺構・遺物

(1) 遺　構

遺構は、中世末頃の土壙墓と、それに共伴すると思われる硬化体（道路状遺構）を検出している。

① 土壙墓

土壙墓およびそれに類すると思われる土坑は、全部で47基確認した。分布域は調査区の平坦部分が全体の約７割で主勢を占めるが、傾斜部にもかなりの数の墓が営まれていたらしく、狭い範囲で17基の土壙墓を検出している。

これらは、平面形態から円形プラン（座葬）と方形プラン（伸展葬）に大別できる。各々の規模には若干の差違がみとめられるが、特に円形プランのものには、その差が顕著にあらわれているように思われる。

なお、内部から銭貨や棺材、骨片、鉄釘、土師器などの出土したものや、埋土中に礫・軽石のみられるものなどがあるが、本稿では各種の代表的なものだけを実測図で掲載し、詳しくは別表で一括した。

また、各土壙墓の主軸方向や形態・規模および埋土での分類と、同一時期での配置（分布）状況については、小結で詳述した。

② 硬化体（道路状遺構）

これは、調査区の南東縁（台地の縁辺部）と、北側中央部付近（ＳＫ21の縁部）で検出した、第Ⅲ層中（御池降下軽石を含む黒色粘質シルト）の硬化体である。ともに、各土壙墓の検出面より上部に位置し、ＳＦ１においては、ＳＫ41の埋土上に残存している。これらの用途については、残存部分や検出数が少ないため推測の域を出ないものの、少なくともＳＦ１に限っては、土壙墓本来の堀込み面がＳＦ１の検出面とほぼ同レベルであること、幅員があまり変化せずに、地形に沿って伸びていることなどから、墓壙群の中の墓道的な機能を想定した。

なお、今回確認したのは、ＳＦ１が長さ約3.4m、幅員0.6～0.7mの範囲で連なるブロック、ＳＦ２がほぼ0.9m四方のブロックである。

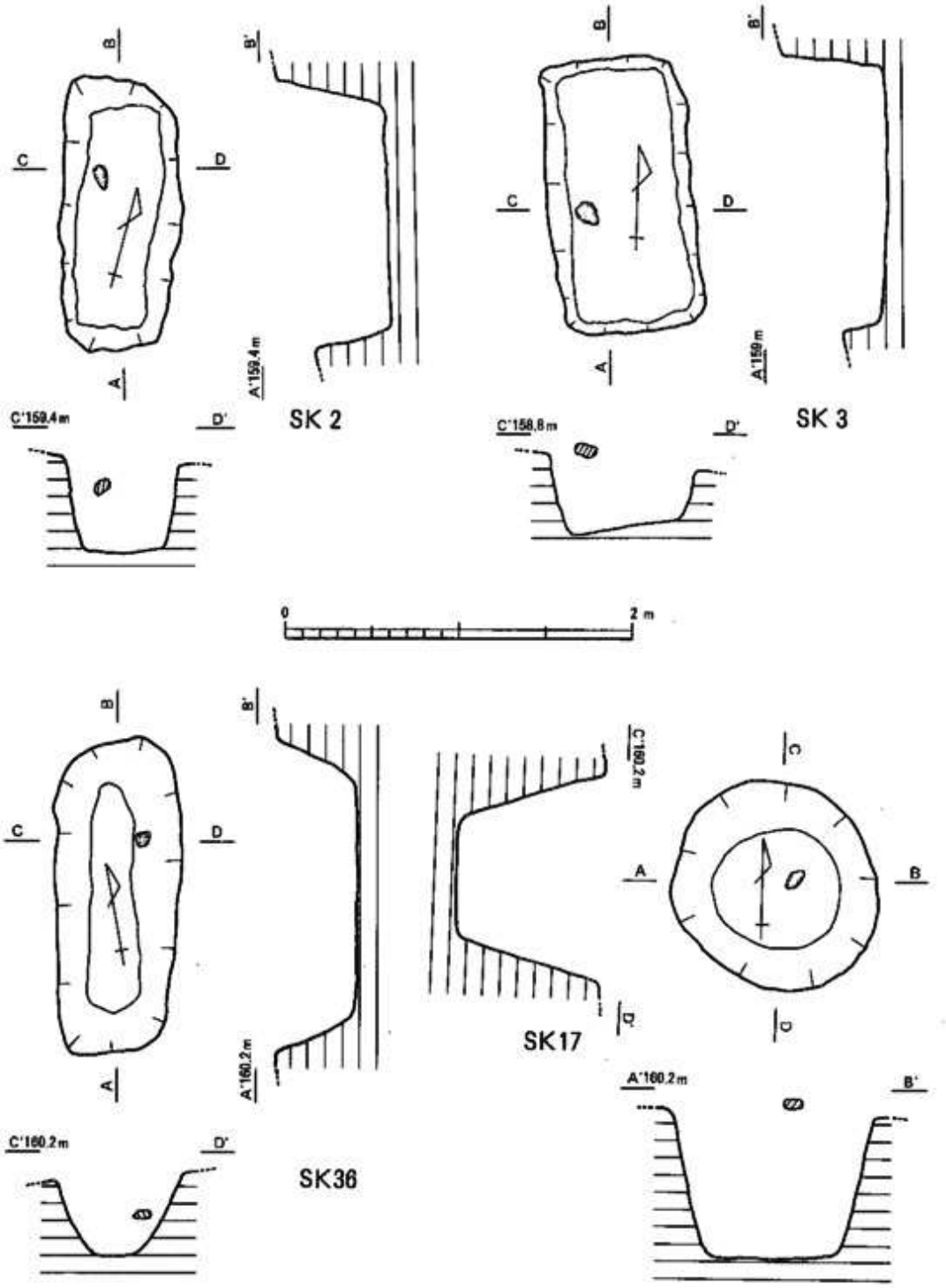
(2) 遺　物

遺物は、包含層中から出土した中世以前の遺物と、中世の土壙墓群に伴う遺物の二つに大別できる。

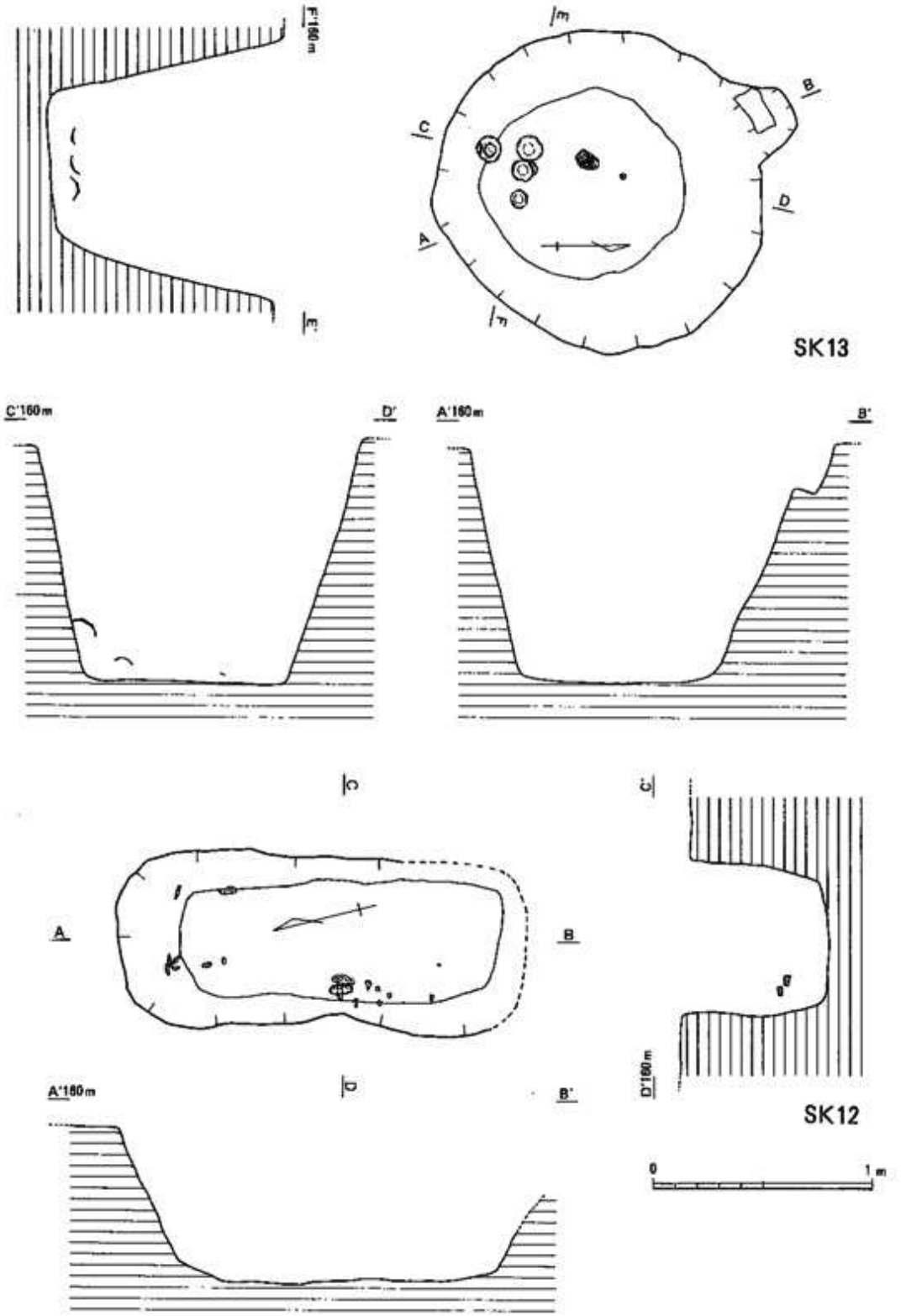
① 中世以前の遺物

今回の調査では、遺物包含層より縄文時代晩期から古墳時代中期にかけての土器・石器と古代の須恵器・土師器が出土している。なお、縄文時代晩期と古墳時代中期頃の遺物の出土量が他に卓越していることから、当該期の遺構の存在は否めないが、前述したように確認できていない。

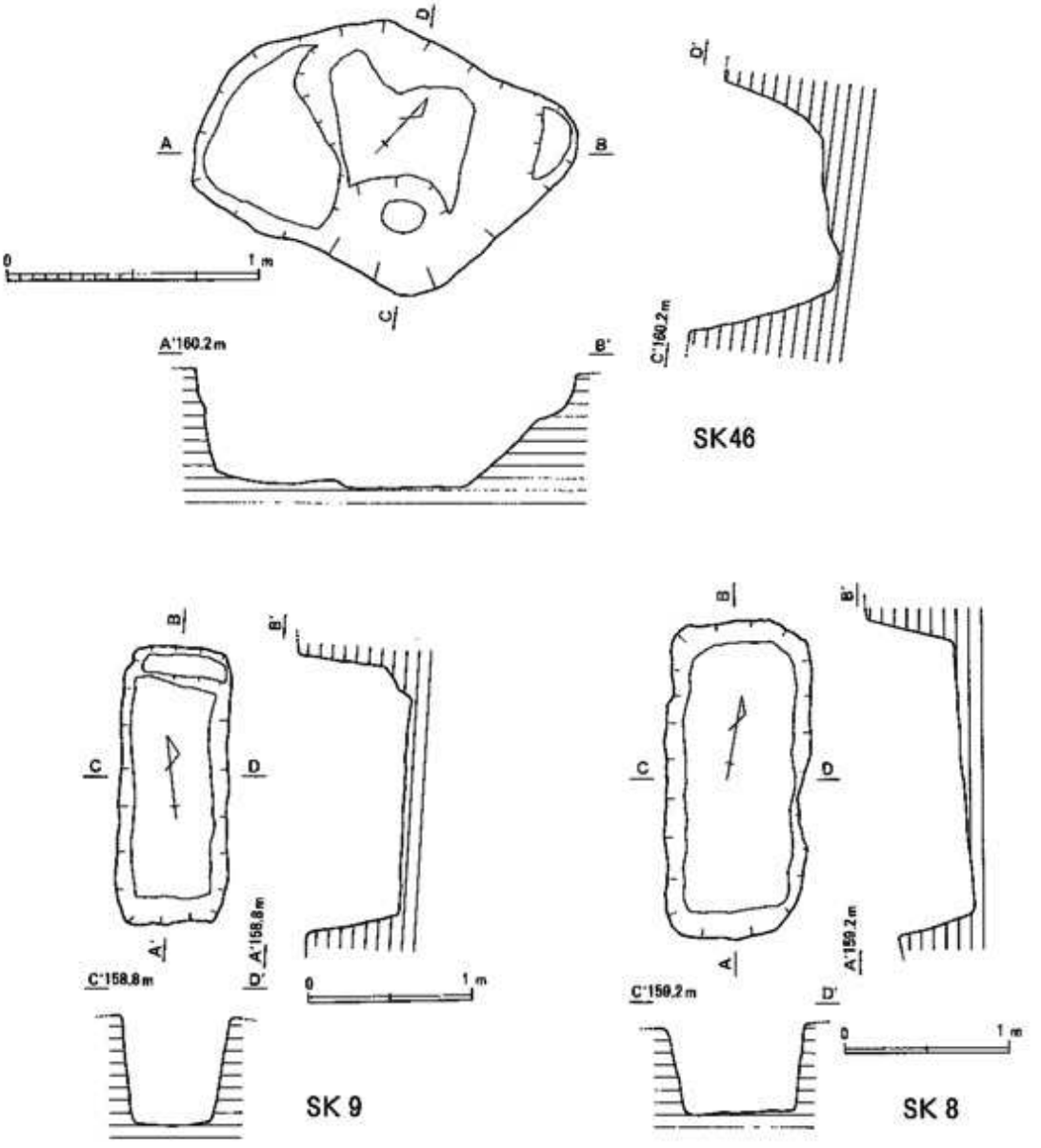
１～５は縄文時代晩期頃の土器である。今回出土した土器群は、浅鉢形土器の文様帯及び器形から二時期に分類でき、深鉢形土器とのセット関係も確認できた。１は口縁部の文様帯がかなり顕著に残存しており、口縁も玉縁状を呈しながら真っ直ぐ立ちあがっている。内・外器面



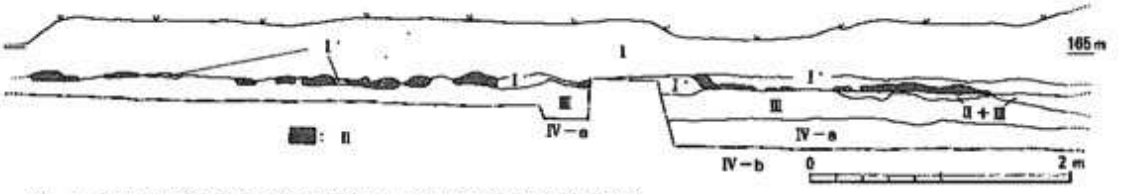
第4図　土壙墓実測図 (1)　SK 2、3、17、36



第5図　土壙墓測図 (2)　SK12、13



第6図　土壙墓実測図 (3)　SK 8、9、46



第　I　層：乳白色の軽石粒を含む黒色砂質シルト層。（現在の表土および耕作土）
第　I'　層：乳白色の軽石粒を含む弱粘質黒色シルト層。
第　II　層：乳白色の軽石層。（文明降下軽石層）
第　III　層：黄白色の軽石粒を含む黒色粘質シルト層。遺物包含層。
第IV－a層：黄白色の軽石粒を基調とする層で、黒色粘質シルトを多量に含む。（遺構検出面）
第IV－b層：黄白色の軽石層。（鬼界降下軽石層）

第7図　油田遺跡基本土層図（C区・東壁）

（単位：m）

No.	主軸方向	長軸	短軸	深さ	形態	埋土	出土遺物	備考
1	N−17°−W	1.5?	1.0	0.54~0.63	B	TYPE.2	木片9点	
2	N−15°−W	1.6	0.7	0.55	B	TYPE.2		埋土中に礫あり
3	N−8°−W	1.6	0.85	0.19~0.46	B	TYPE.4		埋土中に礫あり
4		径1.0~1.05		0.13~0.23	C	TYPE.2		
5	N−21°−E	1.6	0.65	0.17~0.41	A	TYPE.3-b		
6	N−64°−E	1.45	1.05	0.12~0.18	C?	TYPE.3-a		
7		径1.1		0.67~0.77	C	TYPE.2	木片5点 木片付着の鉄釘2点	
8	N−10°−W	1.9	0.9		B	TYPE.3-a		
9	N−7°−E	1.7	0.65	0.87	A'	TYPE.3-b	木片6点 木片付着の鉄釘1点	
10	N−64°−E	1.5	0.75	0.47~0.55	A?	TYPE.2	木片付着の鉄釘23点 洪武通宝8枚 世高通宝?1枚	
11	N−7°−E	1.0	0.6	0.07~0.11	B	TYPE.2		
12	N−15°−E	1.9?	0.8	0.59~0.62	A	TYPE.1'	木片17点 棺桶の金具?2点 木片付着の鉄釘約160点 木片付着の金属製品16点 骨片1点	
13		径1.4~1.5		1.1	C	TYPE.4'	木片付着の鉄釘1点 骨片3点 洪武通宝30枚 銘不明銭貨1枚 永楽通宝3枚 洪徳通宝2枚 元豊通宝1枚 元祐通宝1枚 延寧通宝1枚 皇宋通宝1枚 景統通宝1枚 大観通宝1枚 弘治通宝1枚 大中通宝1枚 紹聖元宝1枚 土師器・坏3点 小皿4点 開元通宝OR 周通元宝1枚 棺桶の底板片1点 香炉1点	
14		径1.0~1.05		0.91~0.96	C	TYPE.2	漆片2点 青花・蒼甯底皿1点	

第1表　油田遺跡検出土壙墓一覧表（1）

（単位：m）

No.	主軸方向	長軸	短軸	深さ	形態	埋土	出土遺物	備考
15	N−15°−E	2.0	0.75	0.49~0.56	A	TYPE.3-a		
16	N−11°−E	1.8	0.7	0.44~0.49	A'	TYPE.2'	木片1点　洪武通宝７枚 木片付着の鉄釘約60点	
17		径1.15~1.3		0.78~0.85	C	TYPE.4'		
18		径1.0		0.58~0.62	C	TYPE.4		
19	N−21°−E	2.05	0.9	0.63~0.73	A	TYPE.4'	木片付着の鉄釘1点	
20		径0.8		0.84~0.90	C	TYPE.5	木片付着の鉄釘37点	
21	N−14°−E	1.95	0.9	0.75~0.77	A	TYPE.2'		
22		径0.8~0.85		0.35~0.40	C	TYPE.1'	木片付着の鉄釘5点	
23	N−18°30'−E	1.9	1.0	0.38~0.52	A	TYPE.3-a		
24	N−3°−E	1.3	1.0	0.56~0.67	A'	TYPE.3-a		
25	N−3°30'−W	1.7	0.95	0.49~0.59	B	TYPE.3-a	木片4点　木片付着の鉄釘35点	
26	N−13°−E	1.8	1.1		A	TYPE.4'		
27	N−20°−E	1.55	1.1	0.54~0.60	A	TYPE.3-a	木片12点　木片付着の鉄釘7点	
28		径1.0		0.44~0.49	C	TYPE.3-a		
29		径1.2		0.58~0.62	C	TYPE.1	木片2点　洪武通宝2枚 銘不明銭貨1枚　朝鮮通宝1枚 数珠玉?1個	
30	N−17°−E	1.30	0.65	0.34~0.40	A	TYPE.1	木片付着の金属製品5点	

第２表　油田遺跡検出土壙墓一覧表 (2)

（単位：m）

No.	主軸方向	長軸	短軸	深さ	形態	埋土	出土遺物	備考
31		径0.85		0.41~0.48	C	TYPE.2		床面中央部にPit状の落ち込みあり
32		径0.9		0.93~0.97	C	TYPE.4	金属製品1点	
33	N−3°30'−W	1.05	0.6	0.21~0.22	B	TYPE.1		
34	N−20°−E	1.65	0.7	0.42~0.47	A	TYPE.2		
35	N−25°−E	1.3	0.55	0.30~0.42	A	TYPE.3-a		
36	N−26°30'−E	1.8	0.8	0.17~0.21	A	TYPE.1		床面近くに礫あり
37	N−9°−E	1.75	0.8	0.83	A'	TYPE.2		
38		径0.8		0.8 ~0.84	C	TYPE.4		
39	N−52°−E	1.35	0.9?	0.60~0.69	D	TYPE.3-a	骨片21点　木片1点 洪武通宝3枚　銘不明銭貨4枚	
40		径0.8		0.43~0.49	C	TYPE.3-a		
41		径0.9		0.60~0.73	C	TYPE.5		
42		径0.8~1.0		0.64~0.74	C	TYPE.4		
43	N−95°−E	1.5	0.85	0.60~0.67	D	TYPE.2		
44		径1.2~1.3		0.81~0.96	C	TYPE.2	木片1点 銘不明銭貨7枚	
45	N−12°−E	1.0	0.5	0.41~0.21	A	TYPE.1		
46	N−52°−E	1.55	1.1	0.5 ~0.57	D	TYPE.6		
47	N−53°−W	1.2	1.0	0.42~0.49	C	TYPE.3-b	木片2点　木片付着の鉄釘5点 金属製品1点	

第3表　油田遺跡検出土壙墓一覧表 (3)

とも横方向の丁寧な研磨が施されており、色調は内・外器面とも暗赤褐色である。いわゆる入佐式に相当する土器と思われる。3・4は文様帯の退化がかなり進んでおり、口縁部も未発達のままでやや開きぎみに立ちあがっている。いずれも横方向の研磨がみとめられ、3は内器面がオリーブ黒色、外器面が灰白色、4は内器面が灰黄褐色、外器面が黒褐色を呈している。ともに黒川式に相当する土器である。2は1に伴う深鉢形土器で、口縁部の外器面にはヘラ状工具による横位の沈線文がみとめられる。色調は内器面が暗赤褐色、外器面が黒褐色を呈している。5は3・4に伴う深鉢で、頸部と胴部の境に削り出し状の突帯が巡っている。色調は内器面が灰黄色、外器面が淡黄色である。これらはすべて同一層（第Ⅲ層）内からの出土で、出土地点の深さによる時期差の判定は不可能であった。

6・7は弥生時代中期頃の甕形土器である。6は口縁部が肥厚してやや外反するタイプで、頸部下に3条の貼付け突帯が巡っている。調整は両器面ともナデで、外器面の口縁部から頸部にかけてがヨコ方向、胴部がタテ方向のナデである。また、内器面には指頭痕がわずかにみとめられる。これは、胎土中に金ウンモがみられ、焼成もかなり堅緻である。色調は、外器面が黒褐色、内器面が明赤褐色を呈している。弥生時代中期後半頃の山ノ口式土器に該当するものと思われる。7は口縁部が「く」の字に外反する小型の甕である。頸部から胴部にかけては、ススの付着や被熱による黒変がみられる。調整は、6同様外器面の胴部のみがタテ方向のナデで、あとはヨコ方向の丁寧なナデが施されている。色調は、外器面が灰白色、内器面が淡黄色である。

8～12は古墳時代の甕形土器である。8は頸部下に刻み目突帯をもつタイプで、口縁部はやや内傾し、頸部はやや間延びして平底の低部へとつづく。調整は、内・外器面ともハケメで、外器胴部上半から頸部にかけて、ススの付着がみとめられる。両器面とも、にぶい黄橙色を呈している。9も頸部下に刻み目突帯を巡らした甕の口縁部である。刻み目には施文具に巻かれていたと思われる布の圧痕が明瞭に残っている。内・外器目とも、口縁部と突帯の下部がヨコ方向、頸部と胴部がタテおよび斜方向のナデが施されている。色調は、外器面がにぶい橙色、内器面が灰白色である。10は口縁がほぼストレートに開くタイプの甕形土器である。外器面には輪積み痕が明瞭に残り、調整はやや粗雑なヨコ方向のナデである。外器面がにぶい橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈している。11・12は甕の底部であるが、いずれもやや上げ底気味で、端部をつまみだした際の指頭痕が全面にみとめられる。調整はタテ方向のナデで、11は内・外器面とも淡黄色、12はにぶい黄橙色である。

13～15は壺形土器である。13は頸部からほぼまっすぐい外反する口縁部を持つ壺で、頸部には指頭痕がみとめられる。調整はやや粗いヨコ方向のナデである。内・外器面とも灰白色を呈している。14も13同様外反する口縁をもつタイプで、頸部内器面には接合痕が残っている。外器面は丁寧なナデが施されているが、内器面はやや粗略的である。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が灰黄色である。15は小型丸底壺の胴部から底部である。磨耗が著しく、内器面でかすかに指頭痕を観察できるのみである。内・外器面とも淡黄色を呈している。

16は高坏の坏部である。口縁はやや外反し、深めの坏の底部は稜をなしている。外器面はタ

テ方向、内器面はヨコ方向のナデが施されている。色調は両器面とも淡黄色である。17は16のような坏部をもつ高坏の脚部である。ほぼ円錐状で、脚裾部は短く、直線的に開くものと思われる。外器面には丁寧なナデが施されている。内・外器面とも浅黄橙色を呈している。

18・19はいわゆる手捏ね土器である。いずれも焼成が悪く、脆弱で、わずかに指頭痕だけがみとめられる。18は内・外器面とも淡黄色、19は灰黄色である。なお、8～19はいずれも古墳時代中期頃の土器であると思われる。

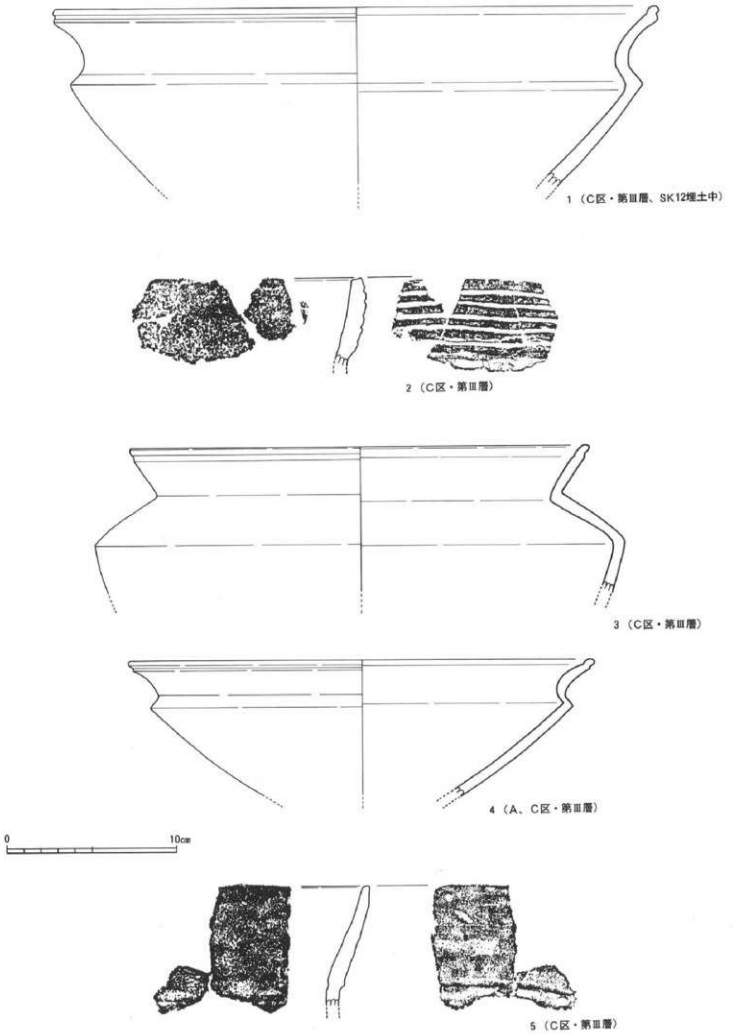
今回の調査で出土した石器はごくわずかで、そのうち図化の可能なものはすべて掲載した。20は硬質砂岩製の土掘具である。全体的にかなり丹念な研磨が施されており、柄の装着部分の調整も丁寧である。なお、刃部先端及び側縁の一部に使用痕がみとめられる。現存する最大長は17.7cm、最大幅9.5cm、厚さ1.9cmで、重量は386ｇである。21は表裏両面とも研磨された頁岩製の石器である。柄の装着痕のような剥離痕が中央部両縁にみとめられることから、両刃の磨製石斧の可能性がある。なお、研磨の際の擦痕と思われるものが両面で観察できる。最長部分16.5cm、最大幅7.8cm、厚さ1.3cm、重量217.5ｇである。また、出土時点より器全体に鉄錆状のものが付着していたが、これが石材中の鉄分が酸化したものか、土中で何らかの二次的作用を受けて付着したものか、その性質及び要因については全く不明である。加えて、20・21は包含層中より２個重なった状態で出土しており、何らかの意図的廃棄（配置）が想定される。22は、チャート製の打製石鏃である。平基式で、刃部の一部は欠損している。現存する最大長は2.1cm、最大幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ２ｇである。23は粘板岩製の打製石斧である。半分は欠損しているが、刃部から側縁部にかけて調整痕および使用痕がみとめられる。

古代の遺物としては、土師器・須恵器が少量ずつ出土している。24は、いわゆる内黒土師器の高台付碗である。高台部から体部にかけての破片であるが、内器面に丁寧な研磨が施されている様子を観察できる。25は土師器の坏である。切り離し技法はヘラ切りで、板状圧痕はみられない。低部中央が極端に薄く、体部は欠損のため形態不明である。26は須恵器の甕の肩部であろう。表面には目の細かい格子目のタタキ、裏面には斜方向のタタキが見られる。また外器面には自然釉による滑沢がみられる。平安時代後期頃のものと思われる。

② 中・近世の遺物

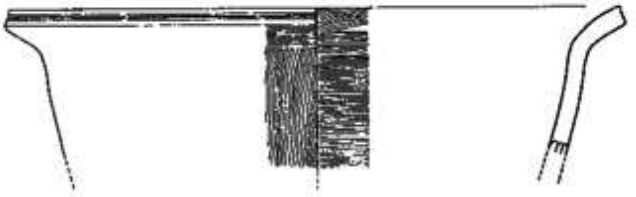
この時期の遺物は、ほとんどが土壙墓に伴うものである。内容は土師器、国産・舶載の陶磁器類と、銭貨、鉄釘、棺材やその付属品などの２つに大別できる。

26～33は土師器の小皿と坏である。すべてＳＫ13（13号土壙墓）内一括出土の遺物で、出土状況から納棺時に棺内に副葬されたものとみられる。坏（26～29）は、いずれも回転糸切り技法の切り離しで、板状圧痕のないやや上げ底気味の底部をもち、内・外器面ともにろくろ調整痕がわずかにみとめられる。これらは、口縁部に比べて底部が小さく体部が開いている点や、口唇部先端が尖り器壁が薄い点などから、都城市都之城跡主郭部で出土した土師器群の第Ⅲ期（16世紀代）に相当する土師器・坏であると思われる。小皿（30～33）も、坏同様切り離し技法は回転糸切りで、板状圧痕もみられない。器形は、体部がやや開き加減に丸く立ち上がっており、口唇部は坏と同じように尖っている。内・外器面ともにろくろによる回転ナデがみとめ

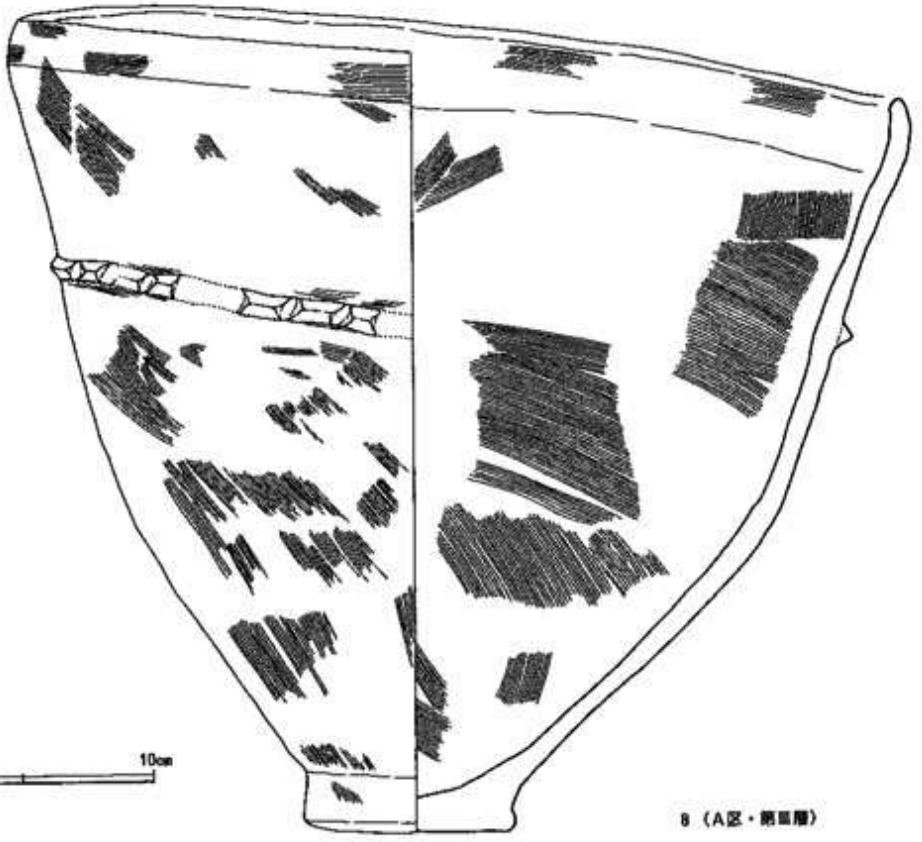


第８図　遺物実測図（Ⅰ）（縄文時代）

6（C区・第Ⅲ層）

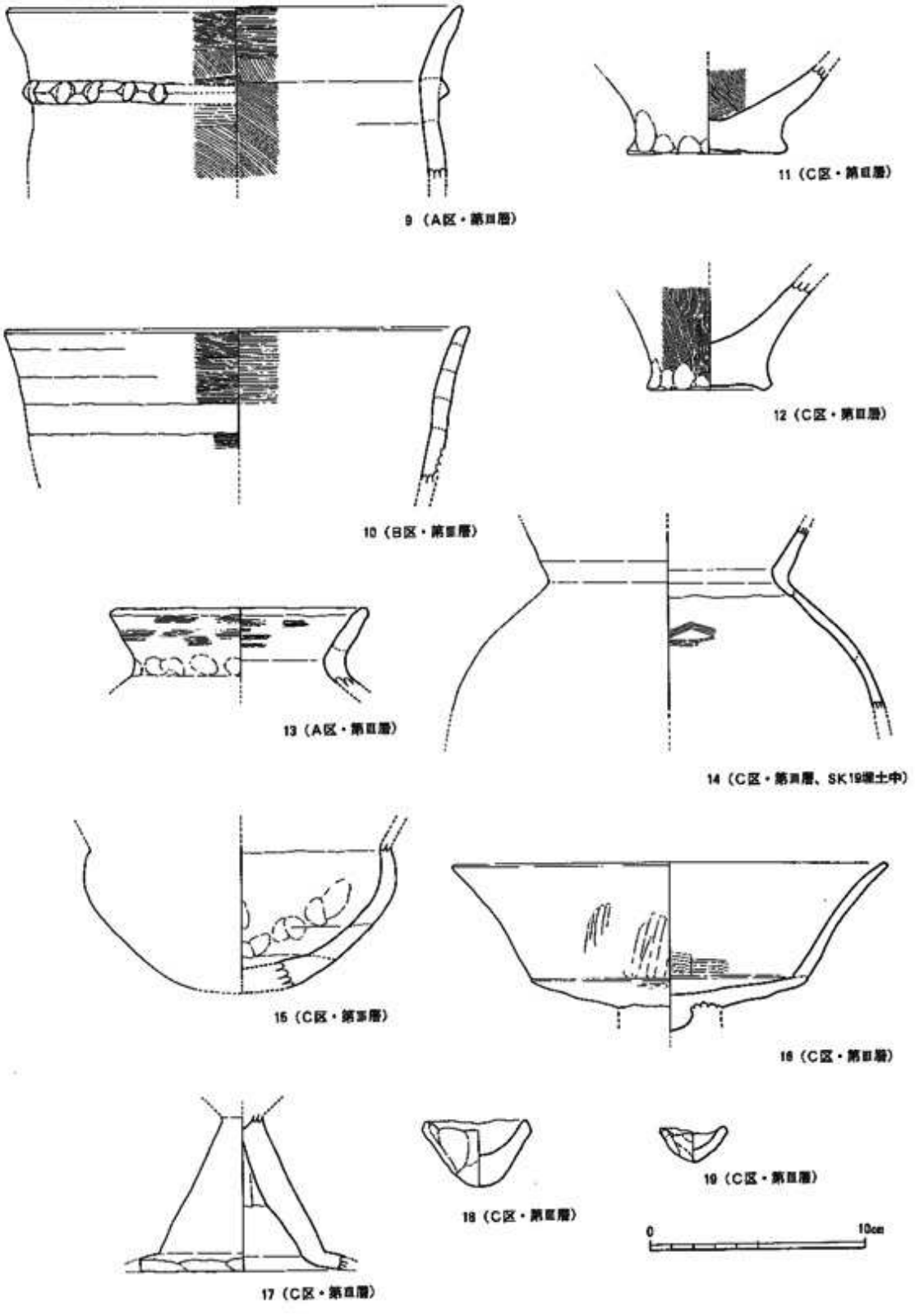


7（C区・第Ⅲ層）

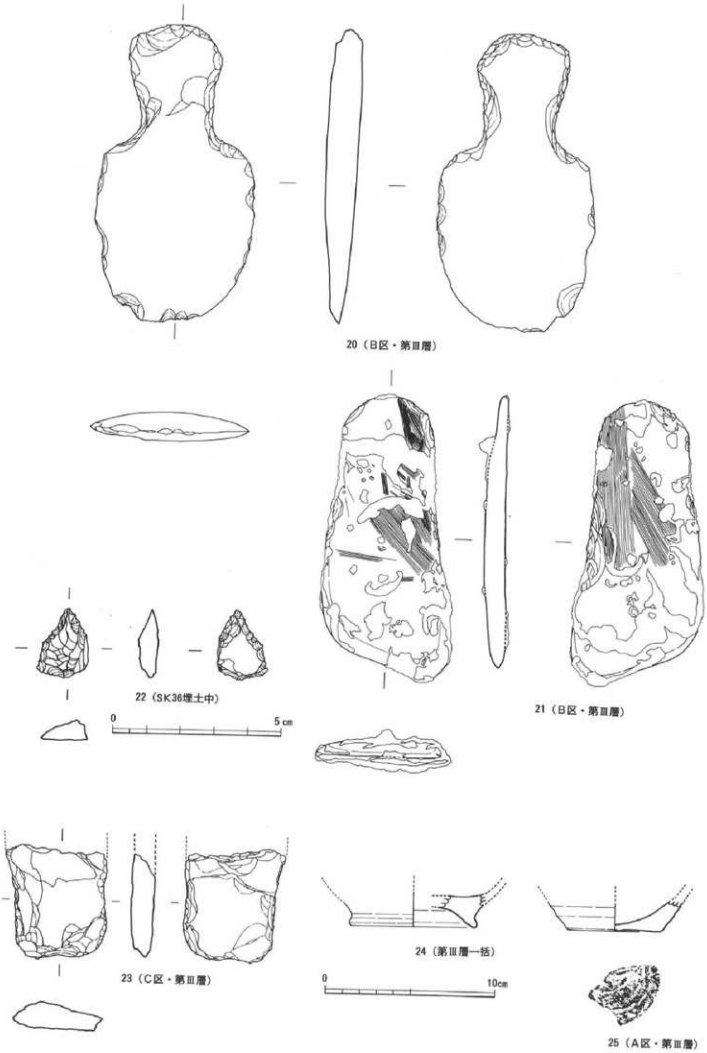


8（A区・第Ⅲ層）

第９図　遺物実測図（Ⅱ）（弥生、古墳時代①）



第10図　遺物実測図（Ⅲ）（古墳時代②）



第11図　遺物実測図（Ⅳ）（石器、古代①）

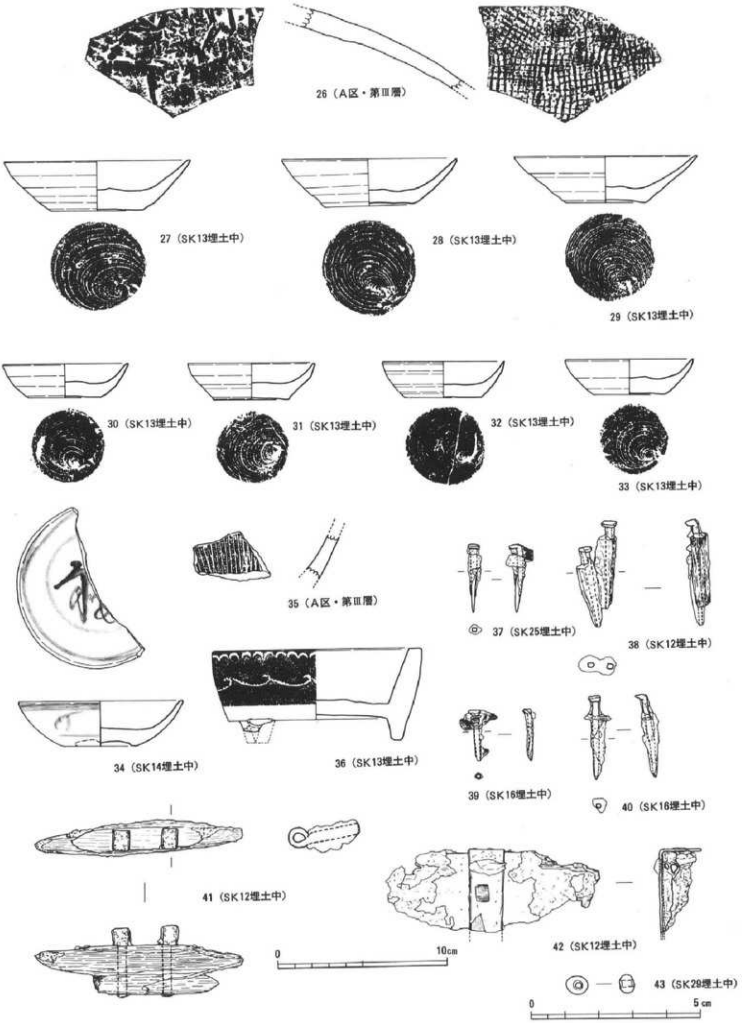
られる。やはり、これも坏と同じ第Ⅲ期の土師器・小皿の特徴に該当している。

土壙墓内から出土した陶磁器は絶対量がかなり少なく、今回掲載したものが主だったものである。34はＳＫ14（14号土壙墓）内から出土した碁笥底の皿で、内面見込みに「福」の字が描かれている。産地は福建・広東系の窯で、時期は16世紀後半頃である。35は薩摩焼の擂鉢である。18世紀代のものであろう。36は、ＳＫ13内から出土した三足の火舎（香炉）である。外器面口縁部には連弧状及び波状の陰刻が巡っており、内器面にはろくろ調整痕、底部には刷毛目痕がみとめられる。なお、三足のうちの２本は一部欠損している。16世紀後半頃のものと思われるが、産地等は未詳である。

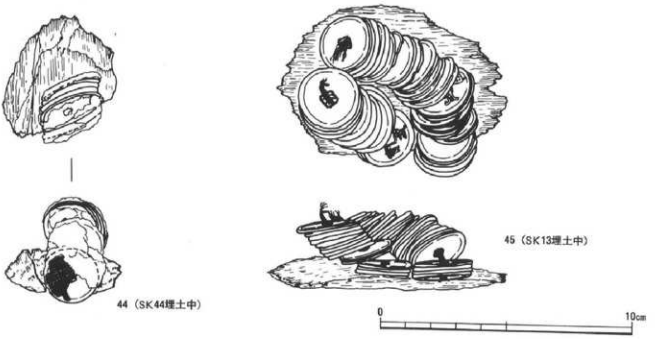
37～40は棺材に銹着した鉄釘である。今回の調査ではこのような角釘が12基の墓壙から約340点出土しているが、いずれも頭部を叩き出して折り曲げた頭巻という種類の釘である。保存状態の良いものも多いので規格（長さ）による類別とその割合の算出も可能であるが、ここでは代表的なものを掲載するにとどめた。なお、付着した木質から、38のみが棺材の木目と平行に、他は木目の直角に打ち込まれている。41・42はＳＫ12が長方形プランであることなどから、棺に転用した長持などの付属品と考えられる。民俗事例として、女性が嫁入り道具として持参した長持などを棺にするような場合もあることから、こうした類いのものかと思われる。43はやや灰色がかった青色のガラス玉である。おそらく数珠玉の一つだと思われるが、１個だけしか出土していないので、副葬品ではなく、流れ込みの可能性が高い。

44・45は棺材とともに出土した銭貨である。44は７枚の銭貨が棺材に直角に銹着したのもで、銭貨の一部には頭陀袋と思われる布目痕が明瞭に残っている。南部九州で多く認められる事例同様、７枚組の六道銭を頭陀袋に入れて副葬したものと思われる。45は一本の紐に通された差し銭状のもので、29枚組と12枚組の２連になっている。宮崎県をはじめとした南九州の中・近世墓から出土している六道銭については、これまで指摘されてきたように、７枚組のものが他に卓越するような状態であるが、41枚もの銭貨が、さながら備蓄銭のように一括で大量に出土した例はこれまでのところ皆無である。こうした多量の副葬銭貨の位置付けについては、撰銭による貨幣価値の下落に伴う一括副葬や被葬者の階層の高さなど、いろいろな可能性が想定できると思うが、７枚組の六道銭の問題などとともに今後再考していく必要があろう。

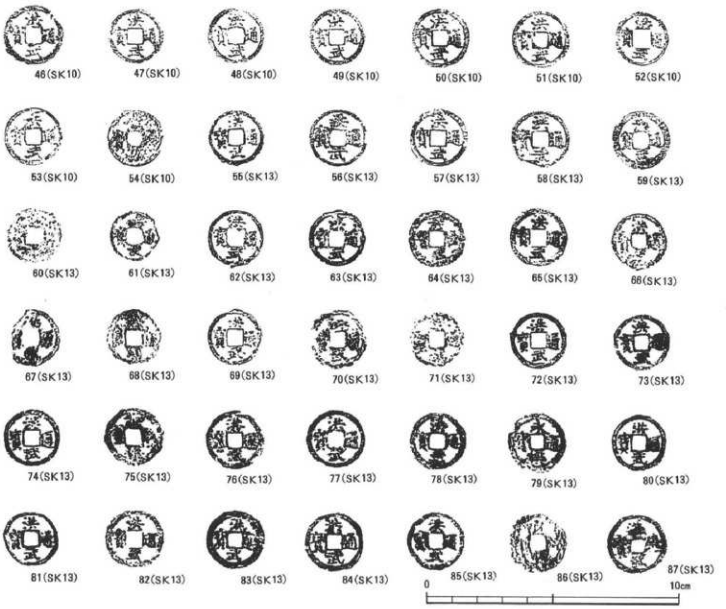
今回の調査では82枚の銭貨が出土しているが、ここではその中でも破損の少ない68枚について拓影を掲載した。銭貨の種類は、この時期普遍的にみられる「洪武通宝」が他に卓越して総出土枚数（判読不明及び未解読を除く）の約８割近くを占めているものの、その前後の時期の中国銭や安南銭（「延寧通宝」・「洪徳通宝」・「景統通宝」）、琉球銭（「世高通宝」）など当地区初見の資料が少量ずつではあるが多種にわたって含まれている点は、特筆すべきことであり、こうした特定種の銭貨の流通経路についても、今後は検討していく必要があろう。



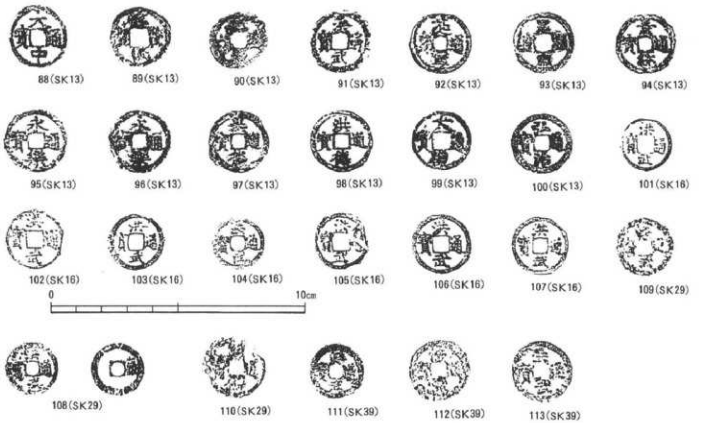
第12図　遺物実測図（Ⅴ）（古代②、中世①）



第13図　遺物実測図（Ⅵ）（中世②）



第14図　土壙墓出土銭貨拓影（Ⅰ）



第15図　土壙墓出土銭貨拓影（Ⅱ）

銭貨名(備考)	鋳造初年	挿図番号
［中国・朝鮮系］		
開元通宝(模鋳)もしくは	966	
周通元宝(模鋳)	955	90
皇宋通宝(篆書)	1039	93
元豊通宝(行書)	1078	89
元祐通宝(篆書)	1086	75
紹聖元宝(真書)	1094	86
大観通宝	1107	99
大中通宝	1361	88
洪武通宝(本銭)	1368	102・105
洪武通宝(マ頭)	1368	46～51・53・56・62・78・84
洪武通宝(マ頭・本銭)	1368	107
洪武通宝(コ頭)	(1368)	55・66・67・69・70・72・74・76・77・80～83・85・91・101
洪武通宝(文字大)	――	58・73・106
洪武通宝(文字小)	――	59・64・103・111

銭貨名(備考)	鋳造初年	挿図番号
洪武通宝(径小)	――	61
洪武通宝(一銭)	――	104・108
洪武通宝	――	52・60・63・65・71・87・109・112・113
永楽通宝(本銭)	1408	95
永楽通宝(模鋳)	(1408)	79・96
朝鮮通宝	1423	110
弘治通宝	1503	100
洪武通宝(背治)	1580～	57
［安南銭］		
延寧通宝	1454	92
洪徳通宝	1470	97・98
景統通宝	1498	94
［琉球銭］		
世高通宝	1446	54
判読不能		68

第４表　出土銭貨鋳造初年一覧

Ⅳ 小　結

今回の調査では、47基の土壙墓を検出している。当該地の旧地形が幅約100ｍの台地であったことや、土壙墓の占地が不便な傾斜地面まで及んでいることを考えると、この土壙墓群が、すでに消失してしまった台地の西側部分にまで広がっていたことは容易に想像できることである。その場合、調査面積に対する検出土壙数という単純な割合だけでも、この土壙墓群の総数は約300基以上に上ることとなり、今回の調査区が寺院跡やそれに類する施設の一角であった可能性も想定しなければならないところである。しかしながら、他の調査事例同様今回の調査についても、文献や伝承などの補助的資料は皆無であり、なおかつ調査面積が限られていたこともあって、出土した遺構や遺物からのデータや、立地条件などの状況証拠だけで、そうした位置付けを行なうことは大変困難なことであった。そうした意味で、今回は各土壙墓をいくつかの基準に照らし合わせた上で分類し、各グループごとの分布状況を示すことで、その変遷過程および検出した土壙墓群内において認められる若干の時期差を見出だすことに努めた。

以下、(1)形態と主軸方向、(2)埋土と出土遺物という２つの分類基準にしたがって概観していくが、各土壙墓については一覧表にグループ名を付記し、その基準（凡例）については後述した。

(1) 形態・主軸方向による分類

検出した土壙墓の形態は、おおむね方形と円形に大別することができる。両形態とも、大小のばらつきが若干認められるものの、それだけで何らかの傾向を示すかどうか、今回検出した土壙墓数の範囲内においては、判断することが不可能であった。

そこで、ここでは、形態による分類に長方形プランの土壙墓に表れている長軸の方位（主軸方向）を基準として付加し、下記の５類に分類した。

Ａ　類：長方形プランで、主軸方向がＮ－13°－Ｅ～Ｎ－30°－Ｅまでのもの。

Ａ　類：長方形プランで、主軸方向がＮ－３°－Ｅ～Ｎ－11°－Ｅまでのもの。Ａ類にほぼ準ずる。

Ｂ　類：長方形プランで、主軸方向がＮ－Ｗのもの。

Ｃ　類：円形プラン、もしくはそれに準ずる形態のもの。

Ｄ　類：長方形プランで、主軸方向がＮ－50°－Ｅ以南のもの

まず、これらの分布に総じていえることは、Ｃ類を除いた他の類は、一つ一つの土壙墓がある一定の間隔をもって立地しているということである。これは、各類ともほぼ同一時期に、ある程度の秩序の下に構築されたことを示したものと考えられ、ここで分類した群類が、時間的指標の中でも一つの単位をなしうることを裏付けている。

次に、これらの分布状況を概観すると、Ａ・Ａ'類は調査区の北半部、つまり台地の平坦面に集中し、Ｂ類は南半部の傾斜面に分布する、という傾向がみとめられよう。これは、階層による占地場所の制約といった要因を除いて考えると、ある一定の時期差を示す傾向とみなすことができ、土壙墓群内部の密集化に伴う分布域の拡大（Ａ・Ａ'類→Ｂ類）ということが想定

できる。なお、今回の調査では近世の墓地などにみられる階層による墓域制約の痕跡（意図的に墓域を区切る溝や段差など）は検出されておらず、加えてこれらの土壙墓群の構築時期が明確な階層の分化が進んでいない中世末頃であることを考えあわせると、階層による制約の可能性は極めて低いということを、あらためて付記しておきたい。

C類については、平坦面と傾斜面に別れて分布しているため、C－1類（SK13、14、17、18、20、22、28、29、31、32、38、47）とC－2類（SK4、6、7、40、41、42、44）に細分した。両群とも他の類にみられるような一定間隔をいた分布がみとめられない点は共通しており、A・A'類とB類が構築された後に、空いたスペースを選んで無作為に造営されたような印象をうける。こうしたことから、これらの時期的位置付けについては、B類に続くものと考えた。ただし、分布が2群に分かれている点については、両群の間のスペースを意図的に避けて円形に墓を構築していった結果、こうした配置になったとも考えられる。これについては、中央に据えられた神木や古石塔など（聖域）を囲んで同心円状に墓壙を配置するような民俗事例などともあわせて、今後検討していくべき問題である。

D類については、形態的特徴にのみ着目する限りA類の亜流としてとらえることができるが、具体的にどの段階に構築されたのかは、判断しかねた。

(2) 埋土・出土遺物による分類および時期比定

検出した土壙の埋土については、10タイプに分け、別表に記した。その分類基準は下記に示したとおりであるが、前述した形態的分類に基づくA～D類の、具体的な位置付けを補足するデータとしてはいささか画一的すぎるため、ここでは補助資料的な意味で添付することとした。

しかしながら、各土壙墓の埋土中に1471（文明8）年頃噴出したといわれる桜島起源の降下軽石（文明降下軽石）があまり散乱しないブロック状態で含まれていた点は、二次的混入（棺の腐食による後世の混入や、改葬による攪乱）の様子が観察されていないこととも合わせて、これらの土壙墓の構築時期の上限が15世紀後半頃であることを如実に物語っている。

Type 1　：文明降下軽石をまんべんなく含んだ弱粘質黒色シルト層
Type 1'　：文明降下軽石をまんべんなく含んだ黒色砂質シルト層
Type 2　：御池降下軽石をまんべんなく多量に含んだ弱粘質黒色シルト層
Type 2'　：上層面に文明降下軽石が堆積し、下層は御池降下軽石をまんべんなく多量に含んだ弱粘質黒色シルト層
Type 3－a：上層が文明降下軽石と黒色砂質シルトの混土層、下層は御池降下軽石と淡黒褐色砂質土の混土層
Type 3－b：Type 3－aに最上層の御池降下軽石（二次堆積）層が加わったもの
Type 4　：文明降下軽石、御池降下軽石、淡黒褐色砂質土の混土層
Type 4'　：Type 4に最上層の文明降下軽石（二次堆積）層が加わったもの
Type 5　：御池降下軽石、淡黒褐色砂質土の混土層と文明降下軽石、黒色砂質シルトの混土層が互層になっているもの

Type 6　：文明降下軽石、御池降下軽石、黒色粘質シルトブロックを含む灰黒色砂質土層

つぎに出土遺物であるが、これは都合19基の土壙墓で確認している。内訳は、埋葬本体（骨片、棺材・金具・釘類）と副葬品（銭貨、陶磁器類、土師器など）に大別でき、このうち具体的な年代を示す資料としては、銭貨と陶磁器類、土師器などが挙げられる。まず、C類の墓から出土した陶磁器類であるが、これはＳＫ13から出土した香炉（香車）も、ＳＫ14から出土した青花・碁笥底皿も16世紀後半頃のものと鑑定されている。次に、土師器については、都之城跡主郭部出土土師器編年の第Ⅲ期の時期幅が、16世紀代とやや幅広く設定されており細分の余地があるという点を考慮して、共伴する香炉と同じ16世紀後半頃と想定した。そうしたことから、これらの出土したC類の土壙墓については、陶磁器類の流通・使用期間等を考慮した上で、その構築時期を16世紀後葉から16世紀末頃に比定した。

さて、今回出土した銭貨は概ね「洪武通宝」が主流であり、南九州の当該期（15世紀～16世紀頃）の墓の出土傾向とほぼ合致しているが，ＳＫ10（Ａ類）及びＳＫ13・29（Ｃ類）から、これまで当地方では出土していない銭貨が、少量ずつではあるが多種にわたって出土している。そのうちの主だったものは、ＳＫ13より差し銭状になって出土しているため、特殊な例としてとらえるべきであろうが、ＳＫ10から出土した「世高通宝」（琉球銭）とＳＫ29から出土した「朝鮮通宝」は、それらの墓の時期比定を行う上での一要素となりうると考えられる。これは各々の流通ルートによる当地方への波及時期の違い（15世紀後半頃から鹿児島島津氏と琉球国との間で盛んに行われるようになった交易に伴って流入し、鹿児島からダイレクトに波及してきた「世高通宝」と、北部九州方面から他の中国銭ともども流通してきた「朝鮮通宝」の間の時期差）を前提としているため推測の域を出ないが、ＳＫ10を含むＡ類の構築時期については、埋土の観察（文明降下軽石の混入）から判断される15世紀後半を上限とし、「世高通宝」の流通時期及びＣ類の構築時期から判断される16世紀前半頃を下限と考えた。

なお、副葬された銭貨については、今回７基の墓で確認している。いわゆる六道銭といわれる類いのものかと思われるが、１基当りの出土枚数は４～48枚と様々で、時期的要因によるものか、あるいは地域色に根ざしたものなのか、その枚数の多さ及び枚数のばらつきについては今なお不明な点が多い。当遺跡の土壙墓群は、現在までのところ中世末頃と位置付けているが、南九州において近世墓より出土する銭貨の枚数が７枚である場合が多いという傾向を考えると、中世段階においてすでにこうした六道銭に対する南九州的な感覚が生まれていた可能性は否めない。今回の調査で検出した土壙墓群の中で、第１段階に当ると思われるＡ・Ａ'類の土壙からも７枚以上の銭貨が出土していることなどもあわせて、今後は中世のかなり早い段階からの、こうした六道銭の副葬の在り方を考えていく必要があろう。

以上、形態・主軸方向と出土遺物によって大まかな分類を試みてみた。総括すると、1471年頃噴出したといわれる文明降下軽石が二次的作用によって散逸していない段階（15世紀後葉頃）からＡ・Ａ'類が構築され始め、16世紀中葉頃から16世紀後葉頃にＢ類、16世紀後葉から16世紀末頃にＣ類と、徐々に墓域の拡大が進んだと考え、一連の過程を、Ａ・Ａ'類→Ｂ類→Ｃ類

と推測した。民俗事例としてみられる伸展葬から座葬への転換という点においては、この過程もそれに合致しているが、D類の位置付けや細かい時期比定の問題など疑義のもたれる部分も多いため、今後同類の土壙墓群における変遷などとの比較・検討を行い、再考したいと思う。

〈参考文献〉

桑畑　光博　「墓制」『中種子町民俗文化財調査報告書　増田の民俗誌』　鹿児島大学法文学部　文化人類学研究室　鹿児島県中種子町立歴史民俗資料館　1984

野沢　均他　『自證院遺跡』東京都新宿区教育委員会　1987

高山　優他　『増上寺子院群』　東京都港区教育委員会　1988

扇浦　正義　『發昌寺跡－公明新聞新館建設に伴う緊急発掘調査報告書－』　新宿区發昌寺跡遺跡調査会　1991

栩木　真他　『發昌寺跡－社団法人金融財政事情研究会新館建設に伴う第２次緊急発掘調査報告書－』　社団法人金融財政事情研究会　新宿区南元町遺跡調査会　1991

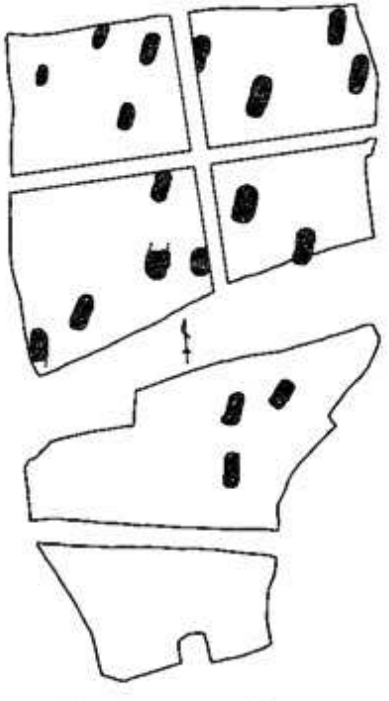
桑畑　光博　「都之城跡（本郭部）」『都城市文化財調査報告書』第13集　都城市教育委員会　1991

高山　優他　『天徳寺寺域第３遺跡発掘調査報告書』　天徳寺寺域第３遺跡調査会　1992

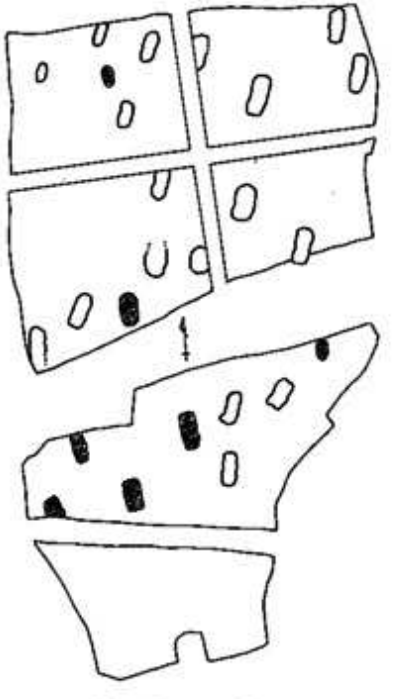
長津宗重・長友郁子　「水落遺跡」『小林市文化財調査報告書』第５集、小林市教育委員会　1992

櫻木　晋一　「三本松町遺跡の出土銭貨」『久留米市文化財調査報告書』第74集　久留米市教育委員会　1992

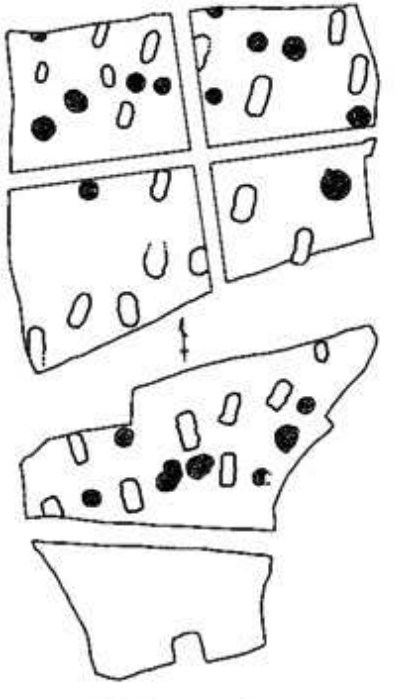
櫻木　晋一　「博多遺跡群の出土銭貨（１）」『法哈噠』第１号　1992



〈第Ⅰ期・A、A'類〉



〈第Ⅱ期・B類〉



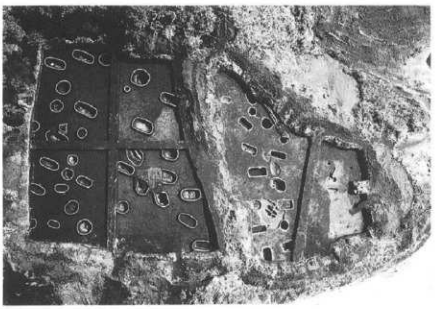
〈第Ⅲ期・C類〉

第16図　土壙墓群分布変遷図

図版1

油田遺跡遠景（西側上空より）

油田遺跡近景（西側上空より）



油田遺跡遺構完掘状況（垂直上空より）

図版2

SF－1　検出状況（西から）

SK-13　検出状況

SK－13　半裁状況

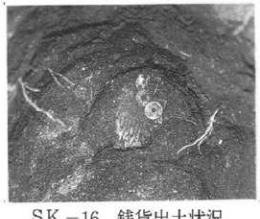
高坏出土状況

SK－39　骨片・銭貨出土状況

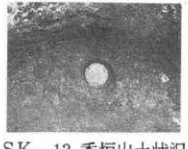
SK－13 土師器出土状況

SK－13 銭貨出土状況

石器出土状況



SK－16　銭貨出土状況



SK－13 香炉出土状況

図版3

SK 1

SK 3

SK 4

SK 6

SK 7

SK 11

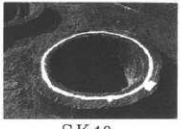
SK 12

SK 13

SK 14

SK 16

SK 17


SK 18

SK 19

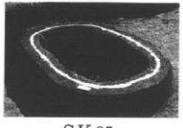
SK 20

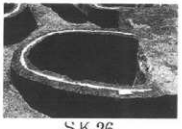
SK 21

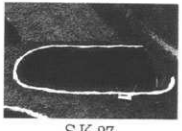
SK 22

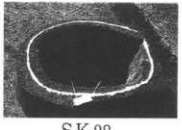
SK 23

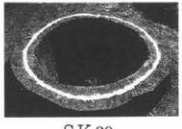
SK 24


SK 25


SK 26

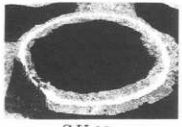

SK 27

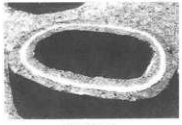

SK 28

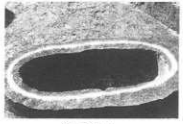

SK 29

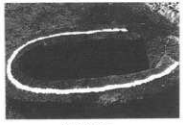
SK 30

SK 31


SK32


SK33


SK34

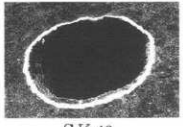

SK35

SK36

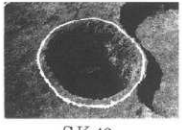
SK37

SK38

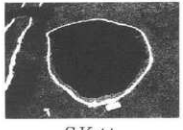
SK39


SK40

SK41


SK42

SK43


SK44

SK45

SK46

SK47

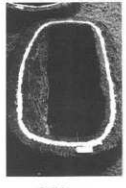
SK 2

SK 5

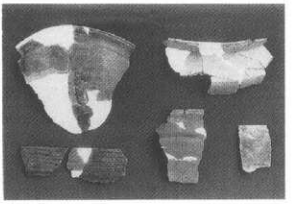
SK 8

SK 9

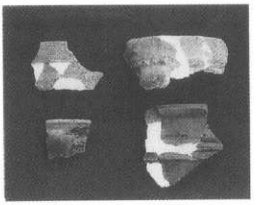
SK10


SK15

図版5



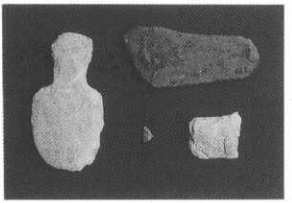
出土遺物①（縄文時代晩期）



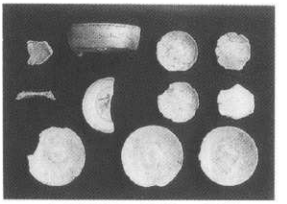
出土遺物②（弥生時代）

出土遺物③（古墳時代）

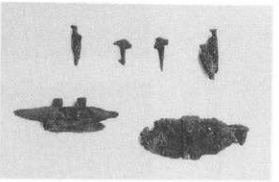
出土遺物④
（古墳時代）



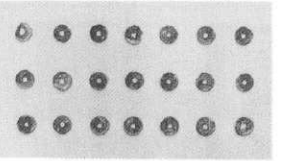
出土遺物⑤（縄文～古墳時代）



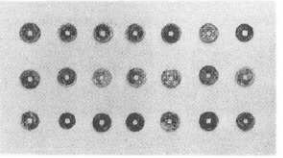
出土遺物⑥（古代～中世）



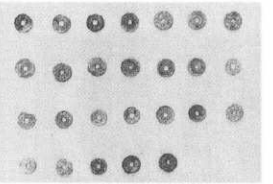
出土遺物⑦（中世）



出土遺物⑨（中世）



出土遺物⑧（中世）

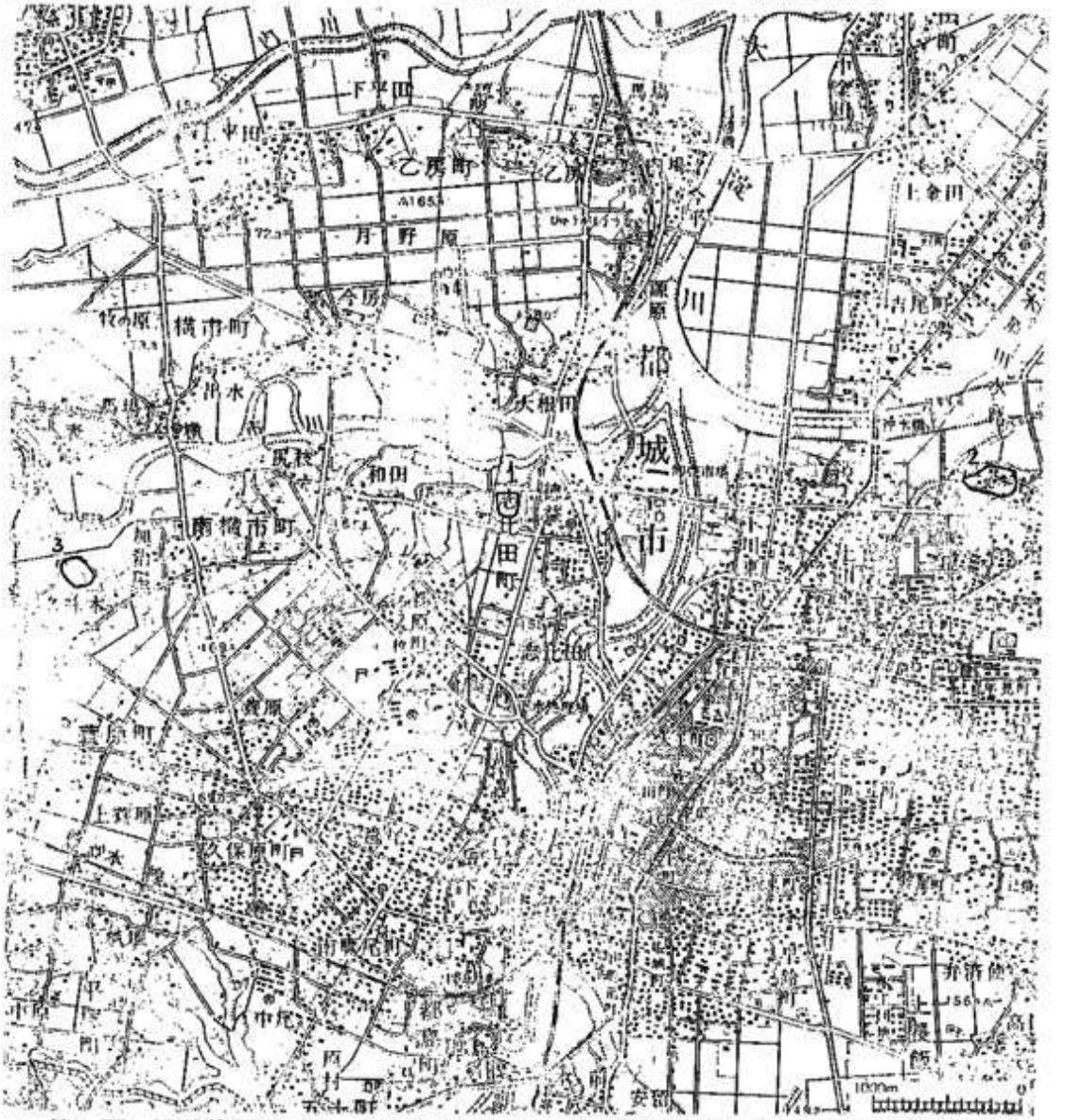


出土遺物⑩（中世）

正坂原遺跡

Ⅰ．調査に至る経緯

平成４年５月、都城市教育委員会スポーツ振興課より都城市志比田町4,495番地外15筆、面積約20,940㎡における公園造成計画の照会を受けた。同文化課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地正坂原遺跡（2004）の隣接地であるため、平成４年５月11・12日の両日にわたり予定地内を試掘調査し、遺跡の有無の確認を行った。試掘方法は２×２ｍないし２×１ｍのトレンチを12ヶ所設け、遺構検出面である御池ボラ層上面を基準に手掘りで掘りさげた。結果、各トレンチにおいて万遍なく遺物の出土をみた。また、２ヶ所のトレンチで溝状遺構を確認した。出土した遺物は縄文時代晩期の土器・石器と中世の土師器や石製品等であった。遺跡の範囲は工事面積のうち現況が畑地部分の微高地約16,000㎡に及ぶと推定され、正坂原遺跡は都城市遺跡詳細分布地図に周知されたエリアより広範囲に存在することが確認された。



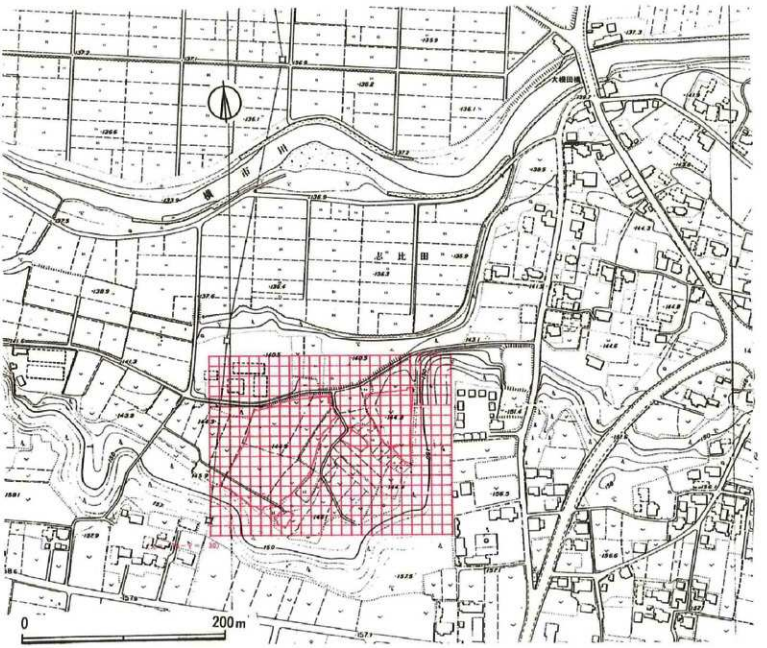
第１図　遺跡位置図（１．正坂原遺跡　２．松原地区遺跡　３．中尾山・馬渡遺跡）

これらの結果を踏まえて、平成4年6月2日にスポーツ振興課、荒造成を行う都城市土地開発公社そして文化課の三者で遺跡の取扱いについて協議を行った。造成により遺跡が破壊される部分約10,000㎡を記録保存することとし、平成4年9月から翌年2月末日までの約6ヶ月間で調査を実施することで協議が成立した。

Ⅱ．調査の内容

1．遺跡の概要

正坂原遺跡は都城盆地のほぼ中央に位置し、市街地を形成する台地の北側縁部河岸段丘の中段標高約144mほどに立地する。北側には霧島山麓を源とし、蛇行しながら東流する大淀川支流の横市川を眺望できる。横市川との比高差は約7mほどである。また、遺跡の現況をスケッチすると、調査区の中央やや東側で、南北方向に低地水田が台地を「Y」字状に分断し、大まかに3つの微高地を形成している。このほか、南側の裾野端部で湧水が認められる。発掘調査



第2図　調査区域及びグリッド図

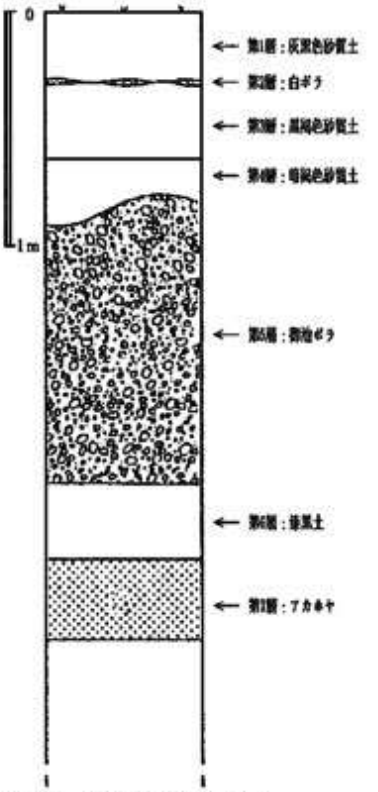
の結果、この水田面は、遺跡存在時期では小川程度の河川だったようである。

発掘調査は単位グリッドが10×10mのグリッド法による調査方法をとった。また、メッシュは公共座標系のS・N座標線に一致させた。調査面積は約10,957㎡で、調査区域を便宜上A地区、B地区、C地区、D地区と呼称し、面積は各々8,133㎡、346㎡、194㎡、2,284㎡である。グリッドは南北方向をアルファベット順で北から、東西方向を算用数字で西から表記した。

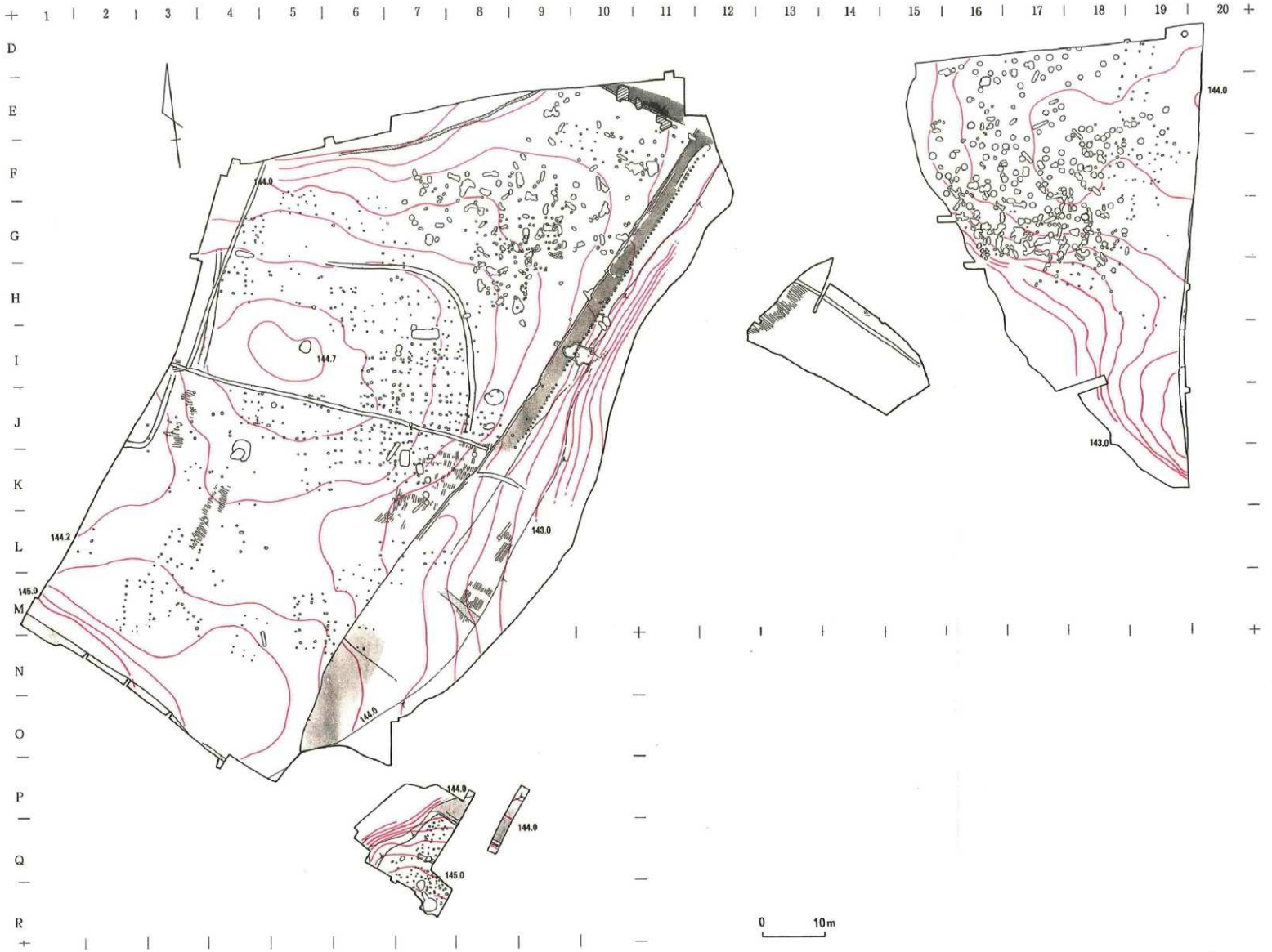
平成4年5月の試掘調査の結果、遺跡の基本土層は第1層灰黒色砂質土（表土層）・第2層白ボラ層（ブロック状）・第3層黒褐色砂質土・第4層暗褐色砂質土（漸移層）・第5層御池ボラ層である。調査方法は調査開始が予定より約1ヶ月近く遅れたこと等を考慮し、重機により第1層を削平し、第2層から手掘りにより掘下げた。遺物包含層は第3層及び第4層で遺構検出面は第4層の下部である。出土遺構の主なものは晩期の土坑、中世の掘立柱建物跡・溝状遺構・木棺土壙墓・階段状遺構、畑跡（畝状遺構）、また、近世の道路跡や溝状遺構等である。出土遺物は縄文時代後晩期の土器・石器、中世や近世の土師器や石製品及び陶磁器等である。

2．縄文時代の遺構・遺物

縄文後期の土器はA地区のH-10、F-9、F-10等の台地北側部分とD地区のJ-19、J-20等に集中して出土している。出土層位は第4層である。05・07はF-10～11とH-11、06はF-9とH-10の二地点から同一個体片がまとまって出土している。遺構は確認できていない。01は深鉢形土器の口縁部片で山形をなす。頂上部口唇に3条の凹点、口縁下部に凹線がみられる。外面はナデで、内面は貝殻条痕のちナデ調整。02も01同様で頂上部口唇に残存2条の凹点がみられる。03は深鉢形土器の胴部で、直・曲線の沈線を施す。ススの付着がみられる。04は深鉢形土器の胴部と思われ、ヘラ状の工具により浅い凹線を幾何学的に施す。器壁は薄く、色調は明黒褐色を呈す。05は底部から口縁へ直線的に立上がり、口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文を、その直下に浅い凹線を巡らし、渦巻き文とクロス文そして直線文を組合わせている。底部は網代底である。06は底部が欠損しているが、胴中央が最大径で、頸部でくの字形折れ直線的に口縁が立ち上がる。屈曲部に2条の沈線、胴部に入組状の平行曲線を2組以上を施し、各沈線間に斜めに貝殻復縁による連続刺突文を施す。07は胴部から内湾気味に立上がり、口縁部で短く僅かに外反する。口唇部の突起には貝殻復縁による刺突を施したリング（輪）をはめ込んでいる。胴部は2条の貼付のキザミ目突帯2条を巡す。器面調整は内外面条痕のち、胴上部のみナデている。08～10は山形口縁の市来式土器で、くの字形に口縁が屈曲する。文様は貝殻復縁による刺突文と沈線の組合わせで、屈曲部下まで文様帯が及んでいる。内外面とも貝殻条痕を残す。11は口縁部

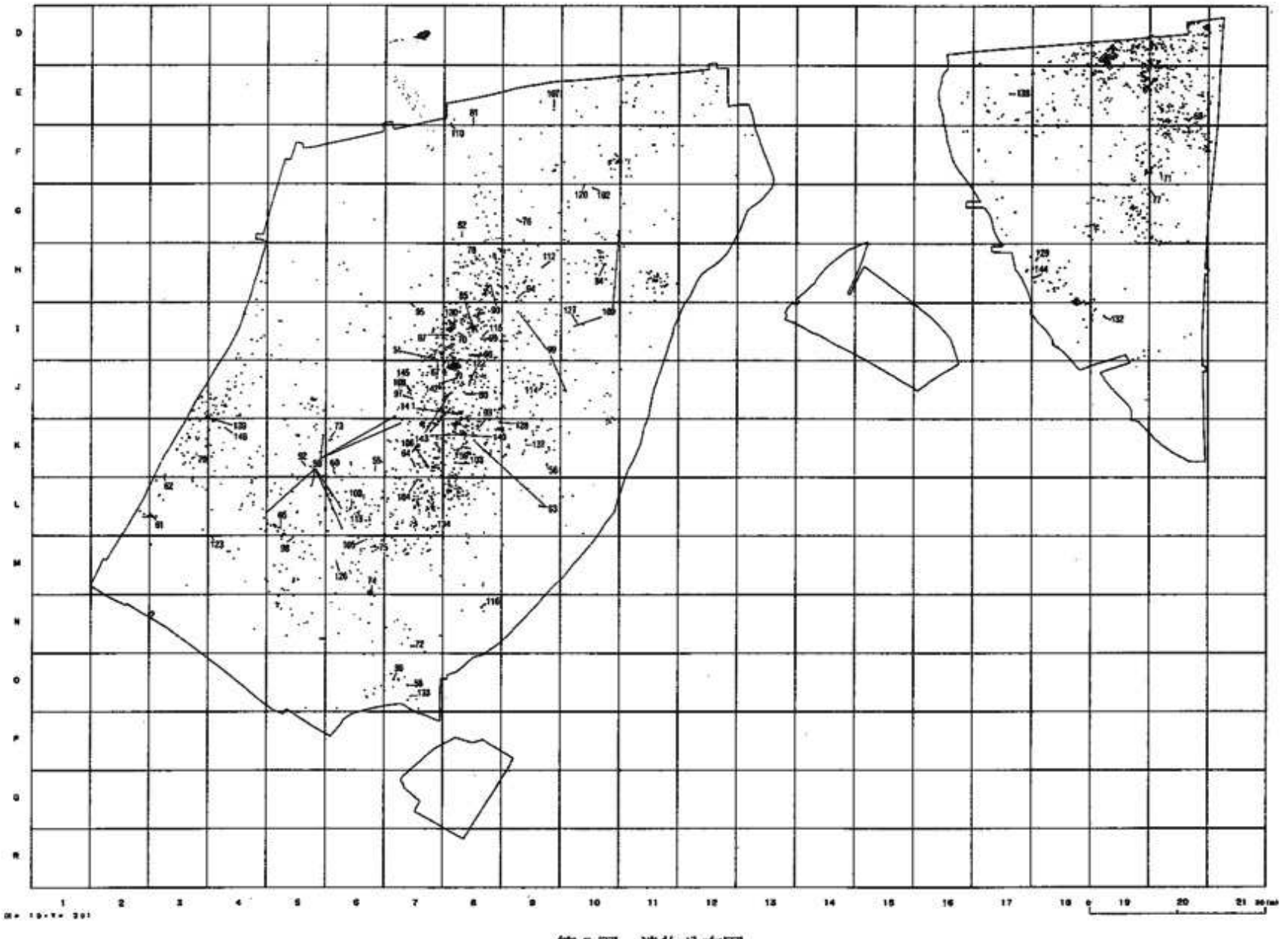


3図　土層柱状模式図



(X＝10−Y＝30)

第4図　遺構分布図（網かけ−硬化面）



第５図　遺物分布図

屈曲が明瞭でなく2段に貝殻刺突を連続に施す。丸尾式土器と思われる。

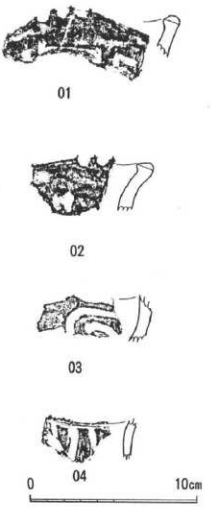
縄文晩期は前半期の土坑が9基、A地区で4基、D地区で5基出土している。包含層からもかなりの遺物が出土している。ほか晩期末の刻目突帯文土器がA地区の南側部分から少量出土している。12は刻目突帯文土器（口縁は刻目のみ）である。

1号・2号土坑（SJC01・02）

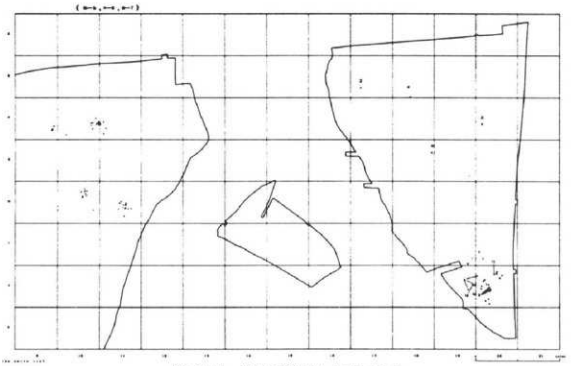
I-7 区西側にて検出。1号土坑は一辺 0.8m強の隅丸方形状で検出面より深さ0.3 mを測る。2号土坑は径約1mの円形で深さは0.55mである。1号土坑は2号土坑に切られている。1号土坑内からは粗製の深鉢形土器が出土している。13は胴部から内湾気味に立上がり口縁部でやや外反する。口縁部に断面三角形の突帯をもつ。内外面ナデ。14は直線的に立上がり口縁部に断面台形状の突帯を巡らす。内外面ナデ。2号土坑内からは粗製の深鉢形と精製の浅鉢形土器が出土している。15は直線的に立上がり口縁が外反気味となる。口縁部に断面三角形状の突帯を巡らす。外面ナデ、内面条痕のち工具ナデである。16は頸部からあまり間延びしない玉縁状口唇を有する浅鉢形土器。内外面ヘラミガキ。

5号土坑（SJC05）

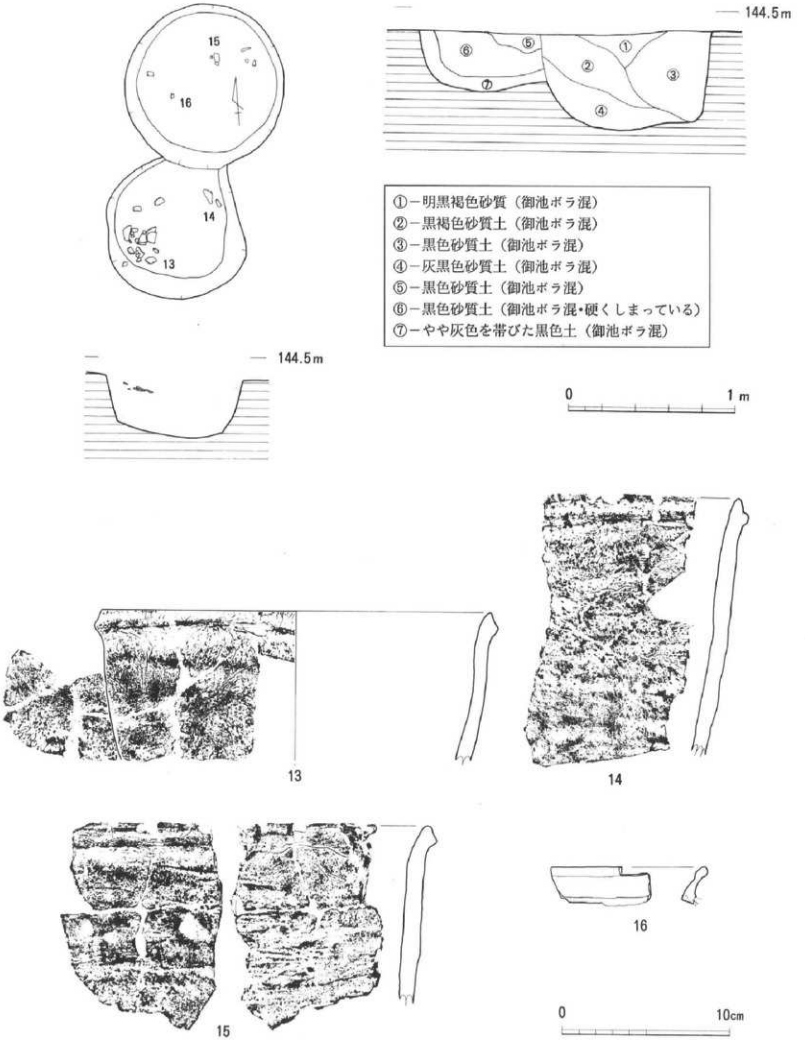
D-19区、径約1mで南北方向がやや長めの円形を呈す。検出面より深さ約0.3mを測る。黒色磨研の浅鉢形土器（17）・(18)、粗製の深鉢形土器（19）及び半粗半精製の浅鉢形土器（20）が出土している。19は口唇が断面三角形をなし、口縁下にかすかに突帯状の肥厚がみられる。黒色磨研は頸部から外反し玉縁状



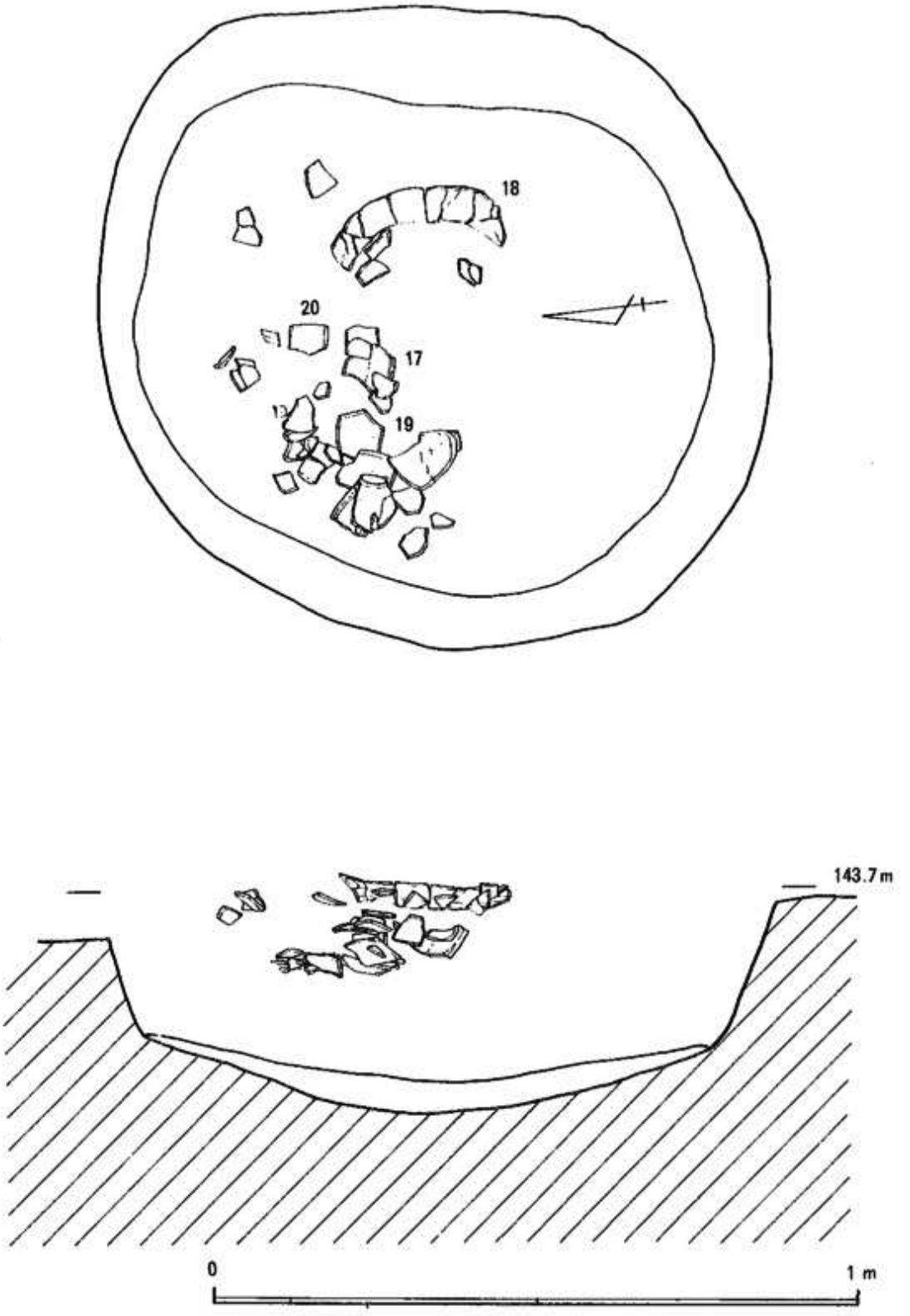
第7図　縄文土器実測図


第6図　縄文後期土器分布図

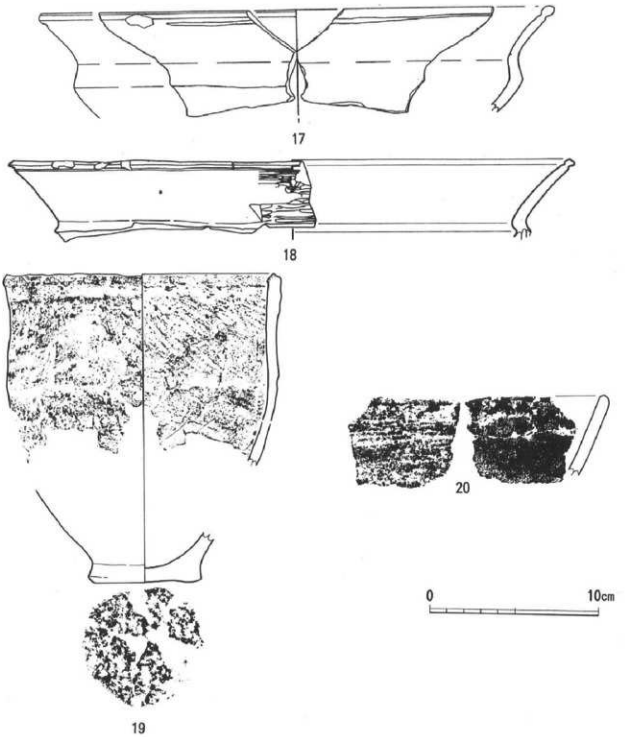
第８図　縄文土器実測図



第９図　縄文晩期１・２号土坑（SJC01・02）及び出土遺物実測図



第10図　縄文晩期５号土坑（SJC05）実測図



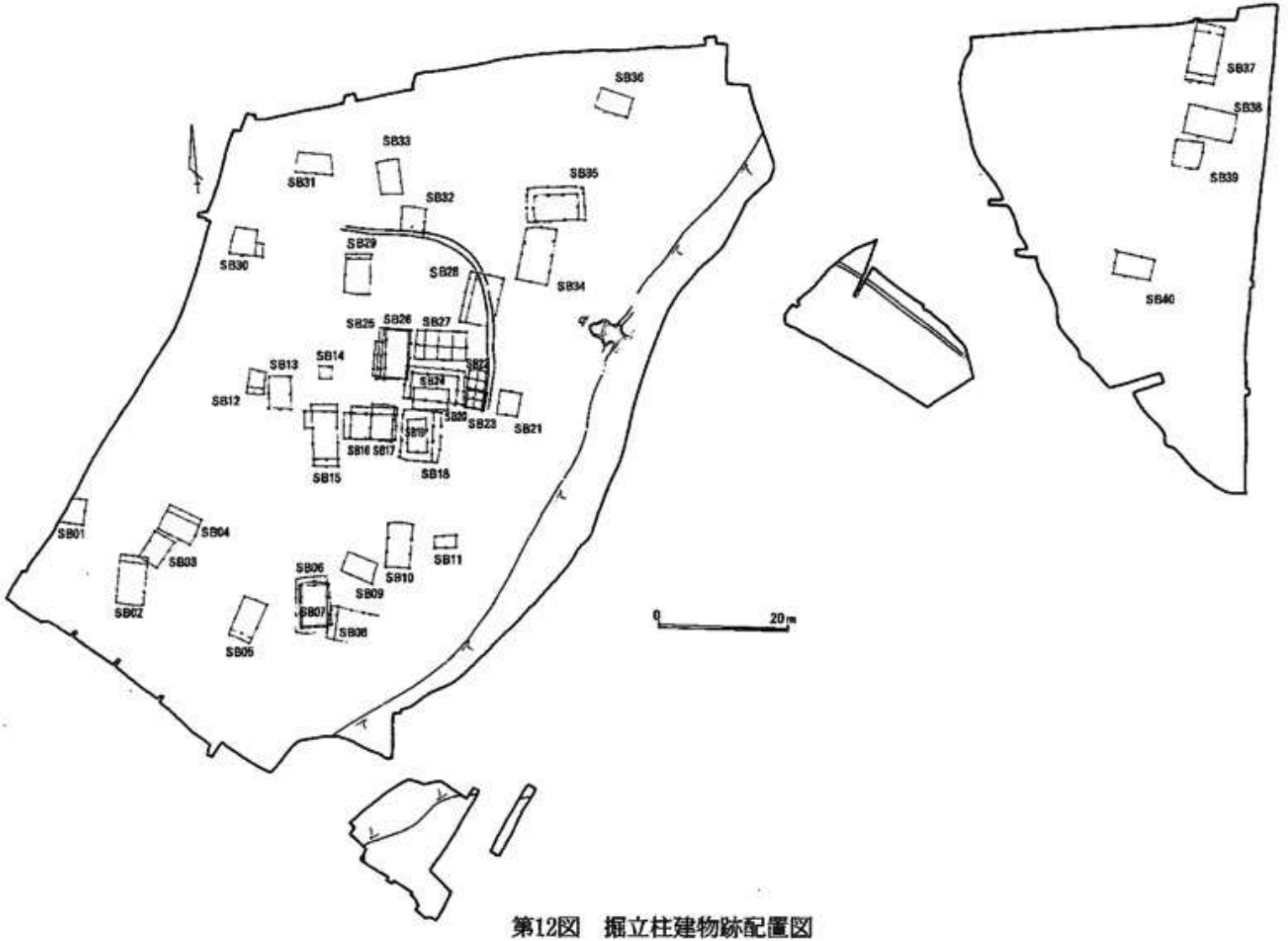
第11図　縄文晩期5号土坑（SJC05）内出土遺物実測図

の口縁内外に1条の浅い沈線を巡らし、頸部の屈曲部に明瞭な稜線をもつタイプ（18）とそうでないもの（17）があり、内外面ともヘラミガキを施す。

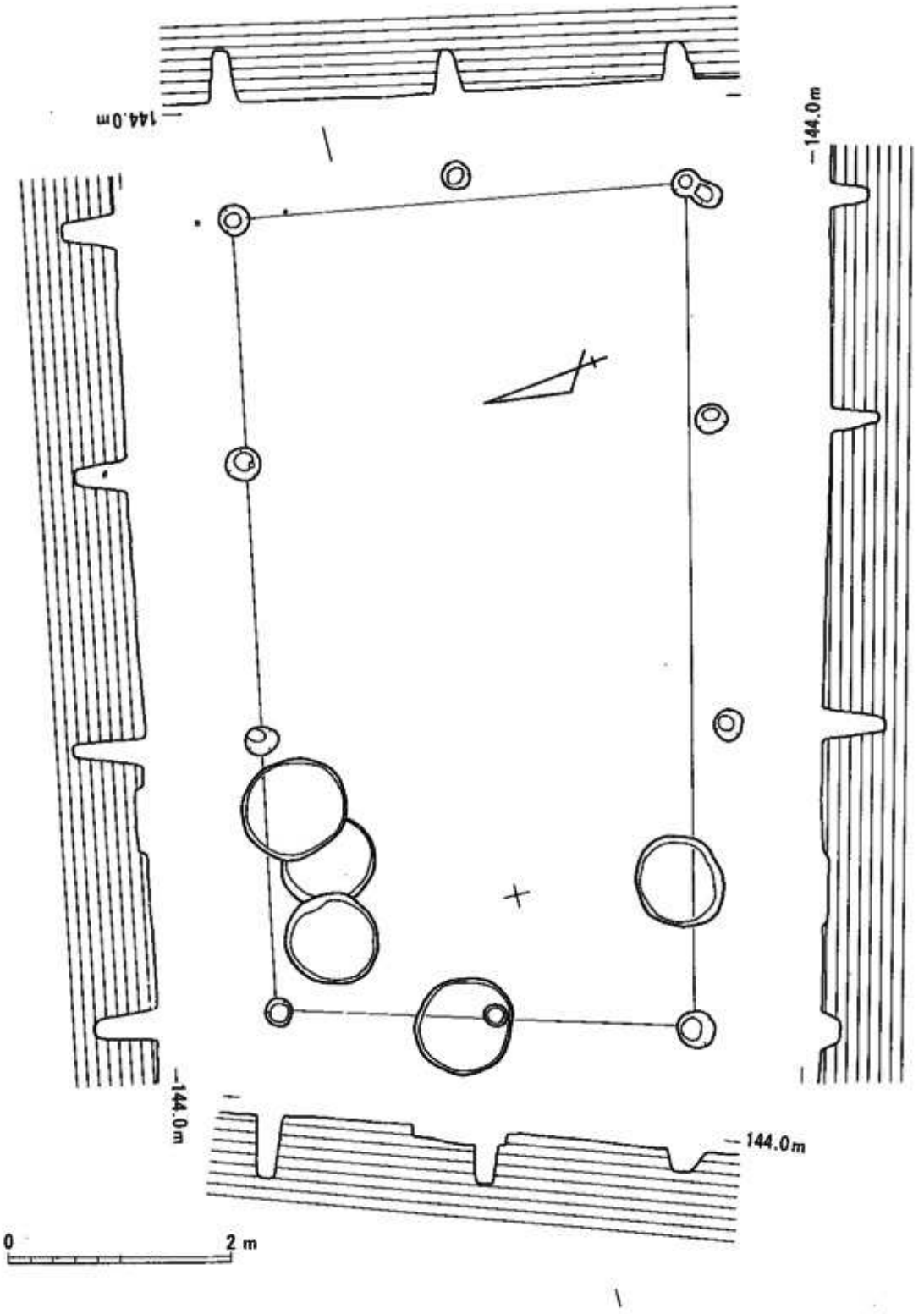
3．歴史時代の遺構・遺物

中世

本遺跡の中心をなす時期である。確認できた範囲で掘立柱建物跡40棟、溝状遺構2条、木棺土壙墓1基、階段状遺構1基、畑跡（畝状遺構）等が出土している。掘立柱建物跡は、柱穴埋土の切合いや建物の桁・棟の方向から数グループに分けられ、建物の規模、配置などを含めた時間的変遷が可能である。さらに、集落の最盛期には屋敷の周囲に溝を巡らしていたと思われる。また、木棺土壙墓の規模も大きく、出土した遺物は質量ともに特筆できる。そのほか、調査区内に井戸がまったく出土していないことから、階段状遺構は水汲み場的機能を果たし、往

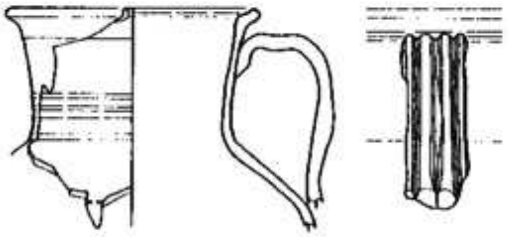


第12図　掘立柱建物跡配置図



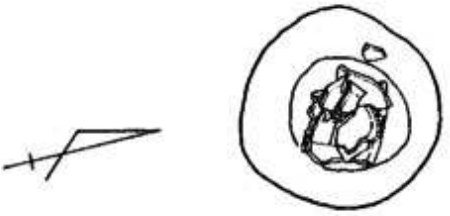
第13図　38号掘立柱建物跡（SB38）実測図

21

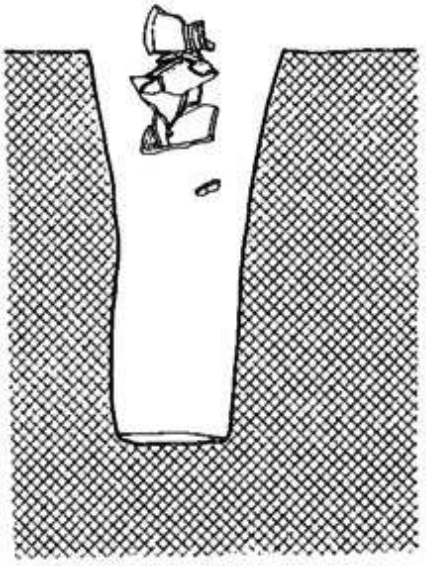


22

0 10m

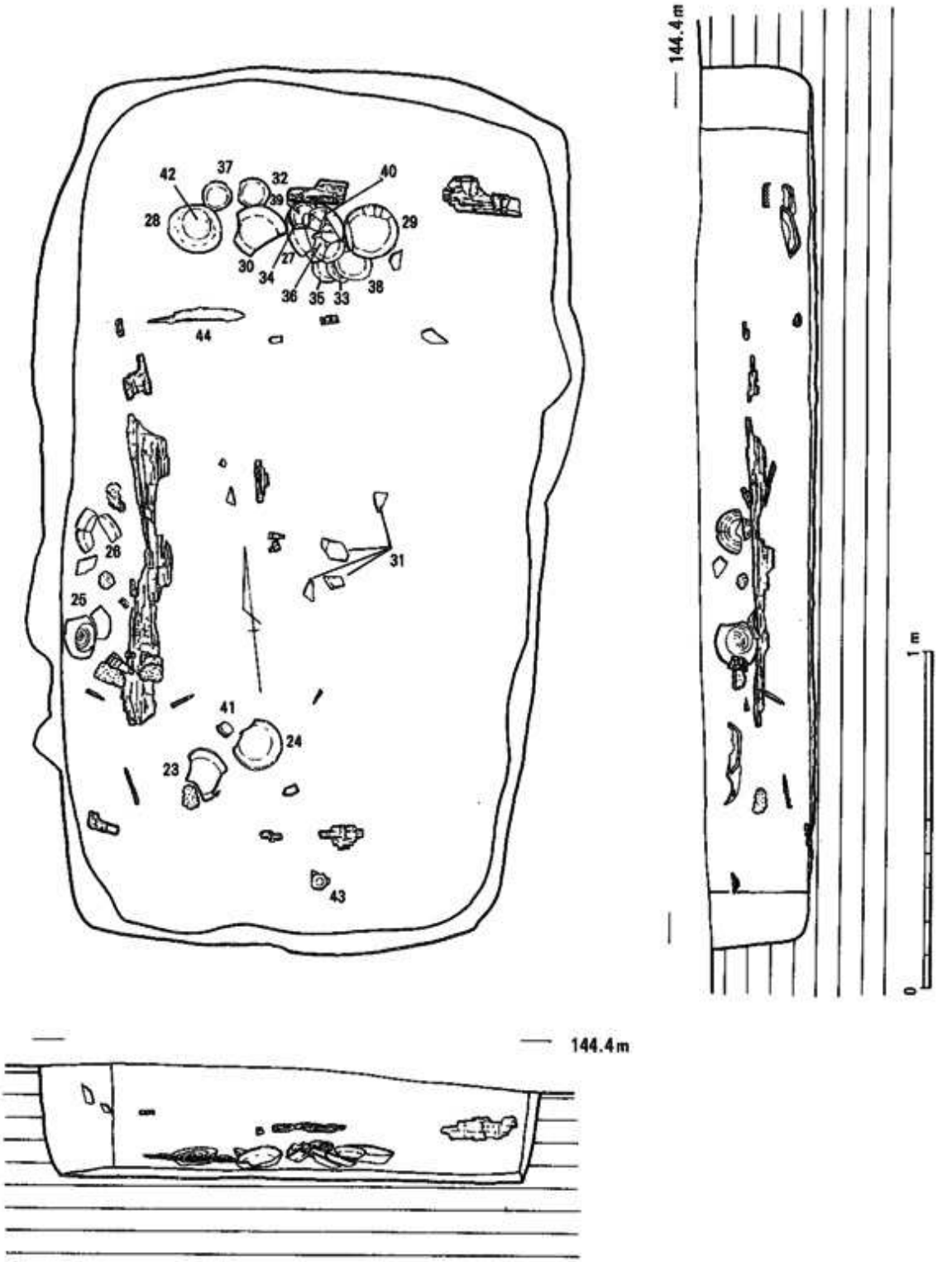


144.0m

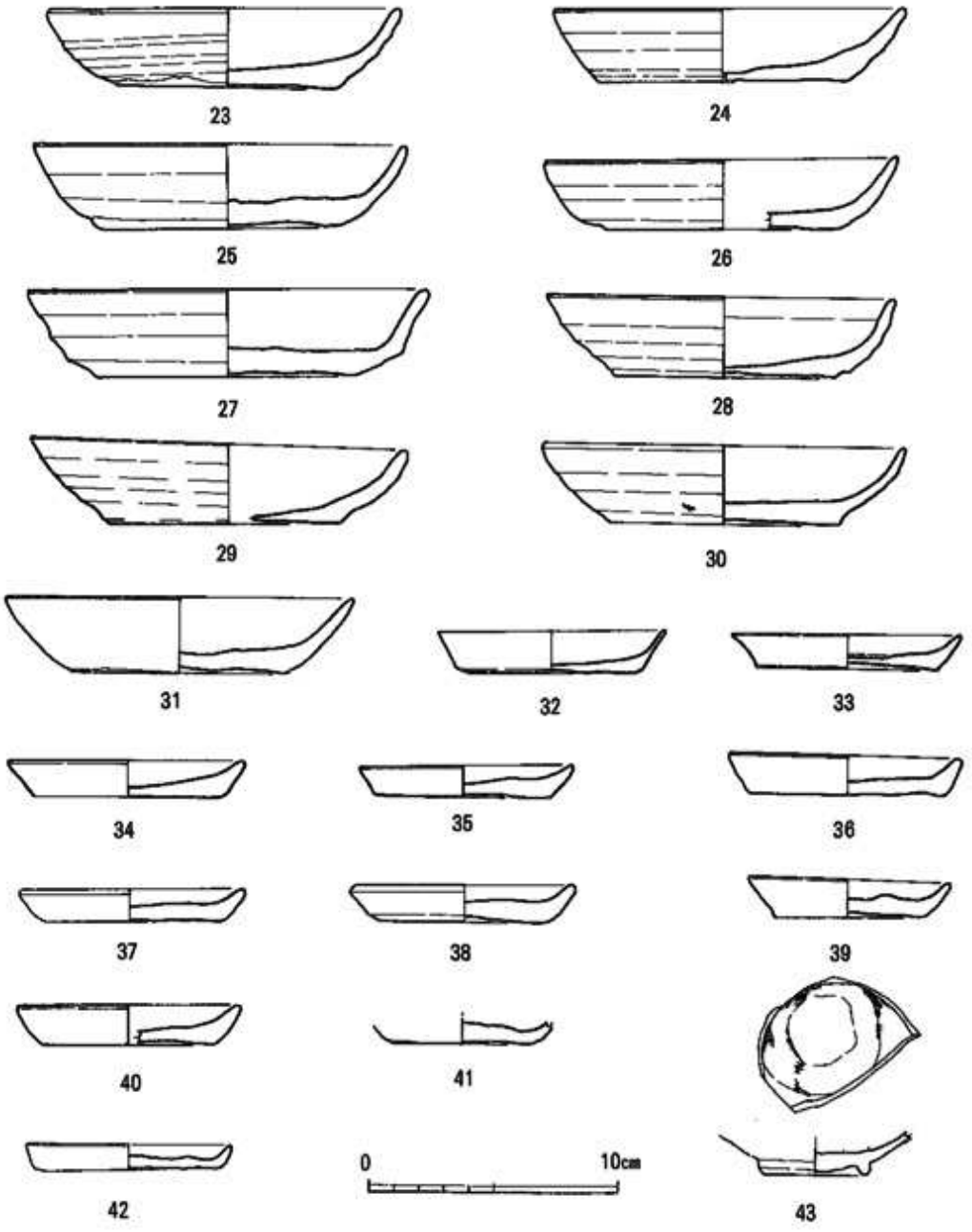


0 20cm

第14図　38号掘立柱建物跡柱穴内出土遺物実測図



第15図　1号木棺土壙墓（SC01）実測図



第16図　1号土棺土壙内出土遺物実測図－1

時は小川から飲料水等を供給していたと考えられる。畑跡（畝状遺構）はA地区の南側とB地区で部分的に確認した。白ボラは畝間に堆積しており、検出状況は白ボラと黒色土とが縞模様となっている。また、白ボラと黒色土の縞には最低二方向走行がみられ、走行方向は道路に対して直角ないし平行関係である。

掘立柱建物跡（略記号　SB）

A地区36棟、D地区4棟計40棟の掘立柱建物跡を検出した。すべて梁は2間で桁行が2間、

3間、4間に分けられる。そのうち総柱のもの2棟(SB22・SB27)、ほか庇付きは一面(SB02・SB04・SB05・SB12・SB18・SB25・SB26・SB28・B29)、二面(SB15・SB16・SB37)、三面(SB06・SB24・SB35)のものに細分できる。また、SB05・SB36は柱穴径10cm前後と小さく、掘方が槍先状を呈する。簡易な建物であることが想像される。

38号掘立柱建物跡（SB38）

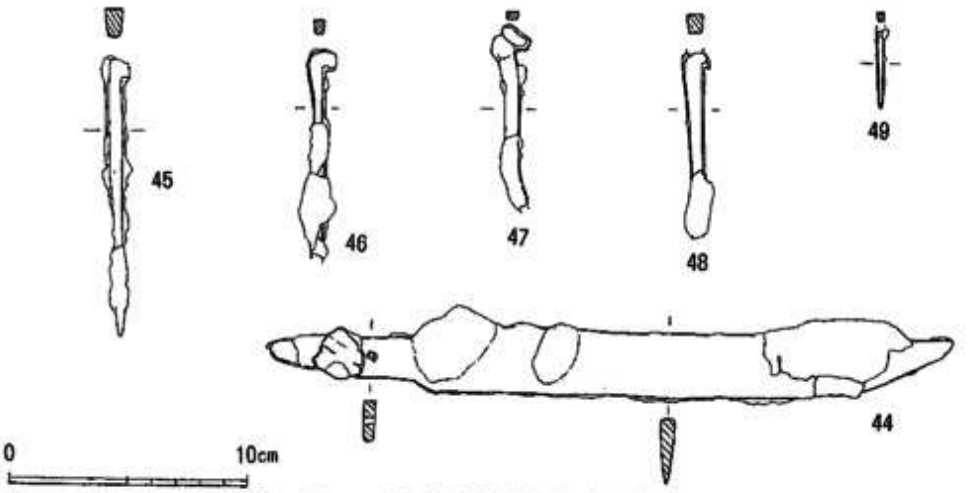
桁行3間、梁間2、棟は東西方向である。北東隅の柱穴より青磁水注（22）と東播系こね鉢（21）が出土。両者とも体部下が欠損している。

1号木棺土壙墓（SC01）

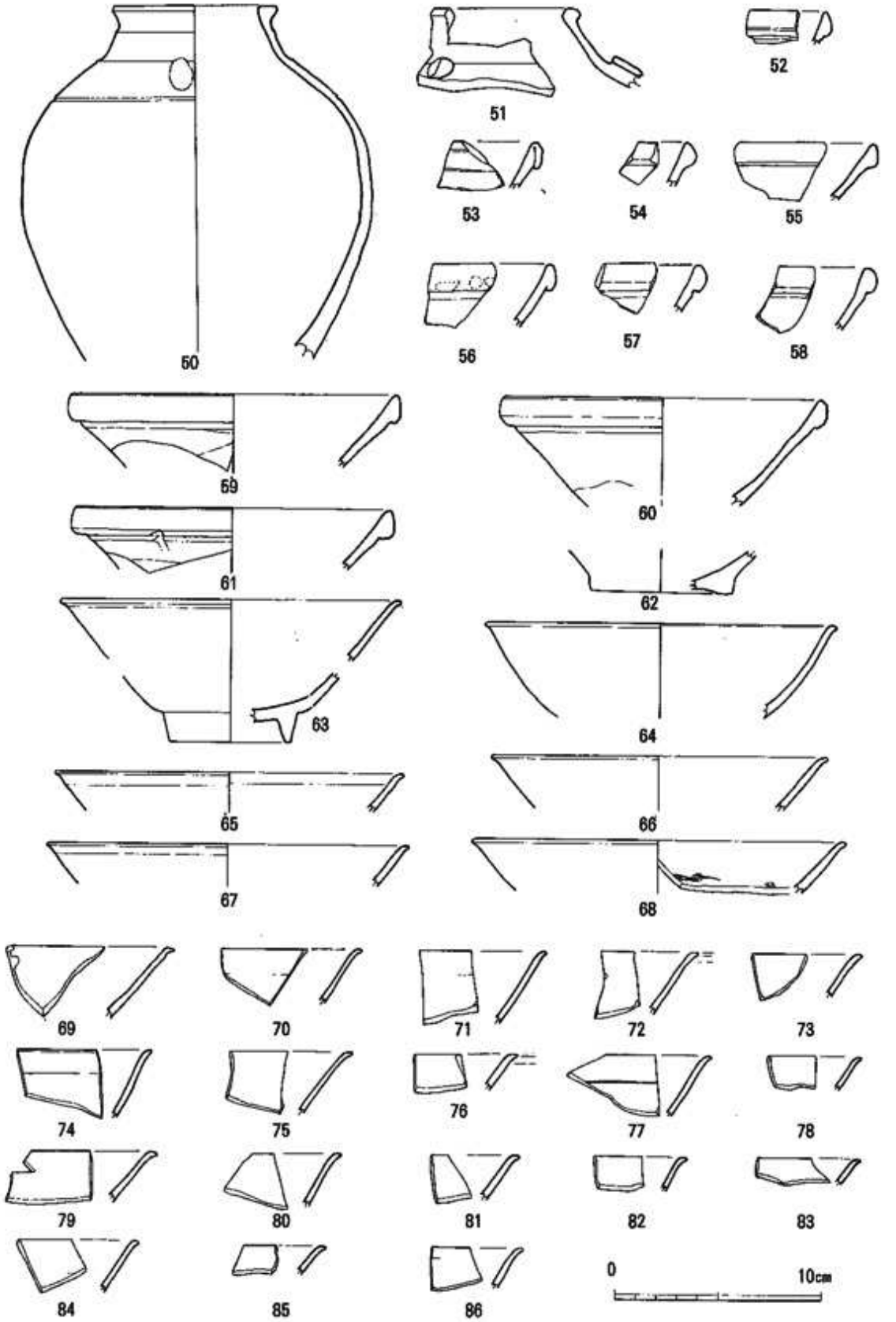
A地区K・7区出土、土壙の規模は南北方向2.6m、東西方向1.5mほどの方形を呈し、検出面からの深さ約0.33mである。土壙内には木棺による埋葬をおこなった痕跡があり、部分的にではあるが炭化した材が方形状に遺存し、推定南北方向 2.0m、東西方向 1.0mほどを測る。副葬品は短刀1、土師器20（坏9・小皿11）、炭化米4、そのほか、釘4が出土している。副葬品は出土部位により、棺内副葬と棺外副葬に分けられ、短刀・土師器（坏5・小皿10）が前者、土師器（坏4・小皿1）・炭化米が後者である。棺内副葬の土師器は31を除けば北側に重ねられた状態で、短刀(44)は土師器の中央側に切先を東方向に向けて、31は中央付近の床面直上で伏せた状態で各々出土している。また、棺外は中央西側縁に集中しており、土師器とおにぎり状の飯を供献したと思われる。人骨は全く遺存していなかったが、副葬品の出土位置から頭部を北にして埋葬されたと推定する。白磁皿43は見込みが掻とられ部分的に煤の付着がみられる。出土部位は検出面に近く、ほかの遺物に比べ底部のみで白磁の副葬傾向からすると流込みの可能性も否定できない。19号掘立柱建物跡（SB19）との併存関係は不明である。

近世

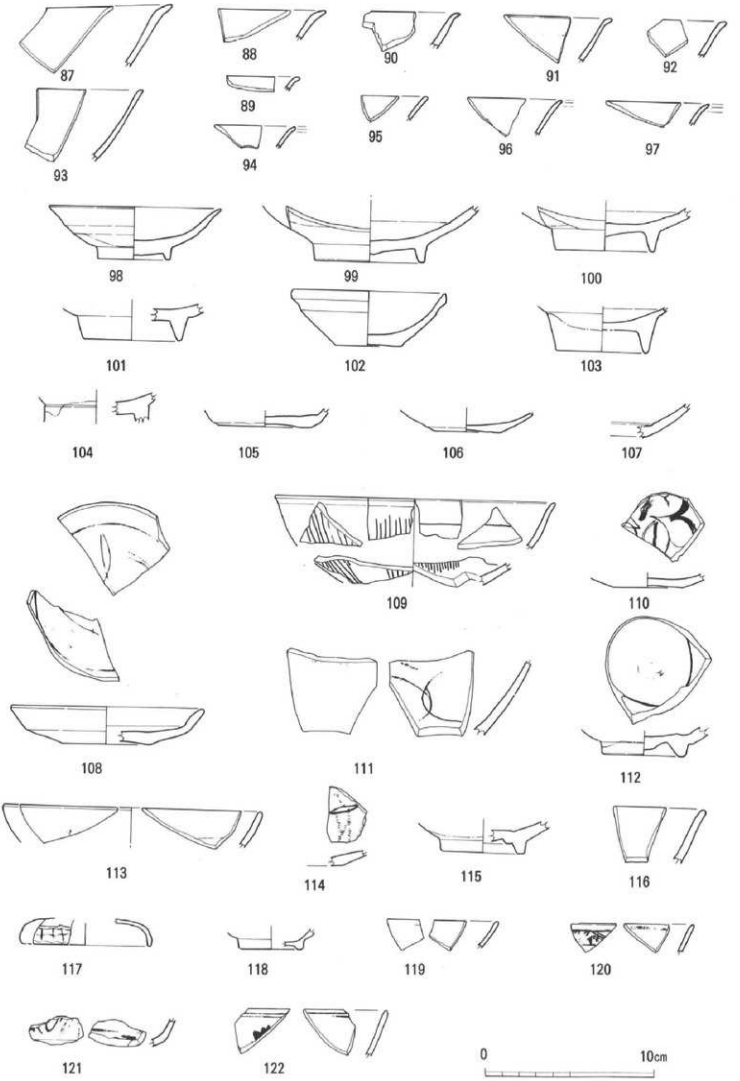
遺構については道路跡、溝状遺構等が出土している。遺物は肥前系や薩摩系の陶磁器が出土している。道路跡は調査区域A地区の東側微高地端部を南北方向にほぼ一直線に延び、南側裾野で西に折れそのまま西走する。言い換えれば、旧小川沿から南側台地裾野に道路は存在して



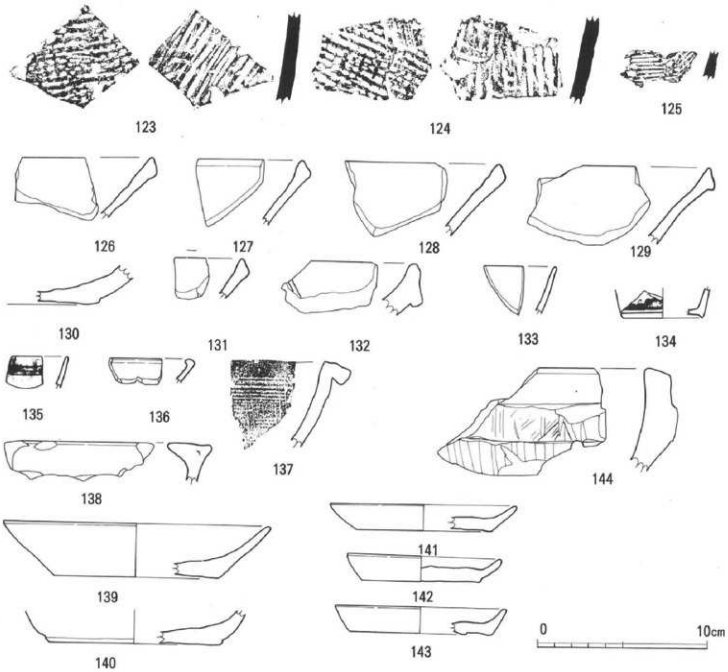
第17図　1号木棺土壙内出土遺物実測図－2



第18図　その他の遺物実測図－1



第19図　その他の遺物実測図－２

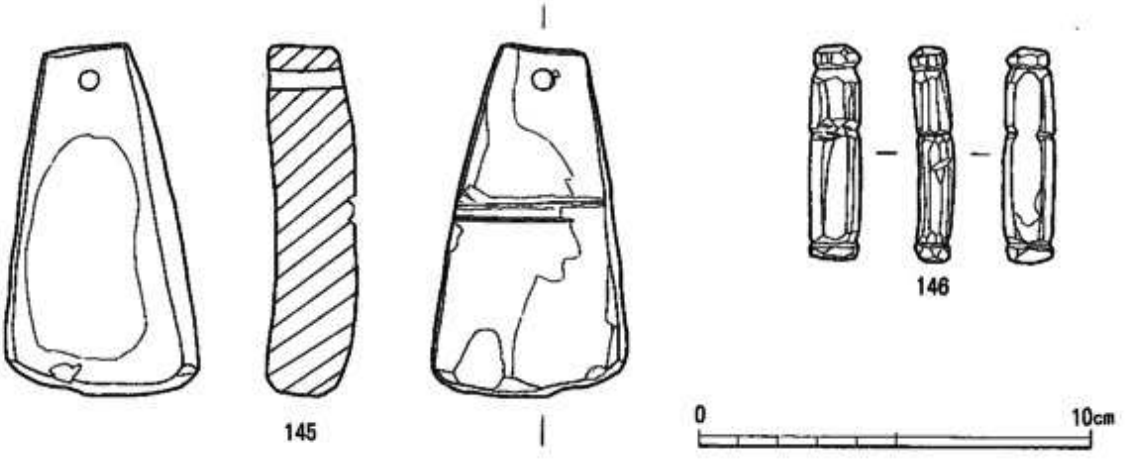


第20図　その他の出土遺物実測図－3

いたようだ。道路の西側部分は微高地（地表面）を約0.2～0.3m掘下げ、約2～3m幅の赤色した硬化面をもつ。東側は0.5m間隔ほどのピット列が道路に沿って並んでいる。ほか、近世以降の溝状遺構が都合5条確認されている。

その他の遺物

古代末から近世までの各時代の遺物を若干ではあるが掲載した。50・51は青磁四耳壺、52～62は玉縁口縁の白磁碗、63～97は外反りの白磁碗（100・101・103・104は外反りの底部）、108・109・111・113・114は同安窯系（櫛描文）の青磁皿と碗、110は画花文の白磁碗、116は青磁碗（明代）、117・118は青白磁合子の蓋と身、119～122は青花碗と皿、123～125は須恵器、126～131は東播系こね鉢、132は備前すり鉢、133～136は肥前系、137・138は薩摩系、139～143は土師器の坏と小皿である。144～146は滑石製石鍋の転用品で、144は鍔の部分が削り取られている。用途不明。145は温石。146は棒状製品である。

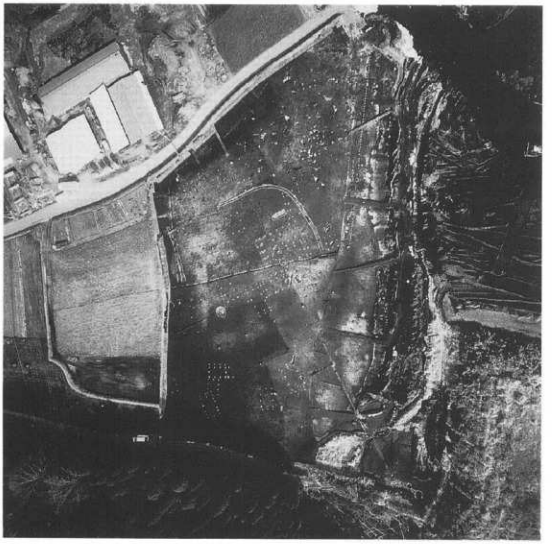


第21図　その他の遺物実測図－4

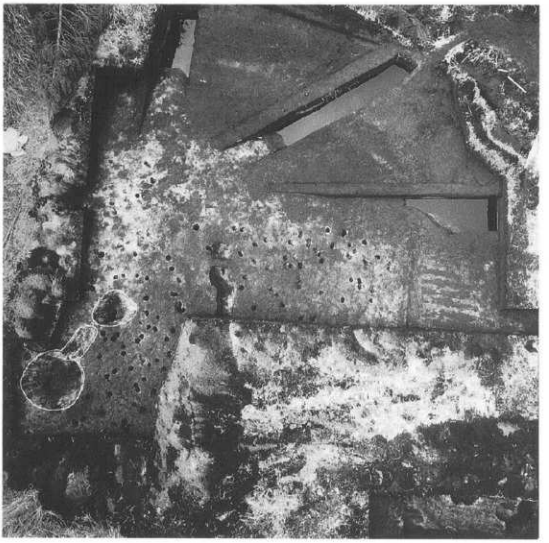
Ⅲ．まとめにかえて

正坂原遺跡は縄文後晩期、中近世の複合遺跡で特に晩期と中世期に遺跡の主体がある。後期の土器は凹線文・磨消縄文系の綾式と指宿式、貝殻文系の市来式土器等である。指宿式及び市来式土器と綾式は分布を異にし、前者はD地区、後者はA地区である。また、綾式土器は出土状況に特徴をもち、従来のほかにキザミ目のある突帯文を巡らすタイプ(06)を伴うようである。黒川期の土坑は、口縁部が肥厚しない粗製深鉢形と頸部から直線的に立上がる口縁をもつ精製浅鉢形が共伴し(SJC05)、断面三角形状の突帯を口縁部にもつ粗製深鉢形と頸部からあまり間延びせずに口縁に至る精製浅鉢形土器が共伴するようである(SJC02)。また、中尾山・馬渡遺跡出土の土坑と時期を同じくし、横市川流域における同時期の遺跡の拡がりを確認した。ほか、少量ではあるが晩期末の刻目突帯文土器も出土している。

本遺跡の中心をなす中世期のおおよその時期幅は、出土した遺物から12世紀中後半を中心とし、下限は文明期の桜島起源の火山灰（白ボラ）降下以前に限定できるようである。また、都城盆地を東西方向に走行する大淀川支流沖水川及び横市川流域の南岸、つまり、市街地を形成する台地北側縁部に存在する同時期の遺跡群をつなぐ貴重な遺跡でもある。検出された40軒の掘立柱建物跡は建物の棟方向や切合い関係等により数時期に分類され集落の変遷（盛衰）や形態を辿ることが可能だと思われる。調査区域中央を流れる小川を飲料水として利用したり、建物周辺の空間を畑地として利用したりするなど往時の生活環境も垣間見え、時代がくだり、畑地としての土地利用のほかに小川添いに道路を通すようになる。これら遺跡の性格を今後検討し本報告に期したい。



A 地区全景

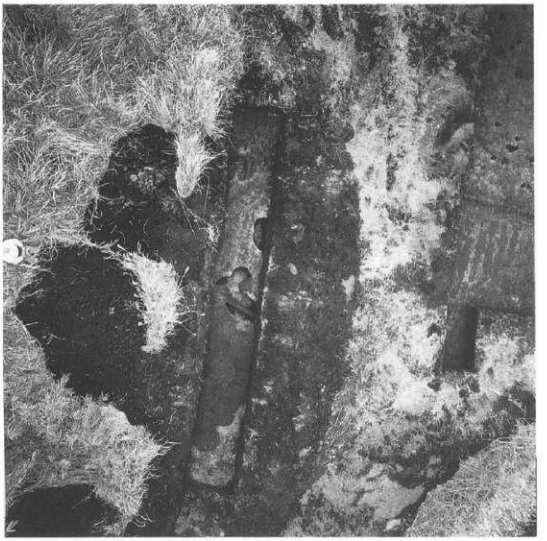


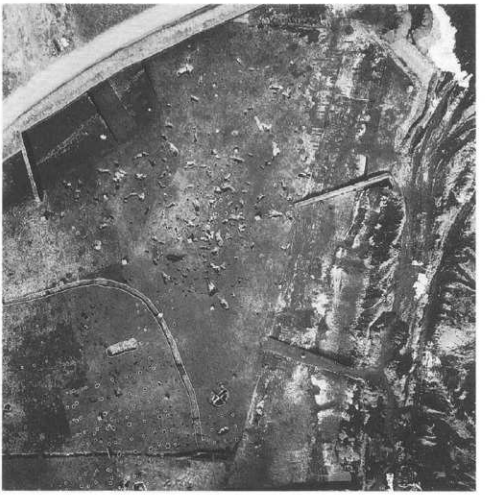
B 地区全景

写真2

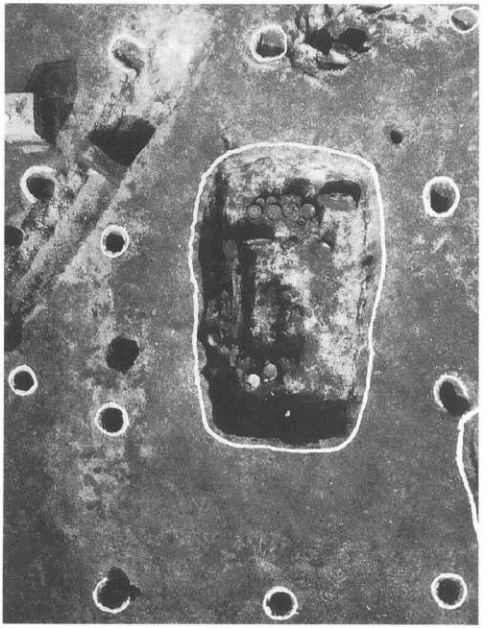
D地区全景

C地区トレンチ

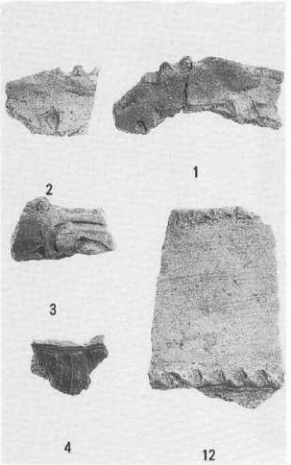


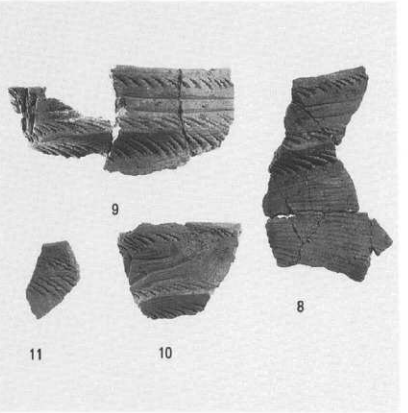


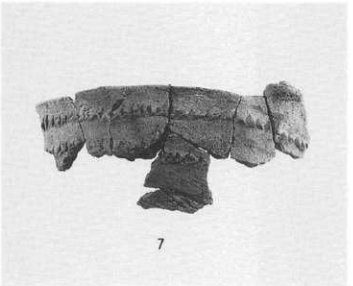
A地区道路

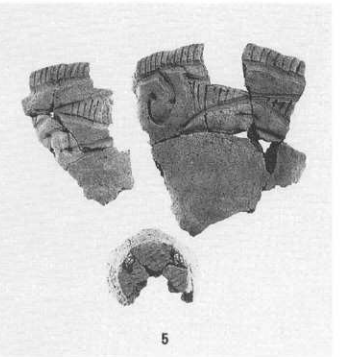


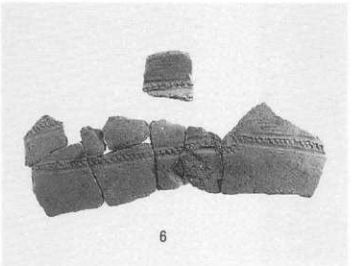
SC01

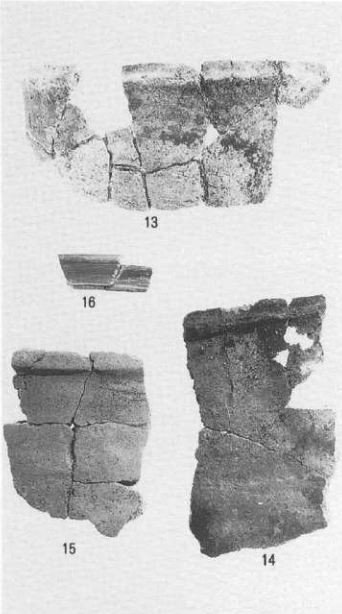

2
1
3
4
12

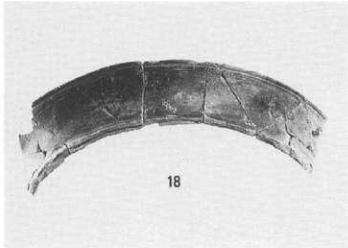

9
8
11
10

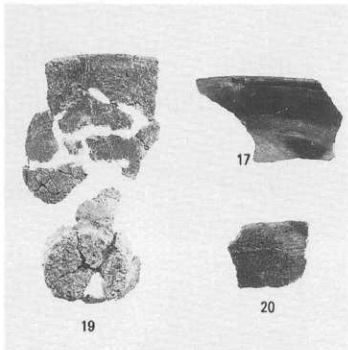

7

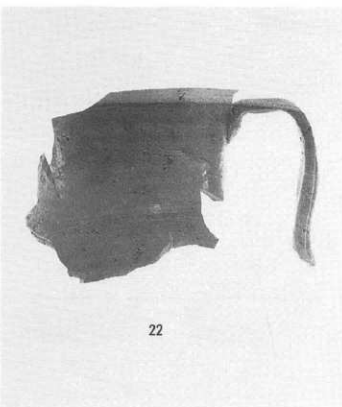

5

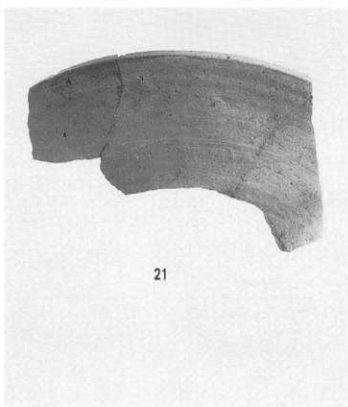

6

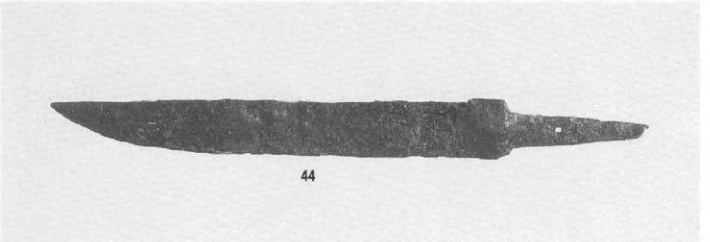

13
16
15
14

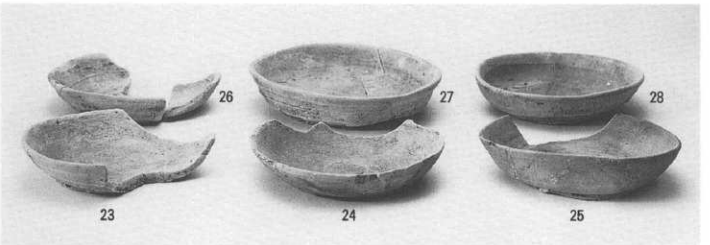

18

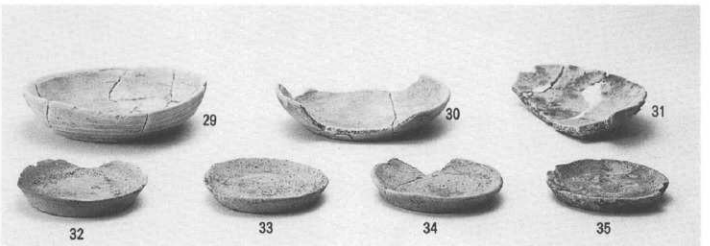

17
19
20

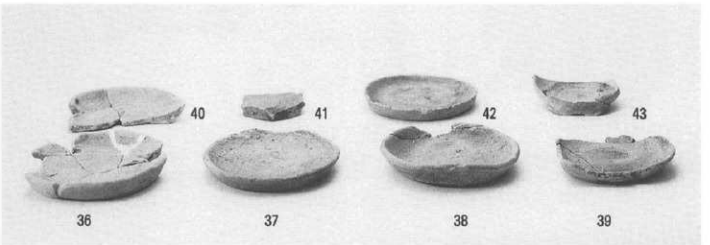

22

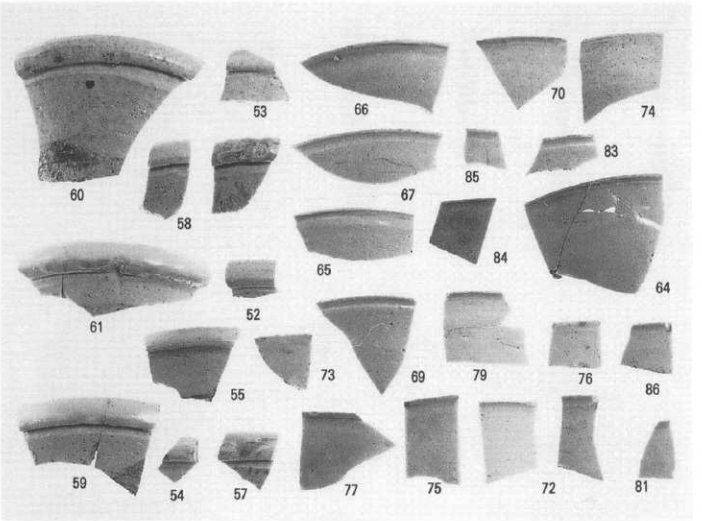

21

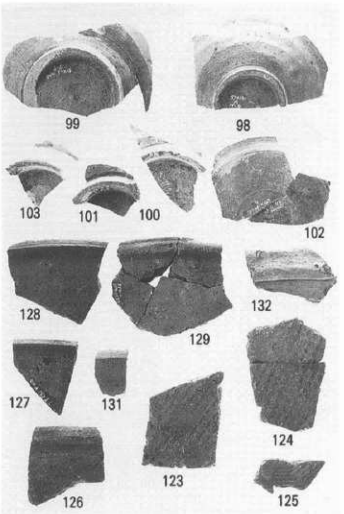

44

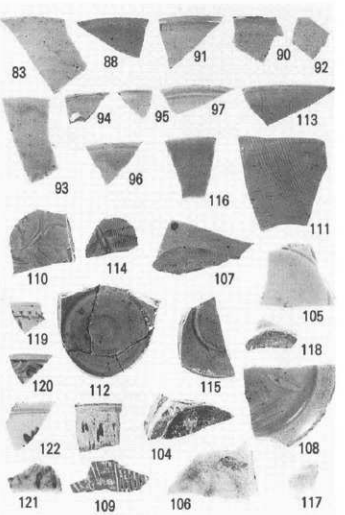

26
27
28
23
24
25


29
30
31
32
33
34
35


40
41
42
43
36
37
38
39


53
66
70
74
60
58
67
85
83
65
84
64
61
52
55
73
69
79
76
86
59
54
57
77
75
72
81


99
98
103
101
100
102
128
129
132
127
131
124
126
123
125


83
88
91
90
92
94
95
97
113
93
96
116
111
110
114
107
105
119
118
120
112
115
122
104
108
121
109
106
117